

第45回少年の主張全国大会

— わたしの主張 2023 —

報告書

伝えてみよう。
わたしの想い。聴いてみよう。
あなたの想い。



National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

はじめに

少年の主張全国大会は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により、昨年度までの3年間はWEB開催という形で実施してまいりました。第45回目となる今回、4年ぶりに集合開催での実施を計画し、佳子内親王殿下の御臨席を賜り、無事に開催することができました。

本大会は、中学生が日頃の生活の中で感じた家族や友人、地域の人々に対する思いや感謝、あるいは感動したり感銘を受けた経験、更には将来への決意などを自分の言葉で表現し、同世代のみならず社会に向けて発表する場として、昭和54（1979）年の「国際児童年」を記念してスタートしました。爾来、この大会を通して、多くの中学生の共感を呼び、また大人の方々に現代の中学生に対する理解と関心を深めていただきたいとの思いも込め、毎年実施されています。

今年は、全国3,884校の中学校から、約38万人の中学生が応募してくれました。そして、全国大会では、各都道府県大会により選抜された47名の中から、有識者や過年度大会受賞者等で構成される審査委員会により選ばれた12名の中学生が、舞台の上で堂々と主張を発表してくれました。

内閣総理大臣賞を受賞した鳥取県代表の矢曳 未来（やびき みらい）さんは、「私が歩む夢への道」と題し、交通事故で障がいを負い、できないことが増えたものの、先生や友達に支えられながら色々な活動に取り組む中で、自分を認める気持ち生まれ、将来は自分が支える側になるために養護学校の教員を目指したいと決意を述べました。

文部科学大臣賞を受賞した山形県代表の冨樫 蒼汰（とがし そうた）さんは、「大切な家族」と題し、スペクトラム自閉症の弟の行動や、弟に対する母親の態度などにいら立ちを覚えるものの、兄との対話を通じて弟に責任はないことに気づき、そのような人たちを手助けできるようになりたいと述べました。

国立青少年教育振興機構理事長賞を受賞した愛知県代表の竹内 愛子（たけうち えこ）さんは、「ガチャガチャ言っても始まらないか！」と題し、近年よく耳にする「〇〇ガチャ」という言葉に対する疑問を呈し、人生の中で自分の意思で選ぶことができないことは多くても、それを誰かのせいにするのではなく、自分の気持ちと自分の責任で人生を歩いていくことが大切なのではないかと主張しました。

このほかにも、同じ境遇の人との出会いを通じて社会への恨みを愛に変えるという気持ちに至ったという主張や、国と国との関係と個人的なつながりの違いについて述べたもの、国際紛争に翻弄された経験など、今大会も多種多様な発表が見られました。

この報告書では、全国大会で発表された12作品をはじめ、各都道府県の代表となられた47作品全てを掲載しています。いずれも中学生らしい澁刺とした感性豊かな文章で綴られています。一人でも多くの方々に彼らの主張をお届けできれば幸いです。

最後に、本大会の開催に当たり、応募してくださった全国の中学生、地方大会の開催に多大なご協力をいただきました各都道府県並びに青少年育成会議、本事業への助成をいただいた上廣倫理財団、ご後援、ご協力を賜りました宮内庁、こども家庭庁、文部科学省をはじめとする関係機関、団体等の皆様に心から感謝を申し上げます。

令和6年 3月
国立青少年教育振興機構
理事長 古川 和



もくじ

審査委員長講評	1
少年の主張全国大会風景	2
少年の主張全国大会出場者の発表風景	3
少年の主張都道府県大会風景	6
少年の主張全国大会出場者の発表作品	7
<内閣総理大臣賞 鳥取県代表 矢曳 未来さん>	8
<文部科学大臣賞 山形県代表 富樫 蒼汰さん>	9
<国立青少年教育振興機構理事長賞 愛知県代表 竹内 愛子さん>	10
<審査委員会委員長賞 北海道代表 三浦 かなさん>	11
努力賞授与式・努力賞受賞者のプログラム	20
少年の主張全国大会努力賞受賞作品	21
実施概要	57
審査委員の感想	60
視聴者アンケート・コメント抜粋	65
少年の主張全国大会を振り返って<参考資料>	67
第46回少年の主張全国大会 開催のお知らせ	77



こちらが「少年の主張全国大会」の会場です。



受付の様子



努力賞受賞者の作文展示の様子



審査委員長講評



長いこと審査委員をつとめさせていただき、審査基準を超えて感じたのは、中学生の皆さんの感度の良さです。未曾有の大震災や気象災害等で傷つき、コロナ禍で自由や希望を制限されざるを得ず、世界を見渡せばウクライナやパレスチナや民族の弾圧など心の痛む状況が繰り返されている中、時代のうねりをどう自分のものにするのか。

紛争や災害といった自分ではどうにもならない外部情勢、あるいは人間関係や地域風土、慣習などの自己を取り巻く環境等々から大きなテーマにぶつかった時、自分の内面をどう見つめ、向き合い、掘り下げ、次の一步を踏み出していくのか。皆さんが正面から挑んでいる姿に感動を覚えます。

抱えているテーマはもちろん、様々です。今回は。

総理大臣賞の矢曳さん、交通事故で不自由になってしまったことを始めは嘆いたけれど乗り越えた。「できない自分」を受け入れるという勇氣は言葉にできないくらい賞賛したいものです。ゆっくりと一言ずつ発するスピーチも美しく、詩をきいているようでした。

文科大臣賞の富樫さん、弟さんへの思いを自己内面化した心の中の大きな葛藤はあなたを一層強く優しくしましたね。審査委員長賞の三浦さん、恨みを愛に変えることは簡単ではありません。立派でしたね。

ヘッドネーションを通して自分らしさとは何かを考え、かわいそうという見方が一方的であることに気づいた高橋さん、ランドセルをアフガニスタンに送り、SDGs を知識から行動にうつした箕輪さん、虐待のニュースに対する母のコメントに衝撃を受け、資料を調べまくって将来への道を探った福江さん、いずれも思いを行動にうつし、さらにそこからまた気づきを得るというPDCAを回しています。

井出さんは視力の低下を言い訳にしないという強い決意で自立を目指し、吉越さんは車椅子からの気づきを周囲の人々と如何に共有するか努力していらっしゃる。いずれも、今の社会で最も重要な課題の一つであるコミュニケーションの力を自分なりに高め、実践しています。

世界に目を向けると、根本さんは中国人の親友との心遣いのやり取りで国家と国民は別物だと早くから気付いていらっしゃる。翻ってこの友情が将来の国家間関係にきっと寄与すると確信します。小林さんは台湾の親切をバトンで渡そうと決意し、ナジュマさんは祖母の悲劇から日本にしながら当事者として平和を考えていらっしゃる。文字通り、Think globally act locally です。

理事長賞の竹内さんは日常の通り過ぎてしまいそうな場面に足をとめて、いかにも今の風潮に釘をさしてくれました。

このように、発表者はじめ応募してくださった全国 38 万人の皆さん一人一人が、誰にも真似できないその人ならではの素晴らしい主張をされています。

そして、いずれも中学生らしいみずみずしい感性に溢れています。その感性の本質とは何に基づいているのだろうかと考えた時、気づきました。皆さんには無限の可能性があるということです。しかも豊かな個性に支えられた可能性です。意識、無意識を問わず、この可能性を信じられるからこそ、主張が感動を与えるのでしょうか。

あなたになれるのはあなただけです。大きな夢を実現してってください。

第 45 回少年の主張全国大会 審査委員長
宮崎 緑 (千葉商科大学・国際教養学部教授)

少年の主張全国大会風景

令和5年11月12日（日）に国立オリンピック記念青少年総合センターにて「少年の主張全国大会」を開催しました。



佳子内親王殿下の御臨席を賜りました。



会場内の様子



会場のみなさんから発表者12名に激励の拍手が送られました。
この後、いよいよ発表です！



島根県代表 高橋 りりあさん



鳥取県代表 矢曳 未来さん



福岡県代表 福江 日陽莉さん



鹿児島県代表 箕輪 碧泉さん



山形県代表 富樫 蒼汰さん



北海道代表 三浦 かなさん



長野県代表 井出 真奈史さん



神奈川県代表 小林 慈月さん



茨城県代表 根本 泰誠さん



京都府代表
アブドゥル フセイン・ナジュマさん



愛知県代表 竹内 愛子さん



富山県代表 吉越 帆高さん



アトラクション（書道パフォーマンス） 東京都立板橋有徳高等学校の久保田 瑛愛流さん

審査発表・表彰式



〈内閣総理大臣賞〉

鳥取県代表 矢曳 未来さん



〈文部科学大臣賞〉

山形県代表 富樫 蒼汰さん



〈国立青少年教育振興機構理事長賞〉

愛知県代表 竹内 愛子さん



〈審査委員会審査委員長賞〉

北海道代表 三浦 かなさん



こども家庭庁 長官官房長
小宮 義之様からのお祝いの言葉



文部科学省総合教育政策局長
望月 禎様からのお祝いの言葉



宮崎 緑 審査委員長の講評



第45回少年の主張全国大会 発表者・審査委員・来賓のみなさん



国立青少年教育振興機構努力賞受賞者のうち来場した30名のみなさん

少年の主張都道府県大会風景

宮城県大会



宮城県代表 入駒 奏羽さん



宮城県大会 記念撮影の様子

栃木県大会



栃木県代表 星野 みおりさん



栃木県大会 記念撮影の様子

福井県大会



福井県代表 向野 一愛さん



福井県大会 記念撮影の様子

高知県大会



高知県代表 和田 陽南子さん



高知県大会 記念撮影の様子

熊本県大会



熊本県代表 平 歩依さん



熊本県大会 記念撮影の様子

少年の主張全国大会出場者の発表作品

- 誤字・脱字以外は原文のまま掲載しました。
- 全国大会出場者全員に、国立青少年教育振興機構奨励賞が授与されました。

内閣総理大臣賞

【中国・四国ブロック】

鳥取県 米子市立東山中学校 3年
矢曳 未来 『私が歩む夢への道』

文部科学大臣賞

【北海道・東北ブロック】

山形県 酒田市立第一中学校 3年
富樫 蒼汰 『大切な家族』

国立青少年教育振興機構理事長賞

【中部・近畿ブロック】

愛知県 常滑市立常滑中学校 3年
竹内 愛子 『ガチャガチャ言っても始まらないか!』

審査委員会委員長賞

【北海道・東北ブロック】

北海道 下川町立下川中学校 3年
三浦 かな 『恨みを愛へ』

国立青少年教育振興機構奨励賞

【関東・甲信越静ブロック】

茨城県 潮来市立日の出中学校 3年
根本 泰誠 『真の友情』

【関東・甲信越静ブロック】

神奈川県 横濱中華學院中学部 1年
小林 慈月 『「善意のバトン」をつないで』

【関東・甲信越静ブロック】

長野県 長野県長野盲学校 3年
井出 真奈史 『「自立」というかたち』

【中部・近畿ブロック】

富山県 富山市立芝園中学校 3年
吉越 帆高 『一人の人間として』

【中部・近畿ブロック】

京都府 相楽東部広域連合立笠置中学校 3年
アブドゥルフセイン・ナジュマ 『おばあちゃんが教えてくれたこと』

【中国・四国ブロック】

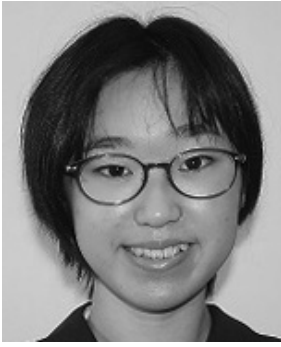
島根県 雲南市立木次中学校 3年
高橋 りりあ 『誰かの「自分らしさ」を支えるために』

【九州ブロック】

福岡県 苅田町立苅田中学校 3年
福江 日陽莉 『未来への第一歩』

【九州ブロック】

鹿児島県 いちき串木野市立串木野西中学校 3年
箕輪 碧泉 『循環型社会に向けての責任』



内閣総理大臣賞受賞

私が歩む夢への道

鳥取県 米子市立東山中学校 3年

矢曳 未来

私は障がいを持っている障がい者だ。生まれつきではなく、6年前に交通事故に遭ったことで後遺症が残ってしまったのだ。事故後のショックで歩けなくなった。記憶力が低下した。集中力が続かなくなり、些細なことで疲れて怒りっぽくなった。私はその後遺症を負ったことで、できないことが増えた。生活に関する不自由、勉強に関する不自由、その他色々なことで前の自分のほうが良かったと思う。最近は怒りの気持ちより、悲しみの気持ちが増えたように思う。

私には2つ上の姉がいる。私は今、中学校3年生だから、高校進学を考えたときに真っ先に頭に浮かんだのは姉だった。姉と同じ高校に行きたいと思った。けれど、それはとても難しい選択だと知っていた。私には障がいがあり、姉とは違うからだ。障がいを負ったことで、勉強に集中して取り組むことが難しくなり、できることよりできないことが増えた私に高校進学なんてできるだろうかと考えた。今は自分の体の状態が少しずつわかってきたからこそ言えることだが、私には普通校進学は難しいのだろうと考えている。けれど、前は変わった自分を受け入れられなかった。やれば私はできる。元のように戻れると考えていた。そう思って中学校に通ってきたが、今となってはそれも難しいということを知った。大きくなるにつれ、自分の体がわかってきたからだ。自分を知るというのは、辛いことなのかもしれない。私は、そのことを理解したときから、なんだか体の力が抜けて悲しくなった。私は、もしかしたら小学校から中学校に上がる時、事故に遭う前の自分に戻りたくて、姉と同じ東山中学校を選んだのかもしれない。

そんな理由で選んだ中学校だけど私は今、その選択をして良かった、幸せだと思う。なぜなら中学校に通っていると、先生たちが私を本当に大切にしてくれているということがわかるからだ。それは、私が今、何よりも欲している気持ちだ。また、中学校に通うことで、同級生と一緒に勉強をすることができた。勉強だけではなく、色々なことに挑戦させてもらった。委員会活動や応援団に参加することができた。そしてこの3年間を通して、私は全てが全て融通が効くわけではないということも知ることができた。

私は大人になったら、支援学校や支援学級の教師になりたい。中学校の先生達が私を大切にしてくれているように、私も教師になったら、支援学校や支援学級の子供達を大切にしたい。生まれつきの障がいがあったり、体が不自由で普通校には通えなかったりする子供達に「あなた達には居場所がある、一人ではない」ということを知ってもらいたい。そのために私は自分を見つめ、自分にできることを探していきたい。だから私は、高校は養護学校に行きたい。養護学校で自分の可能性を見つけ、自分にできること、誰かの役に立てることを探していきたい。

私は最初からこのような考えを持っていたわけではない。最近になってやっと「できない自分」を受け入れられるようになってきたのだ。小さい頃から頑固で、これだと決めれば、周りの人の言うことなんて聞かなかった。だから事故に遭って同年代の人達より、できないことが増えたということが、ものすごくコンプレックスだった。

けれど、もうそれは過去の話だ。今の私はこうなのだから仕方がない。この考えは、自分はできないと諦めたのではなく、自分を認めたのだ。私は、私なりの道を歩むことを願う。私は自分の歩幅でゆっくりゆっくり「私の夢」を叶えようと思う。目的地へ時間をかけて進んでゆくカタツムリのように。私の夢はどこまでも続いていく。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は自分が障がい者であるからこそ、障がいを持つ人々の悲しみや将来への不安、また普段の生活での不自由について、より理解をすることができる。だから私は、養護学校に進学し、自分のペースで私の夢に向かって少しずつ努力していきたい。そして、特別支援学級や特別支援学校の教師になり、障がいを持ち支援を必要とする人々の良き理解者になりたい。



文部科学大臣賞受賞

大切な家族

山形県 酒田市立第一中学校 3年

富樫 蒼汰

みなさんは自閉症スペクトラム障害という病を知っていますか？この病の特徴には対人関係を調整することの難しさ、こだわりの強さがあります。先天的なものなので、特性を完全になくすということは困難とされています。僕の弟は去年、この自閉症スペクトラム障害と診断されました。

弟は気に入った音楽や遊びはずっと繰り返し、他を取り入れようとしません。相手の表情を見て相手の気持ちをくみ取ることが難しく友達と度々トラブルになりました。大きな音も苦手です。ただ僕は、そんなこと誰だってあるじゃないか。僕だって空気を読めなくて友達とトラブルになるときだってあるし、好きな音楽は何回も聴く。どうして弟だけそんな病名をつけられるんだ！と怒りさえ覚えました。

とはいえ弟は学校で度々トラブルを起こし、学校からの電話で謝っている母を見ていたので、僕が弟にきつく怒ることも増えました。母はその度に、「本人も精一杯やっているから、責めないであげてね。」というばかりで、弟を叱ることはしませんでした。

ある時、兄弟だけで映画を見に行く機会がありました。大人気アニメの映画公開初日ということもあり、映画館にはたくさんの方がいました。弟もとても楽しみにしていました。チケットを購入し、いざ映画館に入ろうとしたら弟が気持ちが悪く言い出し、たくさんの方がいるところで嘔吐してしまいました。僕も兄も驚いて、苦しんでいる弟を前に何もすることができませんでした。他のお客さんがすぐに駆けつけてくれてその場は収まりましたが、もう映画は始まってしまい、僕も兄も焦りと周りの人に迷惑をかけたという恥ずかしさもあり、苛立ちを抑えることができませんでした。そして弟に対して、

「どうすんなや！！入れないなら帰れ！！」と怒鳴ってしまいました。

家に帰り、事情を母に話しました。母はそんな時も弟を責めることはしませんでした。僕たちには、また今度映画に連れて行くから、今日のことは許してねと謝ってきました。そして弟を抱きしめながら、「怖い思いをさせてごめんね。お母さんも一緒にいけば良かったね。ごめんね。」と涙を浮かべ、ただ謝っているだけでした。僕は我慢していた何かが弾けるのがわかりました。気づいた時には母に向かって叫んでいました。

「なんでお母さんが謝んなや！！悪いのはこいつだろ！！こいつのせいで俺らは恥かいたし、映画も見れなかった！！もうこいつとは絶対に一緒に行かない！！」と。

母の腕の中にいた弟が僕の前に来て、

「蒼汰ごめん。兄ちゃんごめん。ぼくもう映画に行かないから。」と泣きながら言いました。

それから母は約束通り、僕と兄だけで映画を見る機会を設けてくれました。弟は笑顔で手を振り見送ってくれましたが、僕はその後に見た映画の内容がほとんど頭に入って来ませんでした。

帰りのバスの中で兄と、弟のことについて話をしました。あの日、弟は具合が悪くなりたくなかったわけではないこと、僕たちに恥をかかせたかったわけではなかったこと、そして何より、家族の僕たちが弟の理解者でなければいけないことなど。

それから僕と兄は弟が映画を見られる方法を考えました。人混みをさけるために平日の遅い時間で予約をし、具合が悪くなった時のために出口に近い席を選びました。大きい音が苦手なので、耳栓を買いました。

そして当日。弟は最初はとても緊張していましたが、僕たちがいるから大丈夫だと声をかけ、手を繋いで一緒に座って、最後まで映画を見ることができました。映画館を出ると、心配そうに待っていた母に走って行って、

「楽しかった！！最後まで見れた！！」

と嬉しそうに話しました。それを見た僕と兄もガッツポーズをしました。

まだこの自閉症スペクトラム障害についてわからないことは多いけれど、それでもいろいろなやり方で苦手とすることも乗り越えることができると僕は思います。

弟の病気に限らず理解しづらい病気を抱えている人は多くいると思います。僕は弟を通して知ったことを忘れず、手助けを必要とする人に率先して手を差し伸べられる人になりたいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

周りの人には理解してもらいにくい病気を抱えている人、目には見えない病気を抱えている人に届けたいです。僕の弟も自閉症だということは見た目だけでは誰にもわからないと思います。今回この意見文を書き、この文章を読んだ友達や小さい頃から弟を知っている友達から「本当に自閉症なの？」とか、「弟が自閉症なんて知らなかった。」と言われました。僕の主張が、周りに理解されづらい病気を抱えている人たちの「助けてほしい」と声をあげられるきっかけになればいいと思っています。



国立青少年教育振興機構理事長賞受賞

ガチャガチャ言っても始まらないか！

愛知県 常滑市立常滑中学校 3年

竹内 愛子

私の住んでいる町に、大きな商業施設があり、その一角に、それはそれはビックリするくらいたくさんの台数のガチャガチャが置いてある場所があります。いつもそこには、たくさん子ども達や大人の皆さんが集まっていて、みんなそれぞれ自分の好きなガチャガチャを見つけては楽しんでます。中には何回も何回もお金を出して、くり返しくり返しやっている人もいます。自分の納得いく、求めているものが出てくるまで何回もやっているみたいです。お金持ちな人だなあ、って思います。ガチャガチャって何回やったとしても、何が出てくるのか分からないし、ずっとお金をかけてやっていたら絶対にお目当ての物が出てくるという保証もないし、いくらやっても、延々ずっと自分は全然ほしくない！って物が何回も出続けるのかもしれないし、どうやったってどう努力したって、何が出てくるのかは分からないわけで、自分の力ではどうにもならないことなわけで。

そんな、すべて運に任せるしかないガチャガチャに例えて、「〇〇ガチャ」という言葉が出回っていることを、私は最近知りました。スマホで見つけた記事の中に、「親ガチャ」という言葉がありました。「親ガチャ失敗」「親ガチャハズレ」こんな言葉も書いてありました。「先生ガチャ失敗」「先生ガチャハズレ」最初は、言葉の意味が分かりませんでした。楽しいガチャガチャのイメージがあるので、楽しい言葉かと思ったら、決して楽しい言葉というわけではありませんでした。自分はどんな親の元に生まれてくるかを選ぶことはできない。どんな親の元に生まれてくるかで自分の人生も決まってしまう、という考え方をガチャガチャに例えて表している言葉で流行語大賞にノミネートされるほど若者の間で交わされている言葉だそうです。

実際、私自身は使ったことのない言葉ですが、確かによく考えてみると、私たちは父や母をガチャガチャのように選ぶことはできません。生まれたときから、自分を産んで育ててくれる人は決まっているわけで、自分の意志では選べません。私は、この一見楽しそうに聞こえるけど実はグサッと刺さる言葉が、あまり好きになれません。この言葉が、普通に飛び交う世の中がちょっと悲しいな、って思います。自分の人生のうまくいかないところを百パーセント他の人のせいにしてるように聞こえてきて、もうこれからどんなに頑張ったって努力したってそんな無駄だぜ、って誰かに言われているみたいで悲しくなります。確かに、自分がいくら頑張ったってどうにもならないこと、個人の努力を越えたものもたくさんあると思います。私にとっての人生って、まだまだずっと先の長くて見えない分からない世界なんだろうなあ。分からなくて見えなくて、不安で、なかなか上手くいかなくて、って世界なのかなと思います。

私の母がよく言う言葉、「人生は、うまくいかないことばかり、8割！ほとんどはうまくいかないの！その代わり、残りの2割、うまくいった時はめちゃんこうれしい！そのくり返し」母の言うように、はじめからそう覚悟を決めておけば、どうにかこうにか人生の荒波の中でもこぎ続けられるようなそんな気がしてきます。私もいつもそんな強い人間ではいられないので、自分の思うようにいかない時に、思わずこの「ガチャ」という言葉を使ってしまうことがあるかもしれません。もし使ってしまったとしても、心の中では、「自分にもなにか問題点があるんだろうな」って思える、そんな人でありたいです。そして、流行というものは、いつかは廃れていくものだと思って、この「ガチャ」という言葉もそのうち流行しなくなって、世の中から消えてしまえばいいなって思います。だってやっぱり、一度きりの、自分だけの、大切な人生だから。自分だけにしか創り出せない、自分だけの大切な時間だから。この先どんな事が待っているか分からないし、転んでばかりの毎日かもしれないけれど、自分の日々を大切にしたい。

「ガチャガチャ言っても始まらないか！」自分の気持ちと自分の責任で過ごしていく。そして、ガチャガチャワチャワチャとした楽しい時間が、少しでも増えますように。そんな毎日していきたいです。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

家の近くのショッピングモールで、大量のガチャガチャがずらーっと並んでいるのを見て、ビックリしました。そこで楽しんでいるたくさんの人達を眺めていた時にふと心の中に感じたことがあってこの作文を書こうと思いました。たった一度きりの、自分だけの、自分だけにしか創り出せない、自分の人生だから。誰のせいでもなくて、自分の気持ちと自分の責任で過ごしていきたいな！と思ったことがきっかけです。



審査委員会委員長賞受賞

恨みを愛へ

北海道 下川町立下川中学校 3年

三浦 かな

「み・みず！水！」

まただ。また妹がうなされている。

五年前、末の妹が保育所の送迎バスに置き去りにされた。何人もの大人が確認を怠り、妹はバスの中でだんだんと意識を失っていった。偶然早く迎えに来た母が気づいたことで、無事生きて発見された。

新聞に掲載されたのは「命に別条はない。」の一文。しかし、別条がないというのはただ生きているというだけで、これまでの日常が戻ってくるわけではなかった。

あの日から、私達の生活は一変した。妹は事故のトラウマで夜中に泣き叫ぶようになった。ひとりでトイレに行けなくなった。村の安全対策に疑問を持ち、私たちは隣町に引っ越すことになった。

家族みんなが不安定になり、母から笑顔が消えた。妹は引っ越しのストレスで脱毛症になった。こうなったのは事故のせいだ、不注意な大人のせいだと、私は毎日事故を恨んだ。

当時、私はまだ小学生だったが、何とかしたいと強く願った。苦しむ子どもが出ないように、作文を書いたり壁新聞を作ったりして社会に訴えかけた。

しかし、当事者になるまではみんな他人事で、誰も耳を傾けてはくれなかった。

そんな時、私達に転機が訪れた。息子さんを保育中の川の事故で亡くされた方と知り合ったのだ。ライフジャケットさえあれば守れた命だった。彼女は、これ以上苦しむ子どもをなくすため、ライフジャケット着用を呼びかける活動をしている。

会う前は、彼女も私と同じように社会を、事故を恨んでいるはずだと思っていた。しかし、実際に会った彼女は穏やかで、笑顔が素敵な方だった。

失礼ながら私は、

「あなたは事故を恨んではいないのですか？」と聞いた。すると彼女はこういった。

「もちろん、事故のことは憎い。だけど、その恨む気持ちは置いておいて子どもの命を守ることを第一に活動している。」

笑顔をお忘れずに、自分自身が活動を楽しむ。そうすると、自然と共感してくれる仲間が増えていくという。

私はその姿に強く心動かされた。確かに、事故を恨んでいることを訴えても、そこからは何も始まらない。関係者への恨みが増すだけで誰もハッピーにはならない。

私たちは、それまで抱いてきた事故や社会への恨みを、社会への愛へ変えることにした。これ以上苦しむ人がいなくなることが、私たちの最大の願いであることに気がついたからだ。

それから私たちは、社会を巻き込んで活動していった。大好きな野生動物の命を守るため、四年間家族で毎月ゴミを拾っている。水の事故をなくすため、二年間かけてライフジャケットレンタルステーションを設置した。髪がない辛さを知り、脱毛症を乗り越えた妹と共に、三回目のヘアードネーションに挑戦中だ。目の前にはいない誰かと繋がっている気がする。こうやって少しずつ今も活動を続けている。

私が住む下川町は昔、小学生が自転車事故で亡くなったことをきっかけにヘルメット着用を推進している。何十年も前の死が、そのまわりの人々の活動が、今の私たちの命を守っている。私たちは見ず知らずの誰かの愛に支えられて生きてきたのだ。

意識していなくても私たち誰もが社会とつながって、社会を作っている。安全な社会を作っていくのは、他でもない私たち一人ひとりだ。

これからも、私たちは理不尽に誰かから傷つけられることがあるかもしれない。でも、そんな時こそ恨みに心が占拠されないようにしたい。

過去を恨むのではなく、周りへの愛に変えることで、未来はきっと変えられる。

ありがとうございました。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

人生には楽しいことだけでなく、辛く悲しいこともある。私は家族を傷つけられるという辛い体験をした。しかし、その経験があったからこそポジティブに社会の一員としての自覚をもって生きることの大切さに気付くことができました。生きていることのすばらしさを知った。私の夢は社会問題を解決する仕事につくことだ。その夢をかなえるためにも、過去の出来事を恨むのではなく、未来に何ができるのか、安全な社会をつくるためにはどうしたらいいのかを考え、行動して生きていきたい。

国立青少年教育振興機構奨励賞受賞



真の友情

茨城県 潮来市立日の出中学校 3年

根本 泰誠

「君は例えば日本と中国が戦争をしたとしても、僕と友達で居続けてくれる？」中国人の僕の親友が転校する前に言った言葉です。僕は「当たり前だろ。」と返しました。そのときの彼の微笑みは今でも忘れられません。彼は僕らと同じ空間で共に成長してきたのに、ただ国籍が違うというだけで、常に不安な気持ちを抱いていたのだなと、そのとき初めて気が付きました。

昨年度の二月二十四日、ロシアによる武力でのウクライナ侵攻が始まりました。僕は今でもあの日を鮮明に覚えています。誰もがこの悲惨な出来事を忘れはしないでしょう。

戦争が行われる中、僕はウクライナ出身のとあるユーチューバーの動画を見ました。ロシアへの怒りと悲しみであふれかえっていました。しかし、そのユーチューバーはこう言ったのです。「僕のロシア人の友達も戦争を望んでいない。ロシア人の友達が僕に謝る姿をもう見たくない。」僕はその時、胸が締めつけられました。なぜ国の問題のせいで友人が不安と申し訳ない気持ちにならなくてはいけないのだろうと僕は怒りと疑問を抱きました。そのとき、僕の親友が転校する前に言った言葉の意味が分かった気がしました。彼はこのような状況を心配し、ずっと恐れて生きてきたのだなと。戦争をするということは、国の責任を自分の責任と考える必要があるのだと改めて感じました。

彼の転校からは一年と半年がたち、今ではお互い受験生となりました。彼との連絡を取る頻度も日に日に減り、彼の言葉を忘れかけていました。そんな中、社会の単元が満州事変と日中戦争に入りました。過去の単元で起こった戦争とは違い、明らかに日本に非があると僕は感じました。だから僕は、親友はどんな気持ちでこの単元を学習しているのだろうと考え、彼の母国の中国が僕らの母国の日本に理不尽に攻められていることに対して僕は申し訳ない気持ちになりました。そのときに、戦争が例えば過去の出来事であっても、いつまでも次世代へとその責任を受け継いでいかなくてはならないと感じました。

僕は久々に親友にメールを送ることにしました。内容は、日中戦争を学習して申し訳ない気持ちになったということを送りました。送ってから二日後位に彼からの返信が届きました。「僕もこの単元を学習して君のことを考えていたよ。責任感の強い君ならきっとそう考えるんじゃないかと思った。だけど君が責任を感じて僕に謝る必要はないよ。僕と君の母国が戦争をしたという事実は変わらず、互いに責任を持って生きていくことは大切だけど、僕と君がケンカした訳じゃないんだから、謝るのはおかしいよ笑。」彼にしては珍しく返信が遅く、長文で返信が返ってきました。僕が傷つかないように時間をかけて考えてくれたことが伝わってきました。僕はそんな親友が大好きです。戦争犯罪という大きな問題を国籍の違う二人だからこそ別視点から考えることができ、意見を交換し合い納得を共に深められる「友」に出会えて本当に良かったです。

彼の言葉が無ければ、僕たちは一生不安を抱いて生きていくことになっていたと思います。共に話しづらかった自分の母国と友人の母国の戦争について正面から互いに向き合うことで、もやもやしていた感情が晴れ、また、僕らだけでなく、多くの同じ境遇の人達にも「戦争」についてしっかりと正面から向き合ってほしいなと思いました。真の友情とは、国際問題にも勝り、国境を越えるものであると心から確信しました。

今後も、戦争問題だけに関わらず、国を越えた関係である限り、母国の責任を背負って共に生きていくということを大切に、多くの人々にこのことを伝えていけたらいいなと思います。

この主張をどんな人に届けたいですか？

僕は「真の友情」というこの主張を、僕と中国人の親友と同じような国籍の違う友人を持つ多くの同じ境遇の人たちに、真の友情とは、国同士の問題にも打ち勝つものであるということと、その上で、お互いに母国の責任を背負って共に生きていくということを忘れずに大切にしてほしいということをお届けたいです。また、政府の方々にも、真の友情は、国際問題に勝るものだという事実に変わりはありませんが、決して不安を抱かない訳ではないので、友好な外交関係を継続して築きあげてほしいということをお届けたいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

「善意のバトン」をつないで

神奈川県 横濱中華學院中学部 1年

小林 慈月

電車の中。若い人たちが席を占め、彼らの前にはお年寄りたちがつり革につかまって立っている。若い人たちは目の前のお年寄りたちには見て見ぬふりで小さなスマホに夢中になっている。

こうした光景は誰しもが目にしたことがあるでしょう。僕も何度もありますが、日本に帰ってきたばかりの時はとても驚きました。なぜなら、帰国する前までこうした光景を見たことがなかったからです。

僕は一才から小学三年生まで台湾に住んでいました。僕の住んでいた台北も日本と同じように電車やバスを利用する人が多いです。台湾生活の中で、電車やバスでは譲る・譲られるのが当たり前でした。お年寄りやけがをした人、妊婦や小さい子どもに席を譲るのは当然の光景でした。ある時には、「這邊有空位喔！（こっちに空いている席があるよ！）」と遠くから呼んでくれたり、ベビーカーを運ぶためにバスから降りてきてくれたりした事もありました。

僕は母から小さい時の話をよく聞くのですが、「善意のバトン」と僕たちが呼んでいる話が好きです。ある日、ベビーカーの僕と母は、急な大雨に遭い、道ばたでずぶ濡れになりながらタクシーを待っていました。しかし、どのタクシーにも人が乗っていて、なかなか捕まえることができません。するとその時、客を乗せた一台のタクシーが僕たちの前に止まりました。そうしたら、運転手の人が窓を開けて、「對不起，現在車裡有人所以我不能讓你們搭，但請用這個等計程車！（ごめんなさい、今人が乗っているから乗せてあげられないんだけど、これを使ってタクシーを待っていてください！）」と言って、自分の折りたたみ傘を母に渡し、再び走り去って行ったのです。その後、母と僕は傘をさしながらタクシーを待つ、無事家に辿り着くことができました。とても感動した母は、その傘を自分のものにはせず、「善意のバトン」として、傘がなくて困っている人に渡したそうです。

台湾の人たちは、どんな時でも、誰に対しても、気軽に声を掛け、関心を持ち、自分から進んで譲ってくれたり、助けてくれたりしようとします。他の人のことを気遣い、思いやるのが当然だと考える、こうした台湾の人たちの心を僕は素敵だと思うし、僕自身もその思いやりの心を常に持っていたいと思います。

ですが、思いやりの心を持って、周りの人に心配りをして、気持ちよくつながっていないこともあると思うようになります。

ある時友人が、「この間電車で勇気を出して席を譲ろうとしたけど、『いいです』と言われて、どうすればいいかわからなくて恥ずかしかった。もうあんな恥ずかしい思いをしたくないから、自分から譲るのは迷うな。」と言っていたのです。

僕は思いやりを受け取る側の人の心のあり方も関係するのではないかと思います。ぼくも以前電車で席を譲ろうとした時に、「あ、いいです。」とあっさり言われてしまいました。もし、この時にこんな風に返されたらどうでしょう。「次で降りるから大丈夫よ。ありがとうね。」と。たとえ必要がなかったとしても、感謝の気持ち「ありがとう」を一言返すだけでお互いにほっこりしますし、譲ろうとした人も「また今度も声を掛けよう」と思うようになれる。これもまた、一つの「思いやり」です。

思いやりの心を持ち、お互いのことを考えて、受け入れる。その心があれば、譲り合ったり、助け合ったりすることができ、社会で協力し、つながり合うことができるのです。

家庭の中でも、地域でもどこでも、自分から進んで行動し、また相手に感謝の心を持つ。一人一人が他人を思いやり、「善意のバトン」をつなげば、社会ともっと深くつながるのではないのでしょうか。バトンは、持つ人がつなげようと、受け取る側がつながろうと思うことで、初めて成立するのです。僕は世界中の人たちと、「善意のバトン」リレーを続けていきたいです。このリレーの先には平和な社会がきっと待っているでしょう。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

僕は台湾に住んでいた時の生活で、多くの方々と関わっていく中で、お互いを気遣い、思いやることの大切さを学ぶことができました。その経験をいかし、将来は日本と外国の人々をつなぐような仕事をしたいと思っています。たとえ関係がよくなかったとしても、思いやりの心があれば、互いにつながり合うことができると思います。僕は今後、その中間に立って、互いにつながり合うためにサポートする活動ができればいいなと思っています。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

「自立」というかたち

長野県 長野県長野盲学校 3年

井出 真奈史

みなさんは、自分にとって「自立」とはどんなことか考えたことはありますか？

私は、現在、地元から遠く離れた長野市にある盲学校に通っています。小学校は地元の学校に通っていました。高学年の頃に視力が低下しました。見えにくいので目を細めて見るとにらまれているように思われたり、見えないので活動を楽しめなかつたりしました。それ以降、勉強や運動、クラブ活動が思うようにできなくなり、教室の仲間との関係もあまりよくありませんでした。今思えば、「よく見えないんだよ」と言えれば良かったのかもかもしれませんが、当時の私は、自分のことで精一杯でした。うまく学校生活が送れない自分が情けなくて、悲しくて、嫌で、どんどん学校へ行きたい気持ちが強くなっていきました。

そして、卒業が近づき、ただ地元の仲間から離れたくないという思いで、半ば逃げるように盲学校を選びました。その時は「逃げたい」という思いでいっぱいでしたが、今思い返すと、このまま心を開けない人たちの中で、苦しい思いをして過ごしていたら、私は私でなくなってしまう。私は「私自身でありたい」と思っていたのだと思います。

盲学校では、自分を見つめなおす機会を得ることができました。そして、「このままの自分ではいけない」という思いがだんだん芽生えてきました。その思いから挑戦したことの一つが、親の送迎ではなく、電車やバスを使った一人での登下校です。最初は、人混みも嫌だし、一人で何かをすることも不安だし、本当に嫌でした。しかし、嫌な気持ちを、「このままではいけない」という思いが上回り、何とか続けていくことができています。

一人で電車やバスに乗っているいろいろなことに出会います。ある日、学校へ向かうバスを待っていると知らないおばあさんに声を掛けられました。その方は、私に、バス停の名前と時刻が表示されているスマホの画面を見せ、「このバスでいいのかしら？」と尋ねてきました。しかし、私はその画面がよく見えなかったため困ってしまいました。見えない自分の現実も突き付けられ、悲しくもなりました。ここで、かつての私なら、「画面が見えないんだから仕方がない」と自分に言い訳し、助けることをあきらめていたでしょう。しかし、「このままではいけない」と思い直し、勇気を出して声を掛けてみることにしました。「どこへ行くんですか」。すると、その方はバス停の名前を教えてくれ、私は自分のスマホで調べて確かめることができました。そして「私と同じバスで大丈夫ですよ。」

と伝えることができました。その方は、バスを降りる前に、「ありがとうね。」と言ってくれました。私は、その瞬間、「勇気を出してよかった！役に立ててうれしい。」と喜びでいっぱいになりました。お礼を言われたこともうれしかったですが、自分がその場で目のことを言い訳にして逃げずに、自分の力で人の役に立てたことが一番うれしかったです。

「私、できるじゃん！」。これまでは、自信のなかった私ですが、この日、「目のことを言い訳にしない」「苦手なことでも逃げずに勇気を出してやってみる」と、自分自身に誓うことができました。

このことをきっかけに、私にとっての「自立」のかたちが見えてきました。私にとっての「自立」とは、「自分が今までよりも強くなったと思えること」です。それは、私自身の誓いを守って行動していくことによって実現できていると感じています。

現在、私は中学三年生で自分の将来を考える大切な時期です。逃げたくなることもあると思います。ですが、小学生の時とは違い、今は自分自身の誓いがあります。それを胸に、自分の苦手なことから逃げずに、目のせいにも人のせいにもせずに、自分の力で真っすぐ立ち向かっていきます。これが今の私が考える「自立」です。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

自分が決めた事を一生懸命チャレンジしていく事が今の私の願いです。日々の学校や寄宿舎生活の中で、沢山の人の世話になり生活ができていく事と、クラブ活動に参加し年齢を超えた仲間がいる事が私の今の気持ちを支えています。これからの私は、通学でお世話になっている駅員さん、学校の仲間、先生達のように、年齢を超えて会話ができるようになりたいし、周りの人を思いやる事ができるような人生を作り上げていきたいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

一人の人間として

富山県 富山市立芝園中学校 3年

吉越 帆高

ある日、私は一つのニュースを見つけて言葉にならないほどの大きな衝撃を受けた。それは、あるテーマパークの点字ブロックに隠れキャラが配置されているのだが、その危険性がSNS上で指摘されているにも関わらず、改善されていないというニュースだった。

この話がどうして危険なのか、すぐにわかるだろうか。

私はすぐに気がついた。それは私が足が不自由ないわゆる障害者だからだろう。答えは、点字ブロックを利用している人が、隠れキャラを見つけようとして立ち止まる子どもとぶつかる可能性があるから、だ。実はこのようなことはよくあることだ。私自身の経験でも、屋外に設置されている手すりは金属製のものが多く、夏は熱く冬は冷たくて素手では持てないことがあった。他にも、駐車場の障害者スペースなのに車椅子を出し入れするのに十分な広さがなかったり、出入り口のスロープを塞ぐように自転車が置かれていたりしたこともある。そのたびにもっと使う人のことを考えてほしいと思う。テーマパークの話も、実際に点字ブロックが機能している場面を想像すれば気付けることだ。けれども気付けなかったのは、建設に関わった人たちが、利用する側の人のことを知らなかったり、日常生活の中で関わる機会がなく想像できなかったりしたのが原因ではないだろうか。

今、私は車椅子で中学校へ通っているが、入学したばかりの頃より過ごしやすくと感じる。それはお互いよく知り合っ、何に困っているのか想像してもらえているからだと思う。周りから声をかけてくれることもあり、何か助けてほしいことがあるときも頼みやすい。しかし、外出先では車椅子に乗っている私をじろじろ見たり、逆に目を背けたりする人がいる。また、かわいそうにと声をかけてくる人もいる。そういう人は私のことを異質なものと他人事だと見ているのではないか。同じ一人の人間なのに、自分とは違う、とか、理解できない、などと思われているのはとても辛くて悲しい。先ほどのテーマパークの話では点字ブロックを使うような人はそもそも来ないのではという意見もありとても残念に感じた。そのような考えがあると、障害のある人は訪れにくくなる。今の社会全体に「優しさ」と「思いやり」が欠けているような気がしてしまう。

ではどうすれば形だけではない、本当に住みやすい社会になるだろうか。

私は、普段の生活の中で他者への関心をもつことが大切だと考える。そのためには、できるだけ幼い時からいろいろな人と関わる機会が必要だ。意識した経験がなければ、配慮しろと言われても何を配慮すればよいか想像できないからだ。

最近、誰もが一緒に遊ぶことのできるインクルーシブ遊具のある公園ができたというニュースを聞きとても嬉しく思った。そのような公園があれば、何か特別なイベントに参加しなくても、幼少期から日常の中でいろんな人と自然に関われる機会や場所が当たり前身近にある環境ができる。それが関心をもつことや、想像力を育てることに繋がる。大切なのは社会や他人に対し、批判したり何かを強制したりするのではなく、自分の意見をどんどん発信し社会全体を巻き込むことだ。こういう問題に明確な答えはないが、お互いに関心をもち、思いやり、想像力を働かせれば解決できることもある。これはAIなどではなく同じ人間にしかできないことだ。いろいろな人と出会ったときに、自分とは違う異質なものとして見ることなく、同じ地球に住んでいる仲間だと思ってほしい。

私の夢は、障害者や社会的弱者という言葉がいらぬ社会だ。自分の意見を発信することには勇気が必要だが、自らの手で社会をよくしていくという気持ちをもって私自身行動していきたい。障害者ではなく一人の人間として生きていくために。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、この主張を、作文の最初の問に答えられなかった人にご届けたいです。今の社会では平等性や多様性が尊重され、設備のバリアフリーは整ってきています。でも、それだけではなく、周りの人の理解や関心から、たくさんの「気づき」が生まれることで、真のバリアフリーになるのだと思います。この作文がそんな「気づき」につながっていくこと、そしてその「気づき」がより良い社会につながっていくことを願っています。誰もが「一人の人間として」生きていける世の中は、私たち一人一人の意識にかかっているのです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

おばあちゃんが教えてくれたこと

京都府 相楽東部広域連合立笠置中学校 3年

アブドウル フセイン・ナジュマ

皆さんは、「アフガニスタン紛争」を知っていますか。2001年10月から約10年間にわたって続いた、アメリカを中心とする連合軍とタリバンとの間で起きた紛争です。2021年、8月30日にタリバンが政権を回復することで終結しました。タリバンとは、アフガニスタンを実効支配するイスラム教スンナ派諸派、デーオバニドのイスラム主義組織のことです。つまり、テレビなどでよく言われている、イスラム過激派集団です。私にとってこの紛争は、とても身近なものでした。

私はドバイで、アフガニスタン人のお父さんとお母さんの元に生まれました。今は、お父さんの仕事のために家族みんなで日本に住んでいますが、両親は、この紛争から逃れるためにアフガニスタンからドバイへ移住したそうです。しかし、多くの親戚はまだアフガニスタンで暮らしています。もちろんその中に、私のおじいちゃんとおばあちゃんもいます。私は小学1年の時に日本へ来ました。その日から今まで、おばあちゃんに会っていませんでした。いつか一人で飛行機に乗れるようになったらおばあちゃんに会いに行こうと思っていました。大きくなった私の姿を見せてあげたかったからです。しかしその願いは、私が小学5年生の時に絶たれてしまいました。

私のおばあちゃんは、アフガニスタンの病院で、ガンのために入院していました。その病院を、ある日突然タリバンは襲ったのです。その時おばあちゃんは病室にいて、タリバンの無作為な民間施設の襲撃によって命を奪われてしまいました。この事実を知った時、私はとても怒りと悲しみで胸がいっぱいになりました。おばあちゃんは、なんとか病気を治そうと必死で闘っていたはずなのに、その瞬間から、その希望を奪われてしまったのです。自分の意志で人生を最後まで全うすることができなくなってしまったのです。

このように、誰かの人生を奪うということは、亡くなった人の人生を奪うだけでなく、その人に関わるすべての人の幸せを奪うことにもなるのです。そんなことはあってはならないと思います。今も、世界中で戦争や紛争が続いている国がたくさんあります。最近では、ロシアのウクライナ侵攻が毎日のようにニュースやSNSで目にするし、そこで起こる痛々しい様子を写真や動画で見ることできます。それを見るたびに、私は悲しい思いでいっぱいになり、他人事ではないと強く感じます。

私は、武力的な行為で人が命を落とさなければいけないのはおかしいと思います。その人の人生を全うする権利、生きる権利を奪うことにもなるので、りっぱな人権侵害だと考えます。どんなことがあっても、どんな理由があっても、人の命や人生を奪ってははいけません。今の私は、まだまだ政治的な難しい事はわかりません。教えてください。なぜ、このようなことが世界中で起こっているのか。なぜ、こんなやり方をしなければならないのか。そして、皆さんと一緒にこのようなことが起きないような世界をつくるために、私たちにでもできる小さな一歩を考えていきたい。どこに生まれて、どんな言葉を使って、どんな思想を持っていても、この地球に生まれたかけがえのない一人として、誰ひとりの命もムダにならない、自分らしく自分の人生を全うできる世界について考えていきませんか？

この作品を書いたきっかけはなんですか？

2022年冬、毎日のようにTVでロシアやウクライナ侵攻の様子が映し出されるようになりました。それを見るたびに祖母のことを思い出し、胸が痛む日々でした。今の日本人にとって戦争というものは、TVで見るとどこか遠い存在のように感じていました。だから、日本人の友達が多い私が、自分の祖母のことを話すことで日本人にとっても、もっと戦争を身近に感じてもらえるのではないかと思ったからです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

誰かの「自分らしさ」を支えるために

島根県 雲南市立木次中学校 3年

高橋 りりあ

「かわいそう」と私が何気なく発している言葉は本当にその人の心に寄り添っているのだろうか。ヘアドネーションについて知るうちに私の中に疑問が生まれました。

小学3年生の秋、私は、科学作品展の展示物でヘアドネーションを知りました。ヘアドネーションとは、病気や事故などによって髪を失った子ども達のために寄付された髪の毛を使ってウィッグを作成し、無償で提供する活動のことです。ウィッグが必要な子ども達がいると聞いたとき、まず私は、髪がなくて「かわいそう」だから、協力したい、協力することで、みんなが幸せになると考えました。切ってしまったらゴミでしかない髪の毛が、知らない誰かを笑顔に出来るプレゼントになるのです。そこで、3年かけて、ヘアドネーションの規定である31センチ以上に伸ばした髪を、小学校卒業を機に切って、ウィッグを作成している団体へ送りました。その時は、大切に伸ばしてきた髪の毛がやっと誰かのためになる、人のために行動ができたという、うれしさと達成感に包まれました。

しかし、同時に、なぜウィッグを被るのだろうかという思いもありました。ヘアドネーションについてさらに調べるうちに、病気や事故などによって髪を失うことは誰にでも起こりうることだと知りました。もし、私が同じ立場になったら、どのように接してほしいだろうか。そう考えて初めて「かわいそう」という言葉は、なんだか他人事で自分たちとは違う存在と言われているような心がチクとする言葉だと感じました。また、「髪はあるほうがいい」という考えが前提にあるこの言葉は、髪を失った自分自身を否定されているようにも感じると思いました。「周りとは違ってかわいそうと思われたくない」その気持ちから私だったら、ウィッグを被ることを選択します。私が、何気なく思っていた「かわいそう」という言葉は、自分が当事者であればかけてほしくない言葉だったのです。

私は、ヘアドネーションに取り組んだことで、心の根っこに「人と違うことは恥ずかしいことだ、人と同じであるのがよいことだ」という思い込みがあったことに気づくことができました。ウィッグを被っている人の中には、周りの人から「かわいそうな存在」「自分たちとは違う」そう思われたくないという気持ちから被っている人もいるのではないかと、もしかしたらヘアドネーションが必要とされる背景には、社会の中に「周りと同じにしなければならぬ」という雰囲気があるのかもしれないと考えました。もし周りとは違う立場になった時に、周りに合わせる努力をしなければ生活しにくかったら、悲しく生きづらいと思います。ウィッグを被りたくない人は人の目を気にせず、ありのままですらわれて、ウィッグを被っていた方が自分らしく過ごせる人はウィッグを被る。ヘアドネーションは、周りに合わせるためではなく、自分らしさを支えるためのものであってほしいと思います。

私は今、2回目のヘアドネーションに向けて髪を大切に伸ばしています。誰かを笑顔にしたいという気持ちは小学生のころから変わっていません。しかし、昔のように「かわいそうだから」ではありません。「誰かの自分らしさを支えたい」という思いで伸ばし、規定の31センチを超えました。31センチの髪の毛は、ショートヘアのウィッグになるそうです。そこで、次はロングヘアのウィッグが届けられるよう、高校卒業まで伸ばそうと決めました。

ヘアドネーションを通して、人には、いろいろな在り方や事情があり、それぞれの人が、様々な思いを抱いて生きているということを学びました。だから私は、これからもっとたくさんのことを学び、相手の思いや背景に目を向け、その人らしさを支えられるようになりたい。そして、誰もが生きやすい社会にしたい。大きな願いではあるけれど、自分にできる小さな一歩から行動していきます。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この作品を通して、私は様々な人の思いや考えに出会えました。そして、もっとたくさんのことを学び、自分を見つめ、相手の心に思いをはせられるようになりたいと思いました。私一人の力で社会を変えることは難しいですが、私自身は、知識と行動を増やす努力で大きく変えられます。誰もが自分の自分らしさを大切にでき、相手の自分らしさも大切にできる社会への一歩として、私自身が成長し、相手のありのままを受け止め、支えられる人になりたいです。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

未来への第一歩

福岡県 苅田町立苅田中学校 3年

福江 日陽莉

「私、この気持ち分かる。」この言葉を母の口から聞いた時、衝撃を受けたことを、今でも鮮明に覚えています。朝、たまたまつけたニュースで、虐待について報道されていました。私は、このニュースを観て、「何でこんなことするんだろう。信じられない。子供が欲しくても恵まれない人だっているのに…」と怒りを感じました。だから、母からこんな言葉を聞くとは思ってもいなかったのです。私たち家族はとても仲良しです。五人家族で毎日にぎやかに暮らしています。なのに、どうして…。そんな中、母は話を続けました。

「実は、私もつらい時期があってね。今思えば、産後うつだったのだと思う。」私は少し戸惑いながら、「なら、虐待する人の気持ちとか分かるの?」と尋ねました。すると母は、

「うん。分からなくもないかも。自分がやりたいことを上手くできない。言葉で表すのは難しいけど、こんなはずじゃなかったのに…と毎日思っていた。」そう答えてくれました。

そこで私は、世の中の産後うつについて調べてみました。まず目にした一文は、「産後うつは十人に一人以上の割合がかかる病気」というものです。私は言葉を失いました。そんなに多くの方が…。信じられない…。私は小さい子が大好きです。だから産後はとても幸せなものだと思っていたのです。でも、実際はかけ離れていて、酷く残酷なものでした。「初めてで何も分からない。」という子育てに対する不安。「聞きたいけど、病院の人は忙しそうだから…」という遠慮から誰にも相談できず、一人で抱えこんでしまう。さらに、ホルモンバランスもくずれ感情的に。ついには、子供が泣き止まないことに対する苛立ち、焦り、憤り。自分の子供なのに、かわいく感じない。こんな母親失格では?と思いついて、「死にたい」という感情がわいてきたり、子供を傷つけてしまう行動に至ったりしてしまうそうです。

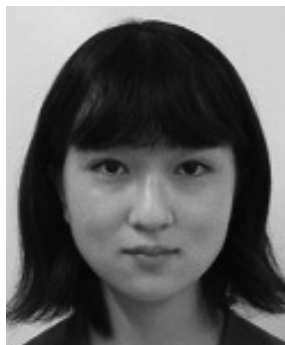
こんなことがあって良いのでしょうか。子供を授かるということは幸せなことではないのでしょうか。私はこの「今」を変えたい。今は、「産後うつ」と検索すると、数多くの体験談が出てくる状況です。多くの母親が産後うつに悩み、多くの子供が傷ついています。今は、少子化も進んでいる時代。生まれてきてくれた子には、幸せな道を歩んでほしい。産後うつの治療法としては、話を聞いてもらうことだそうです。そのため、母は今、産後約一ヶ月の親子のもとに訪れ、赤ちゃんの体重を量るとともに、母親の話を聞いたりする職業をしています。そんな母を私は誇りに思っています。「自分の経験をもとに人を助ける母を見て、これこそが本当の思いやりだ」と私は思っています。

また、このことを知って、私は「助産師になりたい」という大きな夢を持つことができました。みなさんは助産師とはどのような仕事をしている人だと思いますか?私は出産のお手伝いをするだけだと思っていました。でも実際は、産後の母親のケアをしたりもするのです。私は助産師となり、多くの人のお話を聞き、アドバイスをすることで、産後も充実した日々を送ってほしいです。それが、子供を救うことにもつながると思います。

最後に、私は今、虐待のニュースを目にした時の感じ方が以前とは変わっています。今は、「もし私がこの人の近くにいたら何ができたか」を考えるようにしています。「物事を捉える時には想像力を最大限に働かせる」これこそが、協力し合える環境作りの大きな鍵になるのではないのでしょうか。そのために私は残り少ない中学校生活の中で多くの経験を積み、その都度今自分にできることを考え相手の気持ちを想像して行動するようになっていきたいです。それが、私の築きたい未来への第一歩だと信じて一。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか?

私は、この主張を通して、少しでも人のためになる行動ができる人になりたいと思いました。この主張の題材は「産後うつ」で、悩みを抱える母親や傷つく子供を救うために自分が将来 どうなりたいか、そのために何をすべきかを考えました。しかし、日々の生活の中でも誰かを救うことができると思います。だから、ささいなことでも人の役にたつ選択をしていきたいです。それが、私の目指す自分の姿です。



国立青少年教育振興機構奨励賞受賞

循環型社会に向けての責任

鹿児島県 いちき串木野市立串木野西中学校 3年

箕輪 碧泉

少しだけ寂しいと感じたが迷いはなかった。小学校を卒業して二年が過ぎ、私は思い出のランドセルを海外に寄付した。新聞で思い出のランドセルを寄付するという活動が広がっていることは知っていたが、小学校の六年間をともにしたランドセルをなかなか手離す気持ちにはなれなかった。でも、私の家は転勤族で引っ越しも多い。何より暗い押入れの中で、ダンボールに入ったままのランドセルが不憫でならないと感じるようになっていた。改めて調べてみると、日本で役目を終えたランドセルは、途上国の子どもたちに贈られ、教育を受ける機会に役立てられていた。子どもたちが、学校で学び読み書きができるようになることは、自分自身や家族を守る知識や情報を身につけることができるようになるということだ。ランドセルは、子どもたちが、デコボコの山道を何時間もかけて通うなか、貴重な本がボロボロになることを防いだり、家庭内あるいは青空教室での机代わりとしても役に立っているという。

私たち日本人は、学校や教育を空気のように当たり前のものと思っているが、途上国では教育を受けられない子どもがたくさんいる。教育を受けることで、その子どもたちが将来、国の発展に貢献するような職業に就いたりすることもできるだろう。私が寄付したランドセルは、アフガニスタンの子どもたちへ贈られるそうだ。私のランドセルが遠くアフガニスタンの地で、再び子どもたちに背負われ夢を叶えるお手伝いができるのかと思うと、寂しさよりも嬉しさが胸がいっぱいになった。

国連の「持続可能な開発目標（SDGs）」達成に向けた取り組みが、私たちの暮らしの身近なところで進んでいる。最近では、スーパーなどで、家庭で余っている食品を持ち寄り必要としている福祉施設や、子ども食堂などに寄付するフードドライブを行っているところも増えてきている。食品ロスを防ぐためにもとても有効だと思うし、本当に必要なところへ確実に届くという意味でも大事な活動だ。是非、食品以外でも未使用の文具、受験や検定のために購入した参考書や問題集など、家庭に眠っている物が、他のだれかの役に立つ、喜ばれる仕組みが身近なものになって欲しいと思う。

ただ、「リサイクル」や「リユース」といったかけ声のもと、結局は大量生産、大量消費社会が、廃棄物をアフリカに押しつけている構図や、南米チリの砂漠に世界中から着古した衣類が集められて不法投棄され「衣類の墓場」となり、近年深刻な環境汚染を引き起こしていることも忘れてはならない。ニュースで、「先進国の人々はアフリカ人はどんな服でも着ると思っているだろう」と憤っていたガーナの女性の手には、血液のついた跡がある服が握られていて私も悲しくなった。相手に不愉快な思いをさせるのは、支援でも寄付でもない。使う側に配慮した思いやりの心が必要だ。

私は、この春転校してきた際、卒業まで一年ということもあり、学校から卒業した先輩たちが残してくれた制服や通学かばん、体操服を借りることができた。クリーニングされた清潔な制服やきれいに使われていたかばんからは、「頑張ってたね」という応援の気持ちも込められている気がして嬉しかった。私も丁寧に使って、次の人につないでいけるようにしたいと心から思った。

SDGs12 目標は「つくる責任つかう責任」とされている。自分が持っている物を大切に、役目を終えたら、できるだけきれいな状態で次の人につなぐ。小さなことかもしれないが、循環型社会に向けて、責任を持って、自分にできる精一杯のことを続けていこうと思っている。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この作品を通して、ひとつのものが私の手元に届くまでたくさんの人の働きや思いがこめられているということに気がしました。持っているものを大切に、役目を終えたらできるだけきれいな状態で次の人につないでいきたい。ものだけでなく、他者を思いやる優しい気持ちも循環できるような社会に向けて、小さなことでも、正しいと思うことは勇気と責任を持って行動していけるような生き方をしたいと思っています。

努力賞授与式

全国大会へ推薦された47都道府県の代表者の内、惜しくも全国大会発表者に選考されなかった35名（以下、努力賞受賞者）に、全国大会の中で努力賞の賞状が授与されました。また、全国大会当日は努力賞受賞者の作文をホール前に掲示し、ご来場いただいた多くの皆様に観覧いただきました。



努力賞授与式



努力賞受賞者

努力賞プログラム

努力賞受賞者が交流を深め、新たな視点や考え方を身に付けていただくことをねらいとして、全国大会前日から国立オリンピック記念青少年総合センターに宿泊し、交流プログラムを実施しました。

1日目はレクリエーションで親睦を深めた後、少年の主張の作文を書いてくれる中学生を増やすための工夫について考え、グループ内で共有し、意見交換を行いました。

2日目は、グループでの意見交換を踏まえ、グループごとにアイデアをまとめ、全体の前で発表しました。

都道府県を代表して参加してくれた中学生らしく、様々なアイデアが紹介されました。『まずは自分たちが周りの人たちに声がけを。』という頼もしい意見も述べられました。



交流の様子



グループ ディスカッションの様子



全体発表の様子

少年の主張全国大会努力賞受賞作品

【北海道・東北ブロック】

青森県 むつ市立田名部中学校 1年
二本柳 凜子 『二つの尊重のバランス』

岩手県 北上市立南中学校 2年
千田 ソフィア 『心に平和のとりでを』

宮城県 東松島市立矢本第一中学校 3年
入駒 泰羽 『言葉を紡ぐ』

秋田県 大館市立比内中学校 2年
萬田 花歩 『AIと一緒に』

福島県 須賀川市立小塩江中学校 3年
押川 千晏 『今日から私が宣伝部長』

【関東・甲信越静ブロック】

栃木県 宇都宮市立宝木中学校 3年
星野 みおり 『女性が毎日笑顔でいられるように』

群馬県 前橋市立第七中学校 3年
福島 由萌 『吃音で良かった』

埼玉県 本庄市立本庄東中学校 3年
村上 滉歩 『私のおばあちゃん』

千葉県 流山市立おおぐろの森中学校 3年
鈴木 結 『言葉と意思と物語』

東京都 吉祥女子中学校 2年
山中 彩帆里 『人生の通過点?~十代 (adolescence) の自分とどう向き合うか~』

新潟県 燕市立吉田中学校 3年
古澤 奏 『食物アレルギーが僕たちに教えてくれること』

山梨県 富士吉田市立吉田中学校 3年
渡邊 峰栞 『「きょうだい児」の私にしかできないことを』

静岡県 沼津市立長井崎小中一貫学校 9年
大城 柚稀 『過疎化から地域を救う取材』

【中部・近畿ブロック】

石川県 金沢市立長田中学校 3年
松末 明生 『「考えない葦」はただの葦』

福井県 坂井市立三国中学校 3年
向野 一愛 『私の後悔、そして願い』

三重県 いなべ市立藤原中学校 2年
高田 鈴奈 『祖父はつまらない人?』

岐阜県 養老町立高田中学校 3年
服部 心 『家族との時間』

滋賀県 立命館守山中学校 2年
山中 萌衣 『小さな幸せは大きな幸せ』

大阪府 大阪市立西淀中学校 3年
宮原 咲心 『叶わない夢にも意味がある』

兵庫県 太子町立太子東中学校 1年
金家 渚 『自分らしく生きる』

奈良県 香芝市立香芝西中学校 3年
太田 圭亮 『スズメの役割』

和歌山県 日高川町立丹生中学校 2年
川口 瑞月 『「理解するということ」』

【中国・四国ブロック】

岡山県 岡山県立倉敷天城中学校 2年
宮田 真希 『推すすめ』

広島県 尾道市立日比崎中学校 3年
北口 美結 『まずは地域から』

山口県 長門市立仙崎中学校 3年
美濃 穂乃花 『「命の尊さ」』

徳島県 徳島市上八万中学校 2年
山口 陽菜乃 『思春期の取説』

香川県 さぬき市立志度中学校 3年
野崎 和奏 『Give and Give の合言葉』

愛媛県 新居浜市立中萩中学校 3年
水田 葵彩 『最期までどう生きたい?』

高知県 南国市立北陵中学校 3年
和田 陽南子 『「普通」にとらわれない社会へ』

【九州ブロック】

佐賀県 学校法人東明館学園東明館中学校 2年
原武 凜奏 『私の人生の模範解答』

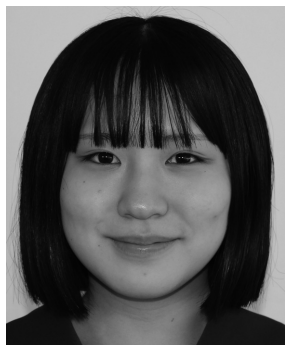
長崎県 松浦市立志佐中学校 3年
土橋 真采 『ありのままの松浦』

熊本県 熊本市立鹿南中学校 3年
平 歩依 『自由を求める私たち』

大分県 玖珠町立くす星翔中学校 3年
平井 さくら 『好きなことにまっすぐに』

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 2年
横山 恵都 『自分らしく生きる』

沖縄県 那覇市立安岡中学校 3年
下地 琉聖 『自分』



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

二つの尊重のバランス

青森県 むつ市立田名部中学校 1年

二本柳 凜子

五年生の時、ある女の子に

「好きなの。つきあって。」

と言われ、びっくりして断ったことがあります。その後、その子は違う子と手をつないで歩いていました。みんなは、「気持ち悪い」「女の子同士なのにね」などと悪口を言っていました。その頃の私は、同性の人を好きになることはおかしいという固定概念を持っていましたが、英語を習いはじめ、他の国の現状を知り、日本は多様性の受け入れに遅れていることに驚きました。と同時に、この問題に興味を持つようになりました。

日本で多様性が当たり前になる日は、いつ来るのでしょうか。確かに、この問題について、国は様々な対策を行っています。その一つとして、近年、「ジェンダーレストイレ」が設立されました。

先日、ある映像が目にとまりました。ジェンダーレストイレで、たくさんの男性が、用もないのに、入口で女性を待ち伏せするようにたむろしている様子が映し出されていました。ジェンダーレストイレは、性的マイノリティーの方や子供連れのお客、障がいをもつ人など、従来の男女別トイレでは不便や困難を感じる人のために設置されたトイレです。ですが、ジェンダーレストイレが増え、男女別トイレが減っていけば、性犯罪のリスクが高まり、不安を持つ人が増えるばかりです。メリットの割にデメリットが多すぎます。

多様性を尊重することは今の時代、とても大切なことで、「ジェンダーレストイレ」設置は、多様性が当たり前の社会につながる大きな第一歩だと思います。しかし、全てのトイレが「ジェンダーレストイレ」になってしまうと、多様性の尊重と個々のプライバシーの尊重のバランスがとれなくなってしまうのではないのでしょうか。多様性の尊重と個々のプライバシーの尊重。この二つのバランスをとることで、みんなが安心して暮らせる社会になると思います。

そこで、私は二つの案を考えました。

一つ目は、「多目的トイレを増やす」ことです。性的マイノリティーにも多くのセクシュアリティがあります。「多目的トイレを増やす」ことによって、本来どうしても必要としている障がいのある人以外にも、自分の性別に悩んでいる人も使えるようになれば、多様性の尊重と個々のプライバシーの尊重のバランスがとれるのではないのでしょうか。

二つ目は、「全ての男性用トイレを個室化、洋式トイレにし、サンタリーボックスを設置する」ことです。これには二つのメリットがあります。一つ目のメリットは、たくさんのセクシュアリティの中で、自分自身を男性と自認しているが、体質等により性転換手術や治療を受けておらず、月経がきている人にとって、「全ての男性用トイレの個室化、洋式トイレ、サンタリーボックスの設置」によって、誰でも安心してトイレを使うことができるのではないのでしょうか。

二つ目のメリットは、個々のプライバシーの尊重につながることです。従来の男性用トイレでは、隣の人の視線が気になる、という人も多いのではないのでしょうか。「完全個室化」により、個々のプライバシーの尊重につながります。これこそ、みんなが安心して暮らせる社会になると思うのです。

以上の理由から、「ジェンダーレストイレ」を撤去し、「多目的トイレを増やすこと」と「全ての男性用トイレを個室化、洋式にし、サンタリーボックスを設置する」ことを提案します。

日本が少しでも早く多様性が当たり前になり、全ての人が安心して心から笑顔で暮らせる日が訪れることを願っています。

この主張をどんな人に届けたいですか？

全ての人に届けたいですが、特に自身の性別で悩んでいる人に届けたいです。多様性が当たり前の明るい社会を創り上げるためには、周りの人の理解や関心が必要だと思います。それを得るためには、やはり考えや思いを周りに伝えることが必要です。私の主張を聞いて、自身の性別で悩んでいる人はどう考えるのか、自身の性別で悩んでいる人はどう考えるのか、それらをお互いの立場の人が伝え合ったうえで、改めて考えることによって、やっと多様性が当たり前の社会に繋がる、現実的かつ合理的な対策案・解決案が見つかると思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

心に平和のとりでを

岩手県 北上市立南中学校 2年

千田 ソフィア

「早く帰ってきて！」突然の母からの電話。小学6年生の3月。私は学校を早退し、言い表せない不安な気持ちのまま、家まで走って帰りました。「ウクライナで戦争が始まった…」と言って、母は私を抱きしめて泣きました。遠く離れた母の故郷で戦争が起きたことをすぐには受け入れることができませんでした。

私は、日本人の父とウクライナ人の母の間に生まれました。ウクライナには母方の祖母が今も住んでいます。みなさんはウクライナと聞いて何を思い浮かべますか。日本では、ロシアとの戦争で知った人が多いでしょう。私はこれまでに何度かウクライナに滞在していたことがあり、祖母のダンス教室に通う人や、いとこを通じて友達もできました。私の学校の敷地の5倍以上はある美しく広大なひまわり畑。隣のお菓子屋さんのバナナアイスの味は忘れられません。私は豊かな自然と優しい心を持ったウクライナの人々が大好きです。

戦争が始まってからニュースなどでウクライナの現状について報道されることが多くなりました。澄んだ青空は爆撃機が飛び交うようになり、美しかった小麦畑はダム襲撃による洪水で失われました。また、ロシアからの襲撃や虐待に怯える日々で、多くの人が安心して生活を送ることすらできなくなりました。祖母もその一人で、ミサイルが多い日には10発も飛んで来るので怖いと、泣きながら電話をします。私はそんな祖母の声を聞くと、いつも胸が苦しくなります。私はいつかまたウクライナに行ける日が来ると思っていました。しかし、激しい戦闘を経てあの日見たひまわり畑はあるのだろうか。あの時、一緒に遊んだ友達は無事なのだろうか。優しく面倒を見てくれた大人達は武器を持って今戦っているのだろうか。人々が長年積み上げてきた生活や文化、思い出を互いに破壊しているのです。失われた文化財も人の命も取り戻すことはできません。戦争で傷ついた心を癒やすこともそうたやすくはありません。いつ終わるか分からない、たとえ終わっても元通りに戻すことができないのが戦争なのです。

わたしたちの日常でも、相手の立場や状況を考えず、自分の思ったことを伝えてすれ違うことがあります。まして、文化が異なる国同士では価値観がすれ違ってあたりまえなのです。

「戦争は心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」これはユネスコ憲章の前文に書かれている言葉です。私は、平和のとりでになりたいのです。まずは、相手の話に耳を傾けること。そして、相手に自分たちの考えや文化を知ってもらおうと発信すること。この2つで平和のとりでを築くことができると思っています。私は、ウクライナや日本という枠にとらわれず、さまざまな人々の文化や考え方を理解し、自分も考えを発信して、平和のとりでを築いていきたいです。その第一歩として、チャリティの際、私はこの衣装でウクライナの民族舞踊を披露しています。みなさんも平和のとりでになることができます。自分の思いを伝え、相手に歩み寄り、一緒に平和のとりでを築いていきませんか。

この主張をどんな人に届けたいですか？

今回の主張は、私の母がウクライナ人ということで、日々起きているウクライナの現状を伝えたいと思いました。特に、戦争を知らない私たちのような世代に、世界で今起きていること、それが自分たちにも関係があり、何をすべきか考えるきっかけにしてほしいです。周りの人への優しさを持ち、戦争が二度と起きない社会を作りたいです。

国立青少年教育振興機構努力賞受賞



言葉を紡ぐ

宮城県 東松島市立矢本第一中学校 3年

入駒 奏羽

「消えろよ。」

ある日の休み時間。いつも通り少し騒がしくて、そして皆の笑い声が響く楽しい時間でした。そんな時に、私の耳に入ってきた言葉。

「お前さー、まじで消えろよ。」

そう笑いながら言う姿に、私は言いようのない衝撃を受けたのです。普段ならそこまで気にせず、聞き流してしまっていた言葉。しかし、その日はなぜかはっきりと聞こえた笑い交じりの「消えろ」が、頭に残って離れませんでした。私が言われたわけでもないのに、笑って話している中で出た冗談だとも分かっているはずなのに、なぜか私は、その言葉が気になって気になって仕方がなかったのです。

「どうして、あんなに軽々しく「消えろ」が言えるのだろう。どうして、人を傷付ける言葉を笑って言えるのだろう。」そんな疑問が胸に渦巻き、誰にもその疑問を打ち明けることもできないまま、私の心はモヤモヤとした気持ちを抱えることになりました。

皆さんは動画を見たりしますか？その動画にどんなコメントが書かれているかを見たことはありますか？どんなに可愛くても、どんなに上手でもコメント欄にはこんな言葉たちがあふれています。

「可愛くない」「下手すぎ」「見てられないんだけど」「動画出すのやめろ」「まじでウザい」「顔出すな」

その人を否定する誹謗中傷の言葉たち。きっと軽い気持ちで書いているのでしょう。もしかしたら良かれと思って書いているのかもしれませんが。しかし、この言葉たちを向けられた人が傷付いていないわけがないのです。しかし、そのことに気付いている人は多くはありません。「言葉のナイフ」が簡単に誰かに向けられるようになってしまっていると私は思うのです。ではなぜ、このような人を傷付ける言葉が軽々しく言われるようになってしまったのでしょうか。私は、先ほど触れたネットの世界が関係していると思います。テレビだけでなく、今は配信された動画を見て楽しむ時代になりました。そして時に、人を攻撃する言葉は、「いじり」として笑いを呼びます。そしてそれは、そのまま現実の世界に戻ってきます。ネットで許されるなら現実でも言っているだろう、やっていこうがエスカレートしていき、人を傷付けることにためらいが失われていったのだと思います。その結果、言葉の意味や伝わる思いを考えず、私たちは言葉を軽々しく使ってしまうようになってしまったのだと思います。

このままでは、気付かないうちに誰かを傷付けてしまう社会になってしまう。私はそんな未来になってしまうのが怖くてしかたありません。そうならないためにも、私たちは何をしなければいけないのでしょうか。私自身、軽はずみに言葉を使ってしまい、人を傷つけてしまったことがありました。だからこそ、それに気付けた今、自分の言葉に責任を持たなければいけないのです。言葉の意味を、どのように相手に伝わっていくのかを考えて言葉を発していかなければいけないと思います。

世の中には「言葉を紡ぐ」という言い回しがあります。言葉を「紡ぎ」、人と「繋ぐ」私たちだからこそ、伝える言葉に意味を持たせて、大切に生きる方をしていきたいと思うのです。言葉はたった一言で人を生かすこともできるし、その命を奪うこともできます。そのことを忘れず、大切に言葉を紡いでいきたいと思います。皆さんも、相手に思いを伝える言葉を大切に、皆が笑顔になれる言葉を紡いでいきましょう。私も自分の言葉を誰かを攻撃するためじゃなくて、誰かを守るために、誰かを勇気づけるために使っていきたいと思います。「消えろ！」じゃなくて「一緒にいてくれてありがとう」を私は伝えていきたいと思います。これからの未来が、言葉でも助け合い、温め合える世界になりますように。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

動画を見ていたときにふとコメント欄を見ていたら、心無い言葉が飛び交っていた。様々な動画のコメント欄を見ていくうちに心無い言葉は当たり前のように使われてしまっているのだと感じた。そんな世の中であり続けてよいか。言葉は使い方を間違うと人を死にまで追いやる事ができてしまう。そんなことを少しでも減らし、言葉を正しく使って笑顔が増えていく。そんな未来をつかっていきたい。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

AI と一緒に

秋田県 大館市立比内中学校 2年

萬田 花歩

最近、AI（人工知能）という言葉があちこちで聞かれるようになりました。数多くの情報を取り入れ、一瞬でどんなことにでも答えてくれる、このAIをあなたはどう思っていますか。便利だから、難しいことは何でも任せて、やってもらおうと思いませんか。でも、果たしてそれでよいのでしょうか。

私がこのことを考えたきっかけが、ある日の夕食の時のニュースでした。

「アメリカ投資銀行のゴールドマン・サックスは、三億人分のフルタイムの仕事が、AIによって取って代わられる可能性がある、との報告書を発表しました」

これを聞いた弟は、「AIって、すごいねえ」と感動していました。

しかし、私は次の瞬間、母から心に突き刺さるような一言を言われてしまったのです。

「でも、花歩の医者夢とられちゃうんじゃない。」

ぞっとしました。私の夢は、多くの患者さんを救う医師になることです。その夢が、AIによって奪われてしまう。その夜、私はAIについて、ずっと考えていました。

AIは、私たち人間がはるかに及ばない処理能力をもっています。私が今がんばって勉強している式の計算も、たくさんの化学反応式も、年表の人物だって、AIはすぐに分かっけてしまいます。私になりたい医師の、患者さんの症状を元に、何の病気かと判断するという難しい仕事であっても、AIは膨大なデータベースを使って一瞬で判断してしまいます。人間なんてかないっこありません。

「では、AIは優れた医師になれるのか」

私の答えは「NO」です。医師に、人間に必要な力は、計算する力、暗記する力だけではありません。人の思いを考える力、とても大切です。

そう思うと、AIに負けている「偏差値」よりも、もっと深刻な問題に思いが至りました。それは「読解力の低下」です。みなさんは知っていますか。今、日本では、「教科書を読めない子ども」が増えているそうです。文字は読めますが、「本当の意味で読める」に当てはまる人は少ないのです。神様が私たちにくれた、AIにはない能力。それは、登場人物の気持ちになって、筆者の気持ちになって本を読むことができるという「心」です。誰かの気持ちになって考えるという心の大切さは、本の中だけではありません。学校生活の中でも、社会に出てからもとても大切なことです。

もし、AIが高い知性ゆえに医師免許試験に受かったとします。そうしたら、医師の仕事は減って楽になるかもしれません。でも患者さんはそれで安らかな気持ちになれるでしょうか。AIは、人間の医師のように患者さんの心を理解しようとはしません。患者さんの苦しみや心を、ただ活字で表すだけでやめてしまいます。相手の心を理解するというのは、人間だけにしか出来ないことです。人間は、AIに医療知識で負けても、医学を進歩させ、患者さんを救うことを諦めずにきました。

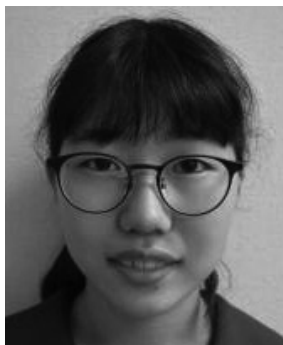
AIにはたくさんの優れた良さがあります。でもそれと同時に私たち人間にも優れた良さがたくさんあります。そう思ったら私のAIに対する思いは、次のように変わりました。

AIの発達でなくなる仕事を目指すのは、諦めろとか、生き残る仕事をしろということにとらわれてはいけません。これからどう発展するか分からない時代に生きる私たちは、AIに依存するのではなく、AIを拒絶するのではなく、共に生きる。これが大切。そのために私たちは読解力を身に付けなければなりません。そして、相手の心を理解した上で、AIを道具として使い、一度きりの人生を充実したものにしていきたいと思います。

翌朝、私は母に言いました。「私、AIと一緒に生きてみる。」

この主張をどんな人に届けたいですか？

これからの社会を創っていく年代の皆さんに届けたいです。人間は、豊かな生活を手に入れるために、たくさんの分野で「便利さ」を追求してきました。「AI」は、そのうちの一つです。人間よりもはるかに優れた処理能力をもつAIは、私たちが大人になるころには、さらに能力を発揮していくことでしょう。しかし、人間だけにしかない優れた能力、「相手の心を理解する力」があってこそ、初めて社会は成立するのです。人を思いやる心、人の痛みを察する心…AIと共に生き、人間だけにしかない素晴らしい力を存分に発揮して、「豊かな社会」を創っていきたくたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

今日から私が宣伝部長

福島県 須賀川市立小塩江中学校 3年

押川 千晏

特設駅伝部部长、厚生委員会委員長、生徒会副会長。これは前期生徒会総会の際、私の名札に書いてあった肩書です。それもそのはず、私が通う学校は、全校生が十九人。三年生はたったの五人だけなのです。

須賀川市立小塩江中学校は、宇津峰山のふもとにある、自然がいっぱいの学校です。一年生から三年生まで、ほとんどが幼なじみで、お互いの家族の顔まで思い浮かべることができます。小塩江以外の地区から通っている人もいますが、いつの間にか、幼なじみの輪に入ってしまうのです。けんかする気も消えてしまうような、本当にのどかなところですよ。

そんな小塩江中学校は、間違いなく、須賀川で一番行事が多い学校です。皆さんは全校で田植えや稲刈りをしたことがありますか？小塩江では小学生や地域のお年寄りと一緒に、毎年お米を作るのです。それだけではありません。なんと、みんなでお餅をついてお腹いっぱい食べる、収穫祭までやってしまいます。私たちの時間割は、行事がない週の方が珍しいくらいです。

部活動だって盛んです。私が入っていた卓球部は、七人の部員全員で団体を組み、中体連で五年ぶりに県中大会まで勝ち進みました。特設の陸上部と駅伝部、合唱部にはほぼ全校生が入っています。夏休みは、走って、歌って、常設部の練習をして、毎日大忙しです。一人ひとりが大事な戦力だから、みんなが一生懸命頑張れるのです。

もうお分かりのように、私たちは小塩江と小塩江中学校が大好きです。でも大好きだからこそ、私たちにはとても大きな心配事があります。

私たちの多くも通った小塩江幼稚園は、今年の三月に二人の園児を送り出して、休園になりました。小塩江小学校と中学校に新しく入ってくる子どもは、もういません。つまり、私たちの小塩江地区は、近い将来、子どもが一人もいない場所になってしまうかもしれないのです。

数年前、このことに気づいた私の先輩たちは、この大問題に立ち向かうため、ある素敵な取り組みを始めました。その名も「小塩江プロジェクト」！ ずばり、小塩江のよさを須賀川中に広め、小塩江中学校の仲間になってもらおうというものです。

それからというもの、私たちは、教室や学校を飛び出して学ぶ行事を増やし始めました。先ほど話した田んぼの学習はもちろん、おうちの人たちと一緒に楽しむ球技大会に、地域の方も出し物をしてくれる文化祭。須賀川支援学校との交流会。ボランティア活動にも、全校で取り組んでいます。もちろん、たまには「忙しいな…」と思う瞬間もあるけれど、「小塩江プロジェクト」と聞くと、みんな目の色が変わって気合が入るのです。

小塩江プロジェクト。そう。三年生の中でも一番引っ込み思案な私が、今日ここに立とうと決めたのも、このプロジェクトにどうしてもひと役買いたかったからなのです。

私は、みんなが家族みたいにとっても仲良しなこの学校を、なくしたくないのです。毎朝嬉しそうに声をかけてくれるおじいちゃん・おばあちゃんを、寂しくさせたくないのです。全員が主人公になって頑張れる小塩江中学校を、なくしたくないのです。

私はあと半年もしないうちに、小塩江中学校を卒業します。小塩江に高校はないから、卒業したら、この場所を離れることも決まっています。しかし…いや、だからこそ、私は小塩江が好きだと伝え続けます。

「小塩江中学校をなくさないで」なんて言いません。私たちが、そして私が、みんなが小塩江に来たくなるようにしてみせます。最初の宣伝先は、今日来てくれた皆さんです！

大好き、小塩江！ おいでよ、小塩江！

今日から小塩江中学校宣伝部長 押川千晏

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私の学校の生徒数は、年々減少しています。そこで、私の先輩が生徒数を増やすため、『小塩江プロジェクト』というプロジェクトを始めました。私も、少しでもこのプロジェクトに協力したかったため、まずは、小塩江の魅力をもっと多くの人に知ってもらおうと思いました。小塩江の魅力と現状を須賀川市中に発表したいと思ったのがきっかけです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

女性が毎日笑顔でいられるように

栃木県 宇都宮市立宝木中学校 3年

星野 みおり

みなさんは、「生理」「月経」と聞くと、どんなイメージを持ちますか。「恥ずかしい」「話題にしにくい」といったことを思い浮かべる人も多いことでしょう。現代の日本では、生理の話を口にするのを、タブーとする意識が広く浸透していると思います。

しかし、それは少し違うような気がします。生理がくることは当たり前のことですし、恥ずかしいことではないからです。私は、生理になったばかりの頃、生理用品を上手に使いこなせず、困っていた時期がありました。生理をタブー視する風潮から、なかなか友人や先生に相談できませんでした。また、生理痛の重い私の友人は、腹痛や頭痛を感じながらも、男性の先生になかなか言い出せず、痛みを我慢しながら授業に参加していました。このように、生理で困っていることを「困っている」と言いにくい風潮に、私は疑問を感じています。

そんな時に、私は「生理の貧困」という言葉を知りました。「生理の貧困」とは、生理用品を買うお金がない、あるいは手に入れる方法がないなど、利用できる環境にないということを示す言葉です。発展途上国のみならず、格差が広がっている先進国でも、問題になっているそうです。世界中で問題になっているにも関わらず、「生理の貧困」に対する心ない意見をインターネット上で目にしました。「どうして数百円の生理用品さえも買えないのか」という、貧しさを批判する声でした。

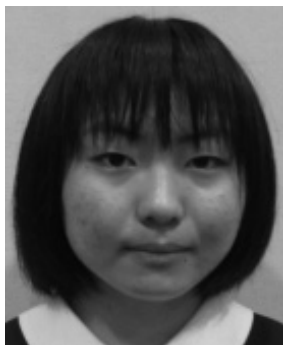
なぜ、このような意見が上がってしまうのでしょうか。私は、生理に対する社会全体の理解不足が大きいと思います。生理は、女性が出産をするための大切な準備です。だからこそ、男性も女性も、次世代の社会のために、生理についての正しい知識をもち、理解すべきだと思います。女性は、一人一人が自分の体について知るべきです。そして、男性には、生理の時の女性の体の変化について知ってほしいです。また、生理用品を買うことの大変さも理解してもらいたいです。たった数百円の生理用品も、年間にすると、大きな金額になります。また、急に生理になってしまった時に生理用品がないと、日常生活に支障が出ることもあるのです。

そんな時に、テレビのニュース番組で、学校にも生理用品を設置する動きが広がっていると知りました。しかし、私の学校には設置されていませんでした。先生に何うと、「生理用品を無駄に使われてしまったり、いたづらをされてしまったりしたことがあったからだよ。」と仰っていました。確かにそれは良くないことです。しかし、ルールを明確にしてしっかり管理をすれば、また設置ができるのではないかと思います。そこで、私は「校内の女子トイレに生理用品を設置する」という公約を掲げ、生徒会役員に立候補しました。急に生理になってしまって、困る人の助けになればと思ったからです。設置するだけでなく、定期的に補充をするなど、自分なりに責任をもって管理をしています。また、校内放送や生徒会朝会では、全校生徒に呼びかけを行いました。「生理をタブー視する風潮を変えたい」「生理を理解してほしい」という話をしました。初めは、生理の話題を出すことに抵抗がありましたが、誰かの役に立つと思えば、あまり気にならなくなりました。「生理用品があったから、慌てないで済んだ。助かった。」という声を聞くと、とても嬉しく思います。

こういった小さなことの積み重ねが、生理へのタブー視や不浄感を少しずつ払拭していくと私は思います。男女問わず、憚ることなく生理に関する話題ができ、誰もが生理の正しい知識を得られたら良いと思います。そして、「生理は当たり前」という意識と理解が広まる社会になることを願います。女性が毎日笑顔でいられるように。

この主張をどんな人に届けたいですか？

男女関係なく、みんなに届けたいです。現代の日本では生理をタブー視する風潮があります。ですが、それは生理は汚いもの、恥ずかしいものという不浄感を抱きやすい固定観念からくるものだと思います。そんな固定観念に囚われ、不浄感を抱くその前に、男女共に生理を理解し、受け入れようとしてほしいです。今はまだ難しいことかもしれないけれど、一人ひとりが生理は「当たり前」という意識を持つことができれば、女性が毎日笑顔でいられると思うからです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

吃音で良かった

群馬県 前橋市立第七中学校 3年

福島 由萌

みなさんは、吃音を知っていますか。吃音とは、話を始めるときに最初の一音に詰まったり、言葉が滑らかに出てこなかったりする発話障害の一つです。「ここここ、こんにちは」と同じ言葉を繰り返す連発、「こーんにちは」と音を伸ばす伸発、言葉が発せなくなる難発の症状があり、決まった治療法は見つかっていません。私は小学生のときに、吃音になりました。

吃音になって苦しかったことや辛かったことがいくつもあります。友達や家族と話しているとき、話したいことがあっても急に言えなくなってしまいます。そんなときは笑ったりうつむいたりしてごまかしていました。小学生の頃にやった詩の暗唱では、覚えていたのに言えなくなって、不合格になったことがありました。あのとき、担当の人に「また次ね。」とカードを返された悔しさは今でも忘れられません。また、音読で自分の番が来たとき、言葉が出てこないこともありました。先生に自分の読む文を指でなぞられて焦ったことも忘れられません。

なかでも一番辛かったのは、中学一年生の一学期頃です。さすがに中学生になれば治ると思っていた吃音が、治らなかつたのです。吃音について知ったのもこの頃でした。言葉が発しづらい、と検索したら吃音のことが出てきたことから、深く知るようになりました。吃音について知ったことで、余計に気にしてしまいました。さらに、この頃から周り自分を比べてしまい、言いたいことが言いつらい苦しさ、みんなは普通に言えているのにという焦りが大きくなりました。今思えば、小学校のときよりこの頃の方が症状はよくなっていました。でも、私がひどく気にしていたせいで、言えなくなったときに出る「う」「さ」「す」という自分の耳に聞こえてくる詰まった音や空気漏れのような声が気持ち悪くてたまらなく感じました。周りの人に相談すると、みんなが「気にならないよ。」と言ってくれました。でもどうしても気になって、夜中に洗濯機の音で自分の声を隠して、家族に気づかれないように文を読み上げる練習をしました。何度やっても言えなくて、「もう嫌だ。」と声を殺して泣きました。自分よりもっと重い吃音の人もいる、自分の吃音は全然目立っていない。分かっているはずと苦しんでいました。私は、吃音を心から恨んでいました。

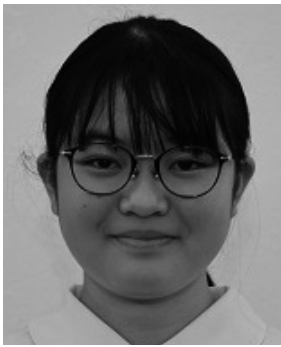
ある日、私を大きく変えてくれた出来事が起こりました。夜中に眠れなくて一人で吃音について調べていたとき、吃音のラッパーを見つけたのです。その人は吃音を抱えながら苦しうに話していました。しかし、歌うときには、自身の思いを力強くラップにのせて叫んでいました。「俺は普通に友達と話したいだけ 好きな食べ物を普通に注文したいだけ」そんな歌詞の一つ一つから思いが伝わってきて、鼻の奥がツーンと痛みました。曲の後半、「吃音で良かったと言えますか 最後にそう思えるならば幸せです」そんな彼の問いかけを聞いた瞬間、私はそう言える日が来るのだろうか、と思い泣いてしまいました。吃音のせいで夢を諦めたくない、幸せになれないのは嫌だ、という色々な思いが溢れ、曲が終わるまで涙が止まりませんでした。彼に背中を押された気がしました。

涙を拭きながらいつか吃音で良かったと言おうと心に誓ったあの日から、私はだんだんと変わっていったと思います。自身の短所を強い武器にした吃音のラッパーを知ってから、吃音のことをあまり気にしなくなり、今はあまり恨まず、うまく付き合えていると思います。「気にならないよ。」と言ってくれた家族や友達、先生、私を変えてくれた彼に心から感謝したいです。

でも、やっぱり私はみんなと何も気にしないで話したいし、相変わらず言えないと聞こえる自分の小さい音や声は嫌だし、思い返すと吃音でいい思い出は思い当たりません。だから、吃音がなければ、と思うことがよくあります。でも、吃音でなかったら大勢のみなさんの前で話すような経験はできなかつたし、苦しんだけれど自分についてあんなに考えることもなかつた、そう思うと、吃音が何か特別なもののように感じます。だからいつか「吃音で良かった」と言えると思います。人は自分の短所を見つけると、どうしても嫌ったり、恨んだりすると思います。でも、短所だって自分にしかないもので、自分次第で武器や個性にできます。すべての人が自分の短所を嫌わず、武器にしたり、個性にしたり、気にしないでいられるようになったら幸せです。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

この作品を書いたきっかけは、自分が吃音だということを周りの皆に伝えたかったからです。発表の原稿を考えているとき、「発表で言葉が言えなくなったら、変だと思われるかも知れない。」と不安になっていました。そんなとき、「自分が吃音だと伝えられたら、言えなくなっても変だと思われない。言いたいことが言えない苦しさも伝えられる。」と思い、今まで隠してきた自分の吃音について、自分が吃音について思うことを書くことにしました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私のおばあちゃん

埼玉県 本庄市立本庄東中学校 3年

村上 滉歩

「何で私のおばあちゃんはどうなんだろう。一人じゃ何もできないし、私のことだってわからない。」

3年前に亡くなった私の祖母は、認知症でした。私が生まれる2年前にアルツハイマー型認知症と診断され、私が物心ついたときは母がつきっきりで介護をしなくてはいけないような状態でした。小学校低学年くらいまでの私は、周りの子みたいに、若くて優しく、欲しいものを何でも買ってくれるようなおばあちゃんがいることを羨ましく思っていました。

幼稚園の頃の私は、「認知症」とはわかっていても、祖母の行動に驚くことがたくさんありました。机の上に置いてあった私のおもちゃを口に入れたり、あめ玉を舐めずに飲み込んだり、誰かが見ていないと危ないこともよくありました。そんな祖母のことを、私は正直よく思っていないでした。なぜなら、祖母さえいなければ、母を独り占めできたからです。昔、母はよくこんなことを言っていました。

「おばあちゃんがいるときはおばあちゃんが一番で、おばあちゃんがいなくては一ちゃんが一番だよ。」と。その頃の私は、母の言うことは全てその通りだと思っていたので、疑問に思いませんでした。

私はよく母と、祖母のいるデイサービスに行っていました。知らないおばあちゃんが私に、「可愛いね。いくつ？」と聞いてきたので私は、「7才。」と答えました。すると、1分もたたないうちにまた同じおばあちゃんが、「可愛いね。いくつ？」と聞いてきたので、私は同じように、「7才。」と答えました。その後も何度も同じことを聞かれたけれど、私は同じことを聞かれるのは祖母のことで慣れていたので、何度も同じように答えることができました。帰り道で母に、「さっきは偉かったね。」と褒められました。

介護は決して簡単なものではありません。ましてや、一人では何もできない人や、コミュニケーションをとれない人の介護は、大変なことも多いです。しかし、だからこそ、うれしいこともあります。私が祖母に小さく切ったりんごを食べさせてあげたとき、私が、

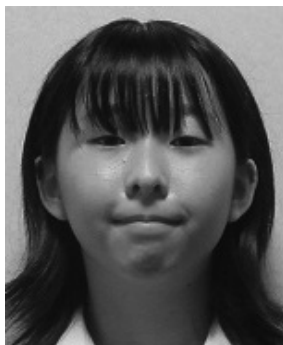
「おいしい？」と聞くと、いつもは無反応だけれど、ときどき、「うん。」とうなずいてくれたのは、本当にうれしくて、すぐに母に伝えました。無反応のように見えるけど、孫に対する愛情は、失われていなかったのです。当時はわからなかったけれど、今思えば、愛情をうまく伝えられなかっただけなのだと思います。今になって、母にもこんなことがあったのかなと思ひ聞いてみると、

「もちろんあるよ。介護は最初のうちは大変なことばかりで辛いけれど、ずっと何年も続けていると、大変なことは変わらないけれど、おばあちゃんに癒されることもあるんだよ。」と教えてくれました。「おばあちゃんの一瞬の笑顔で、その日一日が幸せな気持ちになるんだよ。」とも言っていました。当たり前ですが、祖母は最初から認知症だったわけではありません。愛情を注ぎながら母を育てていた頃もあったのです。母は、祖母と一緒にいることを幸せに思っていたと思います。また祖母も、娘である母の温もりを感じて安心していたのだと思います。

中学生になった今、私には何ができるだろうか。わかっているつもりでも、もっとしっかりと認知症について知ることから、まずは始めてみたいです。どんなサービスや介護の選択肢があるのかを調べ、元気なうちに父や母の考えを知り、話し合うことも大事だと思います。高齢になると、誰でも介護の必要性が出てきますが、それぞれの家族で事情が違います。一人一人の状況にあった介護サービスが受けられる社会になればよいと思います。いつまでも家族の絆が切れることなく、どんな時でも家族が互いを思いやり、心が通じ合えたら素敵ではないでしょうか。そのために一番大事なのは、家族に対する優しさや思いだと思います。それは、家族との日頃の何気ない会話ややり取りから生まれるものかもしれません。私は、そんな家族との時間をこれからも大切にしていきたいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

家族との関係と向き合っているすべての世代の人に伝えたいです。言葉で表さなくても、温もりやその存在だけで安心できるのが家族だということを、今回あらためて感じました。それを教えてくれた祖母に、私は今感謝しています。家族の在り方は人それぞれですが、自分も含めその存在の幸せに気づいていない人は多いと思います。そんな当たり前の大切さに気づくきっかけになれば嬉しいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

言葉と意思と物語

千葉県 流山市立おおぐろの森中学校 3年

鈴木 結

「今日、学校行きたくない。」

その一言によって全てが変わった私の人生と今に至るまでの一年半に及ぶその物語をどうか聞いて下さい。

小学校の頃から朝がだるい、頭が痛いという理由で度々学校を休んでいた私。三か月に一度は朝のだるさが原因で学校を休んでいた気がします。その言葉を母に言った令和四年六月のその朝もきっと原因はそれだったのでしょうか。ただ、いつも言う「学校行きたくない」とは少しだけ事情が違いました。人生最低と言ってもいい程気持ちが沈んでいたその日は、過去に学校であった嫌な思い出や辛い感情が自分をとり囲んでいました。今の学校における環境が辛い訳ではないのに、過去に孤立していた思い出や軽いイジメにあったことが蘇り今の環境でそれが起こるのを恐れたあまりか、その日は学校に行く気が起きませんでした。そしてそこに追い打ちをかけるかの如く、父が

「そんなに体調が悪いなら、病院に行ってください。」

と言葉をかけてきました。これも私が学校を休む日の恒例と言っても過言ではなかったのですが、全てから目を背けたかった私にとって当時はその言葉がとても痛かったのを覚えています。また父の言葉から母は私に

「何がだるいの？病院にかかるならどの科？」

という質問を投げかけてきました。無視して黙り込む私を見かねて内科や耳鼻科など様々な病院の名前をあげてくれた母。そこに出てきた選択肢の内、『精神科』に頷いたことが全ての始まりだったといえるのでしょうか。

その一言、その動作から歯車が動き出してしまった私の人生ですが辛い事ばかりではないよう支えてくれた人が居ました。実は六月なんてまだまだ先の四、五月頃の事、私は当時の担任の先生に親にも言えないことを相談していました。辛い事があった時、自分を傷つけてしまう事があると。絶対に引かれる。そんな気持ちで告げた言葉に対し、先生は

「よく頑張ったね。」

とただただ優しく接してくれました。泣きじゃくる私の背中をずっとさすってくれました。その日、そして先生の優しい目は今でも忘れる事なんて出来ません。

そして時は流れてあの日から一年が経った今。受験も控えるこの年、気合を入れて完全復帰…なんてできる訳もなく今に至るまで学校には人よりも全然行っていません。ですが今はこの環境に満足しています。理由は進路を通信制高校に決めたこと。これが挙げられます。通信制と聞いて良く思わない人、沢山いると思います。でもそんな人達にこそ聞いてほしいです。自分で見て、聞いて、感じたことで判断してほしいと。世間に流されないで欲しいと。私も通信制高校に見学に行く前は世間のような反応でした。でも現実はずう。少なくとも私が見たその場所は天才も、秀才も集う場所でした。全日制の高校よりも進んだことをしているとすら思いました。全日制の高校だって頭がいい人も居れば、悪い人もいる。母数が大きいだけで割合はさほど変わらないのではないかと。ただ母数の大きさを考えずに頭が悪い人が行くななんて言う人はきっと中身を見ていないのではないかと。そうとすら思いました。

そしてもう一つ、私が思うことは自分の意見を少しでもいいから、しっかり前に出すということです。私は親に意見を伝えた事で今、思う存分に生活をする事ができていると思っています。少し怖い存在になっていた父も進路について語った際には涙を流しながら

「よく頑張ったね。」

と私が欲しかった言葉をくれました。母は私が思いを伝えた後、常日頃からずっと私を支えてくれました。そう、父も母も私と同様に、それ以上にどうあるべきかを悩んでくれたのだと、その時に実感しました。意見を述べたからと言って誰もがこうなる訳ではありません。それでも私は意見を前に出すことが大切だと、心から思っています。あの六月を後悔して、周りの目が怖くなって。けれど言葉、意思と共に前に進んだから今、私はこうして生きています。これが私の主張、そして一年半に及びこれから先も続いていく、私の物語です。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この作品を通して自信が無く、言いたいこともなかなか言うことができなかつた自分を変えて、少しでも自分の人生に自信を持ち前を向いて夢を叶えられるような人生にすべく、作文するに至りました。この先の道で挫折することがあるとしても、今までの人生で抱えてきた辛い感情や楽しかった記憶など様々な思いを胸にして、この作品と共に一步一步自分らしく人生を歩んでいきたいと思えます。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

人生の通過点？～十代 (adolescence) の自分とどう向き合うか～

東京都 吉祥女子中学校 2年

山中 彩帆里

「最近、何か寂しいな。」

朝、学校に行くため私がそそくさと支度をしていた時、お弁当を渡してくれた母が発した言葉でした。小学生の時の私は、いわゆる「いい子ちゃん」でした。学校に行く時には私の姿が見えなくなるまで家の前で見送ってくれる母に少なくとも二度振り返って手を振り、夜寝る時には「おやすみ。いつもありがとう。大好き！」と母に言ってから寝室に向かったりしていました。その事を友達に言うと、「さほって偉いね！普通、恥ずかしくて言えないよー。」と言われるような子でした。しかし、中学生になった今、私は「いい子ちゃん」ではありません。朝見送ってくれる母に手を振らなかったり、夜寝る時にも「おやすみ。」しか言わなかったりという具合です。私が母親だったら、そんな娘の態度の変化で接し方が冷たくなってしまいます。ですが、私の母は「最近疲れてるの？」などと以前に増して優しく、心配してくれます。そんな母に「最近、なんか寂しいな。」と言われた時、正直なぜ母がそう言ったのか分かりませんでした。その日の夜、習い事のお迎えに来てくれた父にその話をしたところ、『最近彩帆里が家を出る時に手を振ってくれなかったり、寝るときに「いつもありがとう！」って言ってくれなかったりするからお母さん寂しいらしいよ。』と聞かされた私は、内心衝撃を受けましたが、「だってもう中学生だからしょうがないじゃん！」と言い返してしまいました。

自分がこんな風が変わってしまったのは何故だろう？自分が自分でない、そんなことを考えていた時に出会った言葉が「adolescence」という言葉でした。「adolescence」は英語で「思春期」のことです。日本語の「思春期」という言葉をなんとなく受け入れ難い私にとって、語源のラテン語で「成長する」という意味を持つ adolescence は自分を客観的に見ることのできる魔法のような言葉でした。

adolescence には主に前期（十一歳～十四歳）、中期（十四歳～十七歳）、後期（十七歳～十九歳）があるそうです。現在十四歳の私は丁度、前期の終わりから中期に差し掛かる時期にあり、私は少なくともあと五年間は自分に違和感をもつ時期を過ごすという事を意味しています。

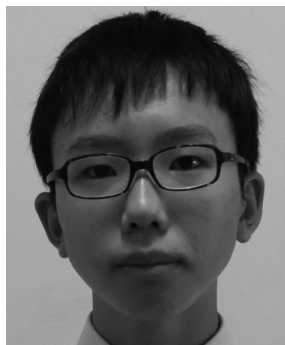
今、私が感じている違和感は、家族への態度が冷たくなる、何か言われると否定されたように感じて言い返したくなる、の二つです。まず、家族への態度が冷たくなるというのは周りの人に家族と仲が良いところを見られるのが恥ずかしいという気持ちがあるからだと思います。次に、何か意見を言われると言い返したくなるのは「忠言耳に逆らう」と言われるように、ついつい素直に人の意見を聞けない所があるのです。皆さんもこれに似た感情を抱き、もどかしい思いをしたことがあるのではないのでしょうか。

私は、これからまだ数年間 adolescence の自分と向き合っていかなければいけません。それは、家族と仲良く接し、素直に感謝の気持ちを伝え、誰かに意見を言われたときには「そうだね。ありがとう。」と言い、相手を認める事でやり過ごせるのかもしれません。しかし、最近の自分の態度とギャップがあるせいでそのように振舞うのは容易なことではなく、家族に冷たくしてしまったり、言い返してしまったりするといった日々から抜け出せないでいます。それでも私は「現実の自分」から「理想の自分」に少しでも近づくことを目指し、「自分で認められる自分」になりたいです。

adolescence は誰もが通る人生の通過点です。しかし、これをただの通過点にしてしまうのは勿体無いと思います。この時期に感じ、悩んだ事を今後の人生の糧とできるよう、adolescence の自分の心と体の変化と向き合いながらこの先の数年間を過ごしたいと思います。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私と同じように、思春期 (adolescence) の自分とどう向きあえばいいのか、悩んでいる人に届けたいです。私自身、家族に冷たくしてしまう、誰かに意見を言われると否定されたように感じて言い返したくなるといった違和感に悩まされていました。しかし、ありのままの自分を認めることでその気持ちも少しずつ楽になるということを見ました。1人でも多くの、自分との向き合い方に疑問を感じている人にこの主張を通して勇気を与えられたら嬉しいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

食物アレルギーが僕たちに教えてくれること

新潟県 燕市立吉田中学校 3年

古澤 奏

突然ですが、みなさんは食物アレルギーを知っていますか？

今では認知が進んでいるこの病気は、いくつかの決まった食べ物を食べることで、蕁麻疹や呼吸困難を起こしてしまうものです。僕も食物アレルギーを持っていて、卵と牛乳を食べることができませんでした。しかし、食物アレルギーの人は日本人の1～2%と少なく、僕はこれまでに、苦労することや理解されないことが多くありました。

実際に僕の祖母も、理解が十分ではなく、「これくらい大丈夫だよ」と言って、僕の食べられない、卵と牛乳の入ったお菓子を食べさせようとしたことがあります。その時は両親が気づき、食べずにすみましたが、人によっては食物アレルギーを知らないこともあるのです。

また、小さい頃両親と、とある飲食店に行った時のことでした。食べ始めてしばらくすると、体中が痒くなり、咳が出始めました。どれも僕が卵や牛乳を食べてしまった時の、アナフィラキシー反応でした。幸い、症状は十数分後に治まりました。原因は、食器にごびりつくようにして洗い残された卵でした。食物アレルギーの中でも特に症状の重い人は、食べられないものに触れただけで、反応を起こしてしまうのです。そして、このアナフィラキシー反応というものは非常に危険で、処置をしなければ、症状は急速に悪化し、最悪死に至る可能性もあります。

また、他の飲食店に行った時には、食物アレルギーへの対応がなく、多くのメニューに卵や牛乳が入っていたため、僕が食べられるものは刺身か米粉パンだけだったことを、今でもよく覚えています。自分の食べたいものが食べられない。それは僕にとってつらいことでした。

しかし、この現実を、多くの人には知りません。大多数の人は、食物アレルギーとは無縁だからです。食べる人も作る人も、ほとんどの人が気にするのは味だけでいいのですから。

「少数派は我慢する。」これは社会的な「道理」なのでしょう。確かに食物アレルギーの人はとても少なく、多くの人には「関係のない話」なのかもしれません。それに、そんな少数のためだけに、いちいち周りが面倒な対応をしてはいられない、と考える人もいるでしょう。だからといって、それは少数派の人々が悪いわけでは決してないのですから、それを理由に少数派の人々を社会から排除したり、我慢させたりしてよいわけがありません。

今、このような少数派の苦しみに声を上げている人々がいます。LGBTQ+の人々、人種差別を受けている人々などです。これらの人々は、長い間偏見によって差別されてきました。しかし、それらの人々が世界中に訴えかけ、理解を求めてきたことで、僕達は正しい情報を知り、偏見をなくして理解すべきだと考えるようになりました。

僕達に必要なのは、まず、少数派の人々の思いを知ろうとすること。それが、理解し、その苦しみに救う第一歩になるのではないのでしょうか。

僕の通う学校でも、多数派の意見に埋もれてしまっている少数派の意見があります。偏見や差別というほどではありませんが、少数派だからとその意見を始めから取り上げないのは、間違っているように思います。そこで僕は学校の生徒会役員として、他の役員とも相談し、匿名で意見を投書できる意見箱を設置しました。実際に、今年の全校レクリエーションでは、意見箱の声を拾い、スポーツ以外の種目や個人戦の種目を入れることになりました。

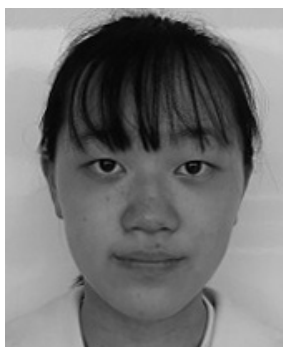
このように、多数派の常識を学校や社会全体の常識にするのではなく、少数派の思いも同じように汲み取っていくことが、今の世の中にとって最も必要で大切なことだと僕は考えています。

そのためにも、僕は将来、医療の道に進みたいと思っています。中でも、発症者が少ないためまだあまり認知されていない病気に目を向け、その研究や治療薬の開発をしたいと思っています。もちろん、多くの人を救える薬の開発も大事です。しかし、少数であっても大きな悩みを抱えている人を救える薬の開発も、同じように大事だと思います。食物アレルギーも含め、世界にはまだ治療薬の開発されていない病気がたくさんあります。だからこそ、自分の開発した薬で、多数派も少数派も関係なく、苦しんでいる人を救うことが僕の夢です。

経験を力に、そして夢に。これが僕の希望です。

この主張をどんな人に届けたいですか？

理解されていないと常に感じているのは、とてもつらいことです。だからこそ、そういったつらい思いをしている人に、同じ悩みや思いを抱えている人が他にもいるということを伝えたい、と思ってこの主張を書きました。また、この主張を通して、たくさんの人から身近な所にも口を出せない意見や悩みを抱えている人がいることを知って、それを少しでも理解しようとしてもらえると、とてもうれしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「きょうだい児」の私にしかできないことを

山梨県 富士吉田市立吉田中学校 3年

渡邊 峰花

「うー。」そう言って甘えてくる私のかわいい妹。私と同じ瞬間に生まれた、かけがえのない妹。しかし、私はその妹が悩みの種だった。

ある日、「部屋を片づけなさい！何回言ったらわかるの！」と、母に怒られた。しぶしぶ部屋を片づけていると、隣の妹の部屋も散らかっていることに気づいた。「ママ、妹の部屋も散らかってるよ。片づけさせてよ。」母にそう告げた。すると母は、「お部屋片づけて。」と妹に優しく言った。「はーい。」妹は明るい声でそう答えた。その時、私の頭の中に衝撃が走った。私と妹は同い年。同じ日、同じ瞬間に生まれた。それなのに、どうしてこんなに母の接し方に差があるのだろうか。思い返すと、みんなそうだ。妹に対しては、みんな無意識のうちに優しく接している。

私の妹は「自閉スペクトラム症」という発達障がいを抱えている。私と妹の違いは「障がいを持っているか」。ただ一つの、けれどとても大きな違いだ。障がい者と共生するために手を取らなければならないことは理解している。しかし、妹ばかり優遇されることへの妬ましさはどうしても湧き上がってくる。二つの感情が衝突しあい、心が押し潰されそうになった。もし、妹が健常者なら。せめて、年が違えば。こんな感情は抱かなかったはずなのに。そう思うと、自然と涙が溢れた。妹と話すことにも、抵抗感を覚えるようになった。

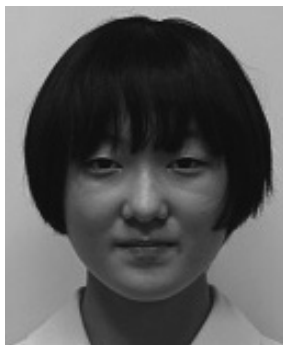
いつものように妹と一緒に学校から帰っていたときのこと。「今日、高校調べたの。」妹が話しかけてきた。今日は、初めての進路学習の日だった。「で、どうだった？」私が不愛想に返すと、妹は目を輝かせながら言葉を続けた。「あの、私障がいあるから、支援学校調べたんだけど、そしたらね——。」妹は、自らの障がいと向き合い、理解した上で進路を考えていた。ああ、そうだ。妹は、周囲の助力をたくさん受けながら、少しずつ、少しずつ成長している。妹が妹らしく生きるためには、周囲の障がいに対する理解と、支える優しさが必要だ。それなら、その側にいる私はどうだろう。私にできることは、妹を一番近い立場で助けることだ。妹の笑っている顔が、幸せそうな顔が、私は大好きだ。もちろん、「双子だから」苦汁を飲むこともある。しかし、「双子だから」わかること、できることもある。私は、妹の笑顔のために私にしかできないことをしよう、そう思った。

私のように、兄弟姉妹に障がい者を持つ人達を、「きょうだい児」という。そのような人達は、周囲の人々の関心が、障がいを持つきょうだいばかりに移り、辛い思いをすることもある。障がい者の影にいる、「きょうだい児」という存在を、私は知ってほしい。障がい者だけではなく、きょうだい児とも手を取り合うこと。それが、本当の意味での平等な社会を構築する上で必要なのではないか。そして、きょうだい児の私達にも、一番近くにいる存在だからこそ、わかること、いち早く気づけることがあるはずだ。

様々な立場の人が互いに手を取り合い、その立場だからこそできる最善の行動を取る。それが、平等で、誰しもが幸せな社会を創る鍵になる。実行していこう。それぞれが、自分にしかできないことを。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

双子の妹と私という関係性の中で生じた。きょうだい児ならではの葛藤やきょうだい児にしかできないことなど、きょうだい児であることへの様々な面を、より多くの人に知ってほしいと思ったからです。また、私と同じきょうだい児の人々に、きょうだいに、きょうだい児のそばにいる人々に、『手を取り合う』ということの大切さを発信したいと思ったからです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

過疎化から地域を救う取材

静岡県 沼津市立長井崎小中一貫学校 9年

大城 柚稀

私は、『うらっち』の活動を始めてから文章を書くことがとても好きになりました。『うらっち』とは、内浦、西浦地区の子どもたちが、プロのクリエイターからそれぞれの専門的な講義を受け、自分の住む地域や町を取材して作る、地元情報誌のことです。私はこのプロジェクトに4年間参加し続けており、その根底には、地元愛を超えるほどの熱い思いがあります。その思いをお話すると共に、まずは取材を通して得た内浦、西浦地区の実態と問題を紹介していきます。

過疎問題。あなたは知っていますか。人口の急激な減少により、地域住民の生活水準や生産機能が一定のレベルを維持できない状態が進行していることを「過疎化」といいます。日本では、国土の約6割がそれに該当します。人口流出が著しい内浦、西浦地区も例外ではなく、この地域では就ける仕事がないからと都市部へ出て行ってしまおう人が多いです。私が取材で訪れた地元の飲食店や観光施設で働いている人たちはとても温かく、人のつながりを大切にする精神が地域の根幹を支えていることが分かりました。都市部とはまた違ったその魅力に気づかず、この地域を離れてしまった人もいたのではないのでしょうか。私はとても残念に思います。

少子化も過疎問題と深く関わっています。今年度、長井崎小中一貫学校に入学した1年生の数は7名。現在、全校で約120名いる児童生徒は、令和10年度には約60名に半減するとされています。このままでは近い将来地元から人や子どもが消えてしまいます。この状況をどうにかしたい。この地域を守るために、私ができることは何だろうか。私はずっと考えていました。そして、それは地域について詳しくなり、より多くの人に地元の魅力を発信していくことこそが私にできることではないかと思いました。

『うらっち』では、地元で有名なお店や、地元のお祭りの特集、地元の特産品であるみかんの収穫について書くなど、徹底的に地元に着目することを意識して記事を書きました。完成品を友人に読んでもらったとき、

「地元にはこんないいお店があるんだね。知らなかった！」

と言ってもらえました。長く住んでいても、まだ知らない魅力がたくさんあることを取材と友人の言葉を通して確信しました。また、取材を通してハローワークやワークショップの開催に着目し、内浦、西浦地区で開催すれば、子どもがお店や施設を訪れる職業体験につながり、地域にはどんなお店や仕事があるのかを知ってもらう機会になると思いました。私の父のような漁師や、農家の方から仕事についてお話をさせていただいて、見学した子どもたちが知識を広めることで、両者のインプットとアウトプットが成立するのも利点です。実際に働いている人も仕事の魅力や改善点を再認識できると思います。天城地区の「にじの子タウン」というイベントでは、旧校舎を活用し、さまざまな仕事を子どもたちが体験でき、これも地元活性化のヒントになると考えました。これらの活動を実践し、成功すれば地域の印象がより良くなるはずですよ。

『うらっち』の文章を考えているときに編集部の方にこう尋ねられました。

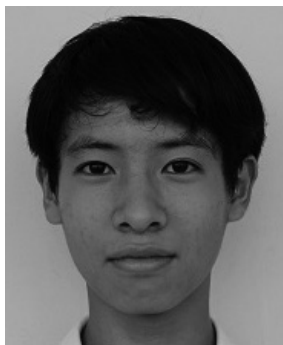
「この活動のやりがいは何？」

私はそのとき、『うらっち』を通して、いつか多くの人が内浦、西浦地区で就職をして住み続けるきっかけを作ることだと思いました。人口が増え、幅広い世代の人たちがこの地域で豊かな暮らしを送る。そうなれば、今よりもっとやりがいを実感できると思います。

これからも編集リーダーとして、地元に住んでいる一人として、地域を知り発信することで、地域の問題を改善する第一歩としていきたいと思っています。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

内浦、西浦地区以外でも取り組みが始まっている「子どもローカルマガジンプロジェクト」の存在、そして、私たちの住む内浦、西浦地区の存在を多くの人に知ってもらいたいと思い、作品を書きました。地域の新しい発見の数々と魅力を秘密にしたままではもったいない！私たちの大切な故郷の活気を途絶えさせてはいけません。作品を通して、日本中にみんなが守りたい故郷がたくさんあることを、考える機会にしたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「考えない葦」は、ただの葦

石川県 金沢市立長田中学校 3年

松末 明生

「松末、今度お前の読書感想文を金沢市のコンクールに推薦するから。」

中学一年生の夏、自分では全く予期していなかった言葉を担任の先生にかけてもらってから、僕は初めて「文章を書く」ということを意識するようになりました。そして、結果的にその読書感想文がコンクールで入選して以降、その嬉しさもあり、自分の中で文章を書くことに、俄然興味と情熱が湧いてきたのです。それからというもの、誰かに依頼されたわけでもない文章を時々僕は書いています。

書くきっかけやテーマは様々です。その時に読んでいる小説や漫画、テレビで観た映画やアニメなど、自分がその時に触れた作品について自分なりに考えて書く行為は、真剣に向き合えば向き合うほど難しく、いつも難航してしまいます。ですが、それを乗り越え、短くとも一つの文章を書き上げることができたときは、何とも言えない達成感を味わうことができ、それが次への意欲へとつながっています。そして、何度も文章を書いていくうちに、僕は文章を書くことが自分自身の思考力を高めてくれていると実感しました。

僕たちは、特に意識していなくても普段からいろいろなことを考えています。しかし、それは漠然としていてあまり具体的ではありません。それをより具体化するために有効な手段が、「文章を書く」ことだと思います。なぜなら、自分で書くという行為は、書こうとする内容について自分自身の引き出しをすべて開放し、深く考え、整理できなければ成立しないからです。その結果、目に見える文章という形に変えることで、客観的に自分の考えを理解することができます。こうしたプロセスの繰り返しは、思考力を高めることにつながるのではないのでしょうか。

ところで、最近、テレビのニュースで気になったことがありました。大学生の卒業論文の制作について、AIの使用を禁止する大学が出てきているというものです。僕は実際にAIについて触れたことがなく、仕組みについても詳しいわけではありませんが、最近のAIの進歩は目覚ましく、簡単な単語をいくつか入力するだけで論文を製作してくれるそうです。つまり、AIを利用する側の人間は、書くことについて何も考える必要がないのです。

人工知能と呼ばれるAIは、人間と同等、もしくはそれ以上の精度でさまざまな作業の実行が可能です。そのため、あらゆる分野で有用な技術であり、生活や産業の仕組みを根本から変える可能性を秘めています。ですから、AIにより僕たちの生活が一層便利になっていくことは、疑いようがありません。しかし、その便利さを追求するあまり、AIへの依存度が強まってしまう危険性もあります。その結果、僕たちは自分自身で考える機会を失ってしまうのではないのでしょうか。

この状況は、作家「星新一さん」が描いた『声の網』という作品と似ています。この『声の網』では、コンピューターが搭載された電話に、気づかない間に人間の思考や行動が支配されてしまう世界が描かれています。この作品が描かれた1970年代当時はSF作品として描かれていましたが、2023年現在、この作品は現実味を帯びています。もしかすると、今後本当に『声の網』のような、人間の思考機能がAIに代替され、人間が思考や行動を放棄する未来が到来するのかもしれない。

しかし、待ってください。文章を書くことは自分と向き合い、思いを巡らせ、自分の思考の幅を広げてくれます。こんなにも面白いことをAIに任せてしまうことは、勿体なくはないのでしょうか。僕たちが普段楽しんでいる映画や聴いている音楽、好きな小説や絵画など、生活を豊かにしてくれるものは、遠い過去から多くの人々が無限に想像し、挑戦し、考え抜いてきたからこそ産まれてきたものです。何も無いところから何かを産み出す力こそ、他の生き物にはない人間だけの力であり象徴であると僕は信じています。AIを使うことでその力が弱まってしまうことはとても残念ですし、AIによって便利な未来になることが、必ずしも幸せを運んでくれるとは限らないと僕は思うのです。だからこそ、これからも僕は筆を執ることをやめず、あらゆることに知的好奇心を持ち、一人の「考える葦」として自分の頭で考え続けていきたいと思っています。

さて、みなさんはどうですか。「考える葦」か「ただの葦」か。どちらになることを選択しますか。

この主張をどんな人に届けたいですか？

今回の作文の制作には正直苦戦しました。書いては消し、書いては消しを繰り返して、結果的には完成に1か月もかかりました。（正直AIに頼りたかったです。）しかし、その作業自体はとても刺激的で、改めて自分の頭で考える大切さを知りました。僕が書いた作文が同年代の人たちに届き、僕と同じような「考える葦」が増えてくれたら嬉しいです。そして、これからの未来は僕たちが創っていきますが、同じ「葦舟」に乗る人が増えれば増えるほど、きっと面白い未来になるのではないかと期待しています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私の後悔、そして願い

福井県 坂井市立三国中学校 3年

向野 一愛

みなさんは、なくし物をしたとき、どうしてほしいですか。放っておいてほしいですか。それとも一緒に探してほしいですか。私は間違いなく後者です。そんなこと、考えなくても即答できることなのに、あの日の私は、その答えにふたをし、知らない顔をしたのです。

今年の冬の終わり、私は友達八人とレジャー施設へ遊びに行きました。そこはお金を払ったレシートを見せれば、出入り自由な場所でした。午前中は息が切れるほど走ったり、大声で笑い合ったり、とても楽しい時を過ごしました。お昼になり、ご飯を食べるため外へ出ようと、レシートを見せ次々とゲートをくぐりました。すると一人の友達が、「ごめん、レシート無くしてもた。先行ってて、私トイレやら色々探してみるで。」

そう言って今通ってきた道を戻って行きました。私たちがご飯を食べていると、ラインがきました。

「ごめん。探したけどなくて、私お腹すいてないから、ここで待ってるね。」

私たちは食べ終わり、戻ってまた夕方まで遊び解散しました。帰りの車の中、黙っている私に、母は言いました。

「どした。楽しくなかった。何かあったの。」

「何でもないよ。楽しかったよ。」

私は何度もそう言おうと笑顔だけは作っているのに声にならず、気付くと私の手の甲にはボタボタと大粒の水滴が流れ落ちていました。

「なぜあの時、一緒に探そうと一歩踏み出せなかったんだろう。みんながわいわい楽しんでいる場所で、彼女は一人ぼっちで、どんなに不安で悲しくて、淋しかっただろう。」

私の心は、彼女に背を向けたあの瞬間から、ずっとずっとチクチクと痛みを発していたのに、私はその痛みをふたをして、気付かないふりをしたのです。

「自分がしてもらってうれしいことを、お友達にもしてあげてね。」

母は、私が小さい頃から今も、そしてあの日も、呪文のように毎朝そう言って、私を送り出してくれました。今まで私は、その言葉をうるさいなあぐらいにしか聞いていませんでした。でもあの日、全てを私から聞いた母は、私の手を握り、一緒に肩を震わせ泣いてくれました。その時なぜだか、ズキズキ痛くて仕方なかった私の心の中が、ほんの少しですが、ふわっと温かくなった気がしました。母がずっとと言っていたのは、こういうことだったのかもしれないと、感じる事が出来ました。

「自分がしてもらいたいと思うことをするね。」

今までは母から私への一方通行だった言葉が、あの日以来、私と母の合言葉になりました。

今、私には大好きな曲があります。

「人が痛みを感じたときには、自分のことのように思えるように…」

という歌詞が、毎日口ずさむくらい大好きです。強くて、優しさがあふれている歌詞です。そして、母が私に教えてくれたことです。

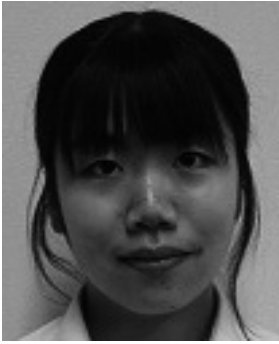
あの経験を経て、最初は彼女への後悔ばかりだったけれど、少し時間が経った今私は、私と母の合言葉を、私の大好きな友達や先生方、町の人、そして世界中の人々に知ってもらいたいと思うようになりました。世界中の人々が、自分がされてうれしいことだけを、相手に言ったりしたりするようになれば、心ない誹謗中傷やいじめ、差別、ひいては戦争も「なくなる」ではなく「できない」になると、私は確信します。あの日、

「私なら一緒に探してほしい。一緒に探そう。」

私の心はそう叫んでいたのに、彼女の笑顔が不安で一杯だったと気付いていたのに、私は逃げてしまいました。その後悔を一生忘れず、私は強く生きます。今度は絶対に、大好きな人を守りたいから。そしてもう一つ、私と母の合言葉が、今日出会ったみなさんから、みなさんの大切な人へと伝わり、世界中の合言葉になってくれることを、私は願います。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

口を大きく開き、目はたれ目になってガハハと笑う彼女の笑顔が私は大好きです。だからこそ、あの日の今にも涙がこぼれそうな彼女の笑った顔は、私の頭から今も離れません。「自分がしてもらいたいと思うことをする」あの日心に決めたこと、私は今、守っています。そのせいなのか、今までよりたくさんの笑顔に出会っている気がします。これから先も、母との合言葉を力に、大好きな人達の笑顔を守り、笑い合っ生きていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

祖父はつまらない人？

三重県 いなべ市立藤原中学校 2年

高田 鈴奈

私には、今年七十七歳になる祖父がいます。

私の家から歩いて三分ぐらいのところに祖母と二人で暮らしています。両親は仕事で帰りが遅い日が多いため、私と妹は祖父の家で毎日夕食を食べさせてもらっています。祖父は元高校教師で、今は、畑仕事をしないときは本を読んで過ごしていることが多いです。そんな祖父ですが、数年前から耳の聞こえが悪くなっていきました。今は補聴器をつけていますが、それでも周りが騒がしかったり、早口で話されたりすると聞き取れず、会話に入れないことがあるそうです。

ある日の夕食のときです。私、妹、祖母の三人での会話が盛り上がり、つい早口で話してしまいました。すると、「なあ、今、何の話しとんのや。」

と祖父に聞かれました。私は話を遮ぎられたような気がして、つい「じいじには関係ない。」

と冷たく言ってしまいました。そんなことが今までに何度もありました。その度に、自宅に帰ってから少し言い過ぎたなど反省するのですが、別の日にまた同じように冷たく言うてしまうのです。

こんなことを繰り返したくないと思い、祖父の話を聞いてみることにしました。すると、祖父の口から出てくる話は昔話ばかり…。ちっともおもしろくありません。私が話し役でも、聞き役でも、祖父と心穏やかに会話を楽しむことはできないのだと感じて、私はだんだんと祖父と距離を取るようになっていきました。

そんなある日、私は母に連れられ、日本国憲法について学ぶ講演会に祖父もいっしょに行きました。三人で二時間ぐらい資料映像を観たり、講演を聞いたりしました。帰りの車の中では祖父と母が、これからの憲法の在り方や、どうしたら平和な世界が創れるのかということ話し合っていました。そのときの祖父はとてまじょう舌でした。私はとても驚きました。つまらない昔話しかなくて、会話をしようとしてもうまくいかない人＝祖父であった私の考えが、現代や未来の話もして楽しそうに話せる人＝祖父と、その印象が、がらっと変わりました。

さらに、憲法を使ってLGBTQの人達がもっと生きやすい社会が創れるのではないかと、などと新しい考えを持っていました。今までいかに私が祖父のことを理解していなかったのか、いえ、理解しようとしていなかったのかを思い知りました。年をとっているし、耳も遠い。それだけの理由で、私が勝手に祖父を「つまらない人」と決めつけていたと痛感しました。

例えば私がゆっくりと話したり、昔話にならないような話題を振ったりすれば、祖父も私も楽しく会話ができはずなのです。そのことに気付いてからは、祖父にたくさん話しかけるようにしました。しばらく経った頃、祖父が「最近すーちゃん、優しかったなあ。」

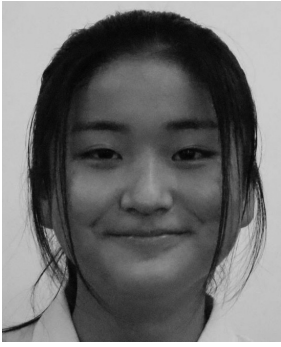
と祖母に話している声が聞こえてきました。今まで距離を取ろうとしていたことも、会話の中で私がいらいらしていたことも全部、祖父は分かっていたのだとそのとき気付きました。私は、祖父への申し訳ない気持ちで胸がいっぱいになり、祖父ともっともっと、いろいろなことを話していこう、祖父と毎日を楽しく過ごしていこうと心に決めました。

このような自分自身の経験から、私は高齢者と若者がお互いを理解し合える社会について考えるようになりました。SNSの中では、「ジジイ」「ババア」「老害」などという、高齢者に対する心ない言葉が飛びかっています。一方で、「今の若者は…」「俺が若かった頃は…」と言う高齢者の方もいます。それではお互いを理解し合うことなどできません。かっつの私と祖父のように距離が離れていくだけです。そうではなく、自分から歩み寄って話しかけ、自分にはない考えを知ろうとすることが大切だと思うのです。

私は祖父と話すようになって、自分の考えに深みが増したように感じています。祖父という人と過ごせる時間は永遠ではありません。その時間の中で、たくさん楽しい話をし、祖父の考えを、祖父という人を知るために、私は今晚も祖父に話しかけます。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を「高齢者・若者の考えていることはよくわからない」と感じている人に届けたいです。私も以前はそう感じていたのですが、祖父と話すようになってからその考えが変わりました。年が離れていても楽しく会話をすることができます。自分から話しかけていけば、より理解し合うことができます。これからどんどん高齢者が増え、若者は減っていきます。だからこそ、私の想いがたくさんの人に届いてほしいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

家族との時間

岐阜県 養老町立高田中学校 3年

服部 心

「えっ？」

頭が真っ白になった…。

何気ないいつもの毎日。幸せな明日に向かって時間が進んでいたあの瞬間に、それは突然起こった。祖父の「おい、大丈夫か！どうしたんや！」という声が家中に響き渡った。

と同時に、「ちょっと、心！」と私の名を呼ぶ声が出た。私は大声で返事をして、声のする方へ歩いていった。嫌な予感がした…。胸がぎゅっと締め付けられていくのが分かる。たどり着いた瞬間、想像以上の光景が私の目に飛び込んできた…。

祖母が嘔吐し汗を流しながらたおれている。鼓動は速くなっていくのに、私の中の時間が止まる…。体はすくむ…。「どうしてこんなことに？」「急に何で？」たくさんの思いが交錯し、恐怖につぶされそうになりながら、私は祖母が救急車で運ばれていくのをただただ見ていた…。

後日、祖母は「くも膜下出血」と診断された。死亡する確率は50%、手術成功率は44%の難病だ。にも関わらず祖母は助かった。嬉しさと安堵感で私の心はいっぱいだった。そして、コロナ禍で病院へのお見舞いが厳しく制限される中、「早く会いたい。」という思いが何よりも強くなった。

そうしているうちに祖母は退院した。久しぶりに見るその姿。後遺症が残り車いすののって帰ってきた祖母の姿に言葉が失った。変わり果てていた。体はやせ細り、血色が悪くなってしまった祖母になんて声をかけたら良いのか。「ばあば、おかえり…。」これがあの時唯一かけることのできた祖母への言葉だった。くも膜下出血は、後遺症が残れば重度の失語症や運動麻痺を起こす病気。祖母はこの困難とこれから闘っていくことになる。体の中心から右半身が動かず、不自由な生活を送る毎日。自分の感情が思うように伝わらず、苦しそうな表情を浮かべる祖母に後悔する気持ちがわき上がった。「ああ、あの時もっと何かできていたら…。」「何か手伝っていれば、後遺症は残らずにすんだのではないか。」と…。

祖母は病気になってから泣くことが増えた。あんなに笑顔で、たくさん叱ってくれて、おもしろい祖母の姿はもうどこにもなかった。

しばらくして、私は母の勧めで、介護についての講習会に参加した。そこで私は、「介護をする人は、される人の心に寄り添う事が大切」だと学んだ。はっとした。私は昔の祖母の姿ばかりにとらわれ、今の祖母らしさやありのままの祖母の姿を受け入れることができていなかったのだ。それから私は、祖母との時間を今まで以上に増やし、折り紙を折ったり、左手と一緒にご飯を食べたりと、祖母と一緒にできることをしている。起きてしまった過去を変えることはできないが、未来を変えることならできる。限られた時間、ほんの一瞬の行動が未来の自分や家族にどう繋がり残っていくのか深く考えて欲しい。

あれからもう一年が経つ。今祖母はリハビリにマッサージと、新しい自分と向き合い、後遺症を乗り越えようとしている。笑顔も増えた。今振り返ると、あの出来事があったとは決して思えない。でも、あの出来事があったからこそ、家族と過ごす時間や関わりがかけがえのないものだと気付くことができた。家族という存在。人生なんて何が起こるのか分からない。後悔をしたくない。だからこそみなさんに今一番伝えたいことがある。まずは、あなたのすぐそばにいる家族に目を向けて見て欲しい。今まで気付けなかった、家族の温かさに触れることができるはずだ。家族の大切さは日常では気付きにくいのかも知れない。だからこそ、目を向けよう。今は良さを見つけられなくても、いつか必ずあなたにも見えるようになる。

「ばあば、今日は鶴折ろうな！」

「いいで！紙持ってきい！」

この主張をどんな人に届けたいですか？

まずはこの主張で述べた思いを、祖母に届けたいと思います。この作文内容を決めるに当たって、真っ先に頭に浮かんだのは私の祖母の姿でした。家族がいつも側にいてくれるありがたさについて考えたことなかった私に、初めて気付くきっかけを与えてくれた存在だからです。「家族がいることを当たり前と思ってはいけません。」今回私は、それを身をもって経験しました。だからこそ、今回私の主張を聞いて下さる全ての方々にも、いかに家族との時間がかけがえのない大切なものなのか。そして、共に寄り添い、生きることの喜びを今一度心で感じ、考えてもらいたい。家族と最近話をしていないあなたや「ありがとう」や「ただいま」を大切な人に言えていないあなたにもぜひ聞いて欲しいと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

小さな幸せは大きな幸せ

滋賀県 立命館守山中学校 2年

山中 萌衣

「やっとの思いで手に入れた水は、命と未来を奪う水」ある日、私はユニセフのホームページで、この言葉を目にしました。「水が命と未来を奪う？ どういうことだろう。」と、とても不思議に感じました。なぜなら、水は生きる上で必要なものであり、命や未来を奪うものという言葉に納得がいかなかったからです。そこでもう少し調べていくと、私の想像を絶するような1本のCMを見つけました。それは、13歳の女の子「アイシャちゃん」の1日のルーティーンを紹介するものでした。彼女の1日は私の1日とは全く違いました。私は朝起きて、学校へ行き、家に帰り、お風呂に入り、夜ご飯を食べ、勉強をして、歯磨きをして、寝るという毎日を送っています。一方、彼女の1日は水汲みで始まり、水汲みで終わるというものでした。水汲みに費やす時間は、なんと1日の中の8時間。しかも、水汲み場にやっとな着いた時に映し出された水は、黄土色の「泥水」でした。私はギョッとしてしまいましたが、アイシャちゃんはとても爽やかで、気持ちよさそうな笑顔だったのです。8時間も費やした水汲みで彼女が手に入れた水は、家族一人につき5リットルにも満たない量でした。

透明で綺麗なおいしい水を、飲みたい時に飲みたいだけ飲んでいる自分。日本では蛇口を捻れば、きれいな水が手に入る。これがどれだけ恵まれているのかを実感しました。その時、私が初めて見た言葉の意味が分かりました。アイシャちゃんのような子供たちがやっとな手に入れた水は泥水で、その中には生き物の糞も細菌も泥も含まれています。それを飲んでしまい、感染症になるのです。しかし、飲まないわけにはいきません。そのため、命を落とし、未来を失う子供たちが世界にはたくさんいるのです。

私は小学校の5年間をタイで過ごしました。タイは笑顔で優しい方の多い素敵な国です。しかし、とても貧富の差が激しい国でした。駅の近くにはボロボロになったシートを敷いて生活をしているお母さんと子供がいます。観光地へ行くと子供が私に向けておみやげを売ってきます。しかも、その子は裸足です。反対に、とてもお金持ちで、家にプールがついている、大きい家に住む人もいます。

私はインターネットや自分の経験から、世界には数々の「差」があると気づきました。アイシャちゃんの話からは、先進国と発展途上国での水の供給の「差」。タイでは貧富の「差」。他にも世界には食料の「差」、医療の「差」、所得の「差」などが存在します。

今、私には将来の夢があります。それは、「国境なき医師団」に入ることです。国境なき医師団は医療の行き届いていない地域に行き、診察をする医師のことです。元々お医者さんは私の小さい頃からの憧れの存在でした。私は人の笑顔を見たり、人の役に立つことが大好きです。父の仕事の関係で海外の方と関わる機会が増えていくにつれ、国と国の壁を感じなくなり、日本だけで終わらず、海外の方とたくさん交流したいと感じ、今の夢にたどり着きました。世界中で苦しんでいる私と同じくらいの子の命を自分の力で救い、笑顔にしたい、未来を与えたい、そして、何より医療の「差」を無くしたいと思います。

「やっとの思いで手に入れた水は、命と未来を奪う水」。この言葉はずっと水を口にすると私の心に響きます。今「自分が幸せだからいい」で終わってはいけません。どこに住んでいても、国籍がたとえ違って、この世界に住んでいる人はみんな同じ人間です。今存在している「差」を私たちが動いて縮めていくことが、現在求められていることなのです。だからみなさん、いきなり大きなことはできなくても、まずは身近な幸せに感謝し、大切にすることから始めてみませんか？

この作品を書いたきっかけはなんですか？

最近、世界の問題の1つとして取り上げられている「格差」。海外に住んでいた頃に、この問題を身近に感じるがありました。同じ人間なのに住んでいる国が違っただけで、受けられる「医療支援」「教育」「物資」に差があることに私は疑問を抱いています。私の将来の夢が「格差」が縮まる社会に繋がればいいなと思い、この夢にたどり着きました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

『叶わない夢にも意味がある』

大阪府 大阪市立西淀中学校 3年

宮原 咲心

私は小学1年生の頃、選手として通っていたクラブチームでとてもつらいことがあってうつという病気になりました。怒られると声が出なくなって、体が固まって動けなくなって、怒られている途中で意識が飛んで、寝てしまったりすることもありました。

私は小さかったのであまり覚えていませんが、ある日小学校の先生から母に「今日音楽の歌のテストでみんなの前に立った時、声が出なくて、固まって歌えなくなりました。歌が好きだったのにどうしたのかと思って」と心配の電話がかかってきました。私は歌うことが大好きだったので、歌もうたえなくなっていく姿に父と母は悲しんで、チームの先生に抗議して私を守って辞めさせてくれました。私は人を信用できなくなり、コミュニケーションを取るのが怖くなって、人と関わるのが苦手になってしまいました。

そんな私に母が誕生日プレゼントでミュージカルを観に連れて行ってくれました。私と同じくらいの小さな子が舞台上で歌って踊っている姿や、主役の前向きな姿に感動して、私もこの舞台に立ってみたいと思いました。オーディションを受けたこともなかったけど、夢ができたことが嬉しくてワクワクしてたくさん練習しました。

小学2年生の時は、歌やダンスの審査を合格して最終日まで進むことができましたが、ワークショップ審査という自分を表現する審査で落ちてしまいました。想像して自分を表現することが何をしたらいいのかわからなくなり、怒られている時みたいに体が固まってしまいました。

1年間また努力して3年生の時もチャレンジしました。結果はまた同じ、最終日のワークショップ審査で落ちてしまいました。怖くなって動けなくなった自分がすごく嫌になりました。けど、どうしても諦めたくなくて、その後にダンサー役のオーディションも挑戦しました。絶対に出たい！自分を変えたい！と思いながら自分に出来ることを全力でやりました。苦手な自己表現も頑張って合格することができました。あの日、うつを救ってくれたミュージカルの舞台に立つことができました。つらかった心の傷は消えないけどだんだん自分が変わって、少しずつ自分に自信が持てるようになりました。

私はどうしても主役になりたいという次の夢ができました。小学6年生の時、主役を受けられる最後の挑戦で最終審査まで進みましたが、夢を叶えることはできませんでした。落ち込んでたくさん泣いて、どんなに努力しても叶わない夢があるということを知りました。でも、チャレンジし続けた6年間で私はとても強くなりました。毎日習い事で、今まで友達と遊んだことはほとんどありませんが、今は歌劇団に入って夢のために勉強と芸能活動を両立して、毎日努力を続けています。

私の将来の夢は歌もダンスもアクロバットもアクションも何でもできて、ハリウッド映画やブロードウェイミュージカルに出られるような、世界でも活躍できる唯一無二の女優さんになることです。私がこの夢を言うと、笑われたり、それぞれのジャンルにすごい人がいるからなんでもなんて無理だよとか否定的な意見を言われることが多いです。でも夢は口に出さないと叶わないし、どれだけ願っても叶わない夢もあるけど、夢に向かって努力していたら自分が今よりもっと強くなれることを私は知っています。そしてエンタメの力は心の病気を持っている人を救うということも知っています。

世界では今この瞬間も戦争や人種差別、貧困、災害など様々な理由によって苦しんでいる人がたくさんいて格差があります。でも私は、感じる心は誰でも平等に持っていて、エンタメは世界共通だと思います。私がミュージカルに救われたみたいに、私はたとえ言葉が通じなかったとしても、世界中のたくさんの人の心に夢や希望を与えられる人になりたいです。誰かを笑顔にする方法は世の中にたくさんあるけど、私は自分自身が救われた方法で世界中の人を笑顔にして1人でも多くの人の心を救う手助けをしたいです。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は小さい頃からずっと心の傷を忘れることができません。でもミュージカルに出会い夢ができて人生が前向きに進み始めました。「夢に向かって努力していたら少しずつ自分が強くなる。」エンタメの力は心の病気を持っている人を救う。私は自分が経験したことだからこそ1人でも多くの人の心に伝えたいし、世界中の人に夢や希望を与えられる人になりたいです。私は自分自身が救われた方法でたくさんの人を笑顔にして、1人でも多くの人の心を救う手助けをしたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

自分らしく生きる

兵庫県 太子町立太子東中学校 1年

金家 渚

私は、小学生の時から支援学級と交流学級の、二つのクラスで勉強しています。中学生になっても、それは変わっていませんが、支援学級で勉強する教科が増えました。私は英語が苦手なので、交流学級の授業は理解できず、とても困りました。なので、中学校ではみんなと同じ授業が受けられなくても、自分のペースでゆっくりでもいいから、理解できるようにになりたいと思い、支援級で勉強することを決めました。あせらずに、自分が出来ることをしっかりとやっていこうと思っています。

私は、自分のことを不幸だと思ったことはありません。確かに、同年代の子たちと比べると、出来ないことはたくさんあります。みんなが、簡単に出来ることも私はたくさん努力をしないと出来ません。誰かに、助けてもらわないと、学校生活で困ることがたくさんあります。でも、人はみんなそれぞれ違います。顔や声が違うように、出来ること、出来ないこと、得意なこと、苦手なこと、明るい子、おとなしい子、話をするのが好きな子、話を聞くのが好きな子、みんなそれぞれ違います。でも、違っているからこそ一人一人がかけがえのない存在であり、輝けるのだと思います。そして、大切なことは一人一人の個性を認め合うことだと思います。みんなが、同じ色で描いた絵はつまらないけれど、それぞれが好きな色で、おもいきり自由に描いた絵は、とても鮮やかで美しいと思います。今の私は、みんなと同じじゃなくていい、私は私でいいんだ、と自信をもって言えます。そう言えるまでには、たくさんの時間がかかりました。人と違うことを、笑ったりばかにしたりする人もいました。私もたくさん笑われました。冷たい視線を向けられたり、いじわるなことを言われたこともありました。

でも、それだけではありません。たくさんの優しい人たちにも出会いました。一緒に遊んでくれる友達、困っている時に助けてくれる友達、分からないことを教えてくれる友達。

友達だけではありません。学校の先生、りょう育の先生、家族、私の周りにはたくさんの優しい心があふれています。そんな人たちと出会えたことが、とてもうれしいです。自分が他の人より出来ないことが多いからこそ、その優しさに気付くことが出来たのだと思います。私が障害をもって産まれてこなければ、気付けずにいたかもしれません。たくさんの優しい心が、ありのままでもいいと、気付かせてくれました。

この世界には、障害をもった人がたくさんいます。みんな、自分の障害と向き合って、一生けん命生きています。私は、障害のある人もない人も、同じ場所で共に支え合って、生きていける社会になってほしいと思います。

そのためには、一人一人の個性を認め、尊重することがとても大切だと思います。いつの日か、この世界が鮮やかな色で輝き、誰もが自分らしく生きられる世界になってほしいと、心から願っています。

この主張をどんな人に届けたいですか？

これまで私を支えてくれた全ての人たち、障害があっても毎日一生けん命生きている全ての人たちに届けたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

スズメの役割

奈良県 香芝市立香芝西中学校 3年

太田 圭亮

あなたの周りで、鳥の鳴き声が聞こえることはありますか。おそらく、毎朝数種類の鳴き声があなたの耳に届いていることでしょう。その中でも特に耳になじんでいるのがこのスズメの声だと思います。ウグイスの声のような存在感はありませんが、スズメは日本では一年中いるため、身近な鳥の代表として思い浮かべやすいのかもしれませんが。

しかし現在、そんなスズメたちも減少していると最近の新聞記事に載っていました。要因の一つとして大きいのが、巣を作る場所が減っていることらしいです。もちろん、数が減っているのはスズメだけではなく。他にも多くの種類の野鳥が減少しています。

僕は日本の野鳥が好きです。単に可愛いことや鳴き声を聞いていても飽きないこと、そして色の地味な種類が多い日本の野鳥が懸命に生きている姿を見て、自分も勇気がもらえることなどが理由として挙げられます。僕はそんな癒しの対象である野鳥が減少しているという事実を残念に思っています。しかも、野鳥が減少する原因の多くは人間の行動が関わっています。実際に、人間による狩猟や開発により、多くの野鳥が姿を消したり、絶滅の寸前へ至ったりしてきました。最も身近な鳥として数えられるスズメでさえ、数を減らしているのですから、日本の生態系は安定しているとは言えないのではないのでしょうか。

ところで、スズメは稲を食べるため、昔から害鳥として扱われがちです。また、僕が普段生活する中でも、ただうるさいという理由だけで追い払おうとする人も見かけます。では、もしスズメたちがいなくなれば、生態系はどのように変化するのでしょうか。

実際に、一九五〇年代には、中国で大規模なスズメの駆除が行われました。そしてたくさんのスズメが駆除された結果、中国は大規模な飢饉になってしまいました。実は、スズメは稲を食べる以上に、多くの害虫を捕食していたのです。スズメが駆除され、天敵のいなくなった害虫が大発生したことが原因で作物の不作が起きたそうです。

僕ら人間からすると、このスズメは小さな種や小さな虫を食べる小さな生物です。しかし、そんな小さな生物の、たくさんの小さな行動によって生態系が初めて成り立つのだと、僕はこの事実を知って感じました。

現在の日本では、多くの野鳥が減少傾向にあります。この中国の実話から考えると、今の日本はスズメだけでなく、他にも多くの鳥が減少しているため、これからの生態系のことを思うと、不安でいっぱいです。

だから、今の日本の生態系は改善されるべきです。例えば、空き地や廃墟などの使われていない土地で農業をしてはどうでしょうか。一つの建物よりも一つの畑の方が、絶対にもともとの生態系に近い環境を作り出せるはずですよ。

また、野鳥の生活する環境を守ることも重要です。森林を守るために無駄な開発をしないということはもちろん、野鳥の繁殖地である干潟や湿地帯、自然の海岸などを守っていくことや人が極力入れないような仕組みを作ることが大切だと思います。

鳥類だけでなく様々な生物が、日本に限らず世界中に存在しています。たとえ害虫と呼ばれる存在を人間が排除してしまうだけでも、それらの捕食者はやがて減少し、絶滅してしまい、生態系は崩壊してしまうでしょう。この世には消えてしまうべき生物などは絶対にいません。

しかし、人間は数多くの生物を絶滅させてきました。でも、今さら後悔しても仕方のないことです。それならば、人々がこれまでの生態系を壊してきた分、これからの生態系を安定させ、守っていくことが私たち人間がすべきことなのではないのでしょうか。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

南北に長い日本列島では、地域によって全く別の種類の生物が見られます。しかし、スズメのように広い範囲に生息して、私たちの生活の身近に感じられる生物もいます。そのため、スズメを見たことがないという人は少ないでしょう。だから、そんなスズメの減少を訴えた新聞記事にかなりの衝撃を受けました。そして、その記事がきっかけで、スズメという小さな種や小さな虫を食べる小さな生物にとっても大きく関心を抱き、守っていきたく強く願いました。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「理解するということ」

和歌山県 日高川町立丹生中学校 2年

川口 瑞月

皆さんは、このマークを見たことがありますか。これは、「ヘルプマーク」と言います。私が小学六年生の頃、偶然ネットで見つけ、「これは知っておきたい」と思い、調べ始めました。調べてみると、このマークは「外見からは分からないけれど援助や配慮を必要としている人に交付されるもの」と書かれていました。ヘルプマークの役割は主に「周囲の方に配慮が必要だと知らせる」、「理解してほしい、認めてほしい」の二つがあります。また、ヘルプマークの説明では、身につけた方がいたら周りはどうすればよいかということも示されています。「電車やバスでは席をお譲りください」「駅や店等では、見守る、声をかけるなどの配慮をお願いします」というものです。急に声をかけたらびっくりする方もいるし、声をかける側にも勇気がいると思います。一見誰にでもできそうな簡単なことですが、実行するのは難しいと感じました。

それからしばらくして、私は母に聞きました。

「ヘルプマークって知ってる？」

「知ってるよ。だって、あんたの弟持ってるやん。」「ほら、これ……。」

「えっ」

私は驚きました。今まで遠い存在だと思っていたヘルプマークがこんな近くにあるなんて……。しかも弟が持っているとは。と同時に、今まで弟に無茶を言っている私の姿が浮かんできました。

私の弟は、自閉症スペクトラムという発達障がいを持っています。弟はじっとしていたり、大勢の人に見られたりするのが苦手でパニックを起こすことがあります。そんな泣いて暴れる彼を私は落ち着かせることはできません。幼い頃の私は、弟が楽しく遊んでいるのを「うるさい」と言ってやめさせる等、自分のためだけに弟を注意していたように思います。しかし、母は違います。母には彼を納得させる力があります。弟は母の不思議と安心感のある、優しい腕の中でいつの間にか泣き止んでいます。こんな母のように私はなりたいと思います。

中学二年生になった今、私には一つの夢ができました。それは、支援学校の先生になることです。そのためには、一人ひとりの個性を理解してよい方法を見つけ出せる力が必要だと思います。弟は、決められた手伝いを確実にすることができます。優れた計算力や記憶力も持っています。このような人の良いところをその人に気づかせて伸ばすのも大切なことです。まずは身近な人を理解することからはじめていきたいです。

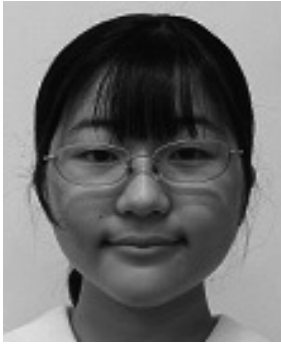
私はヘルプマークから、弟に対する思いや理解の仕方など、たくさんのことを考えさせられました。以前は、家で弟が騒ぐ音や大きな声にイライラしていた私。楽しいことばかりしていてもいいと思っていた私。でも、今は違います。弟にとってはこれがありのままの姿なんだ、当たり前なことなんだ。当たり前の基準は弟「だけ」とは限らない。みんな違う。だから私は周りの人を認めるように、弟のありのままを認める、これが私なりの考え方です。このように思うと弟の言動に腹を立てたり恥ずかしがったりすることでたまっていた怒りが、不思議と抜けていくように感じました。迷ったときはこの考え方を思い出して自分の心を変えたいです。

いつ、どこで見かけるか分からないヘルプマーク。何をすればよいか、相手が何を必要としているかを考え、正しく理解することが大切だと思います。

弟のはしゃいでいる姿、楽しそうに笑っている姿。私はこんな彼を見ると、自然と元気が湧いてきます。弟がくれる力で私も明るく前向きに歩いていきます。弟よ、いつもありがとう。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は、私の主張を障がい者や障がい者がいる家族に届けたいです。障がいを持っている人の中には、良い環境でなかったり、周りに理解されていなかったりする人もいるかもしれません。私の発表を聞いて、こんなふうにいる人もいるのだなと感じて、心の支えとしてくれたら嬉しいです。家族に障がいを持っている人がいると大変だと思います。でも、逆にその楽しさや成長を感じとって理解を深めてほしいと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

推すすめ

岡山県 岡山県立倉敷天城中学校 2年

宮田 真希

ユーチューバーに芸能人、キャラクターにクラスメイトまで。今や、魅力的な人を推したいというのは、当たり前のことですね。グッズを集めたり、雑誌で情報収集をしたり。その行動は、まさに愛。推しへの、「愛」からの行動とっていいでしょう。その「愛」からの文化は今に始まったことではありません。

ここで、私が尊敬する古のオタク女子、平安時代きっての人気ブロガーである清少納言を例に考えてみましょう。彼女が残した枕草子には、たくさんの推しへの愛が綴られています。例えば、病はという段では拾八くらいの髪がとても美しい女性が、虫歯を抑えて真っ赤になって耐えているところが好きだと書いています。つまり、「美人が苦しむところは素敵」と、なかなかの偏愛っぷりを見せています。自分の好きだと思ったことを心のままに書いて伝え、自分の感性をみんなに知ってもらおう。清少納言は今の推し活の祖とも言えるかもしれません。

私は小学5年生まで、やりたいことも強く関心を向けられるものもなく、今よりずっと自分に無頓着でした。授業は楽しいし、友達もいる。しかし、好きなことを本当に楽しそうに語る友達を見るといつも思っていました。なにかが足りない、と。せめてもの趣味として、毎日通っていた図書館。そこで偶然手に取ったのが、古事記。今では私の一番推しの本です。個性豊かな神々が大暴れ。ときには冷酷な面を見せ、しかしやけに人間臭い。この神々に対して、私は初めて強烈なまでの好意をもちました。

それからはあっという間でした。たくさん古事記に関する本を買って、実際に出雲大社に行って参拝する。これらをしているとき、自分は本当に生きている、精一杯生を楽しんでいる、と実感しました。同じものが好きな仲間もできました。仲間と語り合う時間は、私の知識を増やしてくれました。

「ああ、やっぱり一番は大国主尊だな。」

「わかる、人たらしだけど、憎めないよね。」

自分の考察に共感してもらえると、それだけで自己肯定感はずなげのぼり。相手の新しい意見を聞けると、好奇心やら興奮やらで、胸がどきどきとして、余計推しのことしか考えられなくなっていく。この時間が私はたまらなく幸福なのです。

ある会社が男女500人を対象に「どんなときに幸せを感じますか」という質問をしました。その結果、男女ともに「趣味の時間を過ごすとき」という回答が第二位になっていました。驚くべきことに、家族団らんや仕事での成功よりも趣味の時間の方が私たちを幸せにしてくれるのです。この「趣味」の中には推し活の時間も含まれているでしょう。また、NHKの記事には、脳脊髄液減少症という難病をもった方が、推しである俳優の林遣都さんの映画を見に行くためにリハビリに励み、その病気を克服したという話が紹介されていました。やはり、推しに向ける愛には特別なものがあり、生きる活力にもなりうるのです。

私の日常は、やらなければならないことで溢れています。テストに宿題。部活に習い事。対人関係などの悩みを抱えることもあるでしょう。漠然とした不安に苛まれることだってあります。そんな日常の中に、趣味に使える時間があれば、推しに捧げる時間があれば。私たちの日常は、より幸せに満たされていくのではないのでしょうか。

推しは、何かを深く愛するということは、いつの時代も私たちを勇気づけてくれます。推しは一人じゃなくても良い。何を推したっていい。あなたも、自分だけの推しを見つけて人生をより豊かなものにしませんか。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私は今、暗いニュースや出来事で落ち込んでいる人にこそ、この主張を届けたい。最近は様々な悩みごとを持つ人も多い。人間関係や学習についてなど悩みは多岐にわたる。そんなときに、好きなものを愛するのは素晴らしいことなのだ、改めて思い出してほしい。私の主張で元気のない人に力を与えられたら、これ以上にうれしいことはない。好きな俳優、キャラクター、本…様々な「推し」を思いうかべて、楽しんでほしい。私は元気のない人にこそ、この主張を届けたい。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

まずは地域から

広島県 尾道市立日比崎中学校 3年

北口 美結

先日、G7サミットが広島で開催されました。それを機に、広島県の食材に国内外から注目が集まっています。各国の首脳に提供された食事には、私が暮らす尾道のみかんやいちじくも使われていたそうです。生まれ育った尾道と世界とが食を通してつながったと聞いたとき、私は心躍る思いでした。しかしその一方で、以前から日本が抱えている、ある問題は解決されずにいます。それは、食料自給率です。現在の日本は食料自給率が他国と比べてとても低く、災害や紛争などで輸入が途絶えれば直ちに食料不足に陥ると懸念されています。私は、この状況を改善する必要性を強く感じており、そのためには、地域内のつながりを深めることが大切だと考えます。

私は普段から地元の食材を口にするのが多く、その中で二つのことを感じています。

一つは、「不揃い品」とよばれる食材もおいしく食べられるということです。私の祖父母は尾道で農業をしているので、畑でとれた野菜や近所の人にもらった魚を私の家まで持ってきてくれます。それらはどれも、形が悪い、傷がついている、小さすぎる、大きすぎる、など出荷できない理由があるものばかりです。私は何度か祖父母の畑を手伝ったことがあります。収穫後には、出荷できるものとできないものを分ける作業をする必要があります。時には収穫量の半分以上が出荷できないほうに含まれることもあり、そのうちの一部は知り合いに譲りますが、残りは捨てなければなりません。しかしそれらはどれも、他と同じようにおいしいのです。私はそれらを口にし、おいしさを噛み締める度に、「これが捨てられてしまうのか」とやるせない気持ちでいっぱいになります。だから私は、もっと多くの人たちに「見た目は関係ない、おいしい」ということを知ってもらいたいです。さらに、それを実感してもらうためには、地域の中でのつながりをもっと深くする必要があります。そうすれば、地域の人から不揃いな食材を譲り受ける機会がより多くの人たちに訪れ、その味の良さに目を丸くする人の数も増えると思います。

もう一つは、地産地消の取り組みについてです。私は、広島県や尾道市の食材が多く取り扱われている、産地直送市をしばしば利用します。そしてそこで買う食材の虜になっています。その理由は、鮮度が良くおいしいことと、産地が明確で安心できることです。私は、地産地消の取り組みは、消費者と生産者の両方に笑顔をもたらすものだと思います。消費者は新鮮で安心・安全な食材を選ぶことができ、生産者は輸送費を削減することができます。また、前半部分で述べた「不揃い品」の売買も行いやすくなると思います。実際に、不揃いな食材を低い価格で販売している様子は、他の店より産地直送市のほうが多く見られます。このような理由から、私は地産地消の取り組みを広げていきたいです。

国全体の問題である食料自給率の低迷、これを解決するために私たちにできることは、地域での生活にあると思います。地域の中でのつながりを深め、地元で生産された食材や本来は出荷できない食材を選択することは、私たちが身近に行える取り組みの一つだと思います。私はこれらを実行し、呼びかけることで、本当の意味で世界に誇れる、尾道、広島、日本にしていきたいです。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

この作品を通して、自分の意見を主張することの大切さを学びました。日本や世界に暮らす1人である私の言葉の力は、小さいかもしれないけれど、大きな意味をもつものだと実感することができました。だから私は、主張の通り、社会全体のためにできることを身近なところからはじめていきたいです。そしてそのために、社会で起きていることを他人事ではなく自分事として捉えていきます。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「命の尊さ」

山口県 長門市立仙崎中学校 3年

美濃 穂乃花

「命」この地球上に生きるすべての生き物に与えられた、かけがえのないもの。しかし、時として、それは平等でなくなることがあります。

生命の尊さを数多く詠んだ詩人のひとりに金子みすゞさんがいます。彼女のふるさと仙崎に、私の通う中学校があり、その校舎から見える仙崎湾は、いつも私を優しく包み込んでくれます。私は、そんな海をいつまでも守りたいと思い、先日、長門市の一斉海岸清掃で、青海島海岸の清掃ボランティアに参加しました。しかし、現地に着くと、そこに広がっていたのは、私がいつも見ていた美しい海ではありませんでした。私の目に飛び込んできたのは、ゴミで埋め尽くされ、足の踏み場もないほどの海岸だったのです。大量に流れ着いたペットボトルやプラスチックごみ、中には他国から流れしてきたものもありました。私はその現状に「えっ。」と言葉を失いました。

そんな中、私はある光景に衝撃を受けました。ゴミが絡まり、陸へ打ち上げられ、動けなくなっていた十センチほどの一匹の魚がいたのです。絡まっていたゴミを丁寧に取って、海に返しても浮かんだままの魚の姿を見て、「痛かったよね。苦しかったよね。ごめんね…」と、胸が締め付けられる思いでした。私たちが一度汚し、壊してしまった環境は、そう簡単には元に戻らず、多くの命が犠牲になっているのです。魚も人間も同じ命のはずなのに…。

近年、プラスチックごみの環境問題が取り上げられ、海洋生物の生態系や命の危機を報道等で目にする機会が多くなりました。今まで青く澄んだ日本海しか見たことがなかった私は、この問題は自分には関係のないものだと思っていました。しかし、実際には私が気づいていないだけで、身近なところで環境破壊や様々な問題が起こっていたのです。私の軽率な行動で、魚をはじめ多くの小さな命を奪っていたかもしれない。そう思うと、自分の醜さを感じられずにはいられませんでした。「魚一匹ぐらい…」と、私は命を甘く見ていたのです。

インターネットで検索してみると、プラスチックごみによって死んでしまったクジラやカメの記事、そして写真が驚くほど多く掲載されていました。地上では、私達人間が悠々自適に生活し、海の中では、魚をはじめ多くの命が消えているという現状。これは、金子みすゞさんの「大漁」という詩と重なります。

『朝焼け小焼けだ、大漁だ。大羽鰻（いわし）の大漁だ。浜は祭りのようだけど、海の中では何万の、鰻のとむらいするだろう』この詩の「生きることと死ぬこと（生かされていること）」「喜びと悲しみ」によって、みすゞさんは、大漁を喜ぶ人間側ではなく、弔いをする鰻の目線でこの詩を書いています。みすゞさんが、この詩に込めた思いのように、私たち人間は多くの命から生かされているのです。だからこそ、命に感謝するために「いただきます」という言葉は大切です。「命をいただく」ということは、私達はその生き物から命のバトンを託されたのです。しかし現在は、人間が地球環境を荒らし、人間が地球や他の生き物を傷つけています。この問題は都会に限ったことではありません。実際に、ここ長門・通でも現在起こっている重大な問題です。昔、まだみすゞさんが仙崎にいた頃は、長門・通の人々は魚やクジラの命をととても大切に扱っていました。捕獲したクジラを祭ったお墓の鯨墓に子鯨の墓があるのは、長門・通だけです。捕獲されたクジラのお腹の中の子は、湾が見渡せる小高い丘に埋葬されました。通の人々は、海を知らぬまま消えた命に伝えたかったのです。「家族や仲間はこちら（湾）におるけーね。」と。

昔の人々の思い、あるいは、みすゞさんの詩に込められた優しさは、今の時代、一体どこへ行ってしまったのでしょうか。

現代社会を生きる私達若者も、今の大変な時代を一生懸命牽引されている大人の方々も目の前の現実（見えているもの）のまなざしをひっくり返して考え、痛みを分かち、寄り添い、尊い命を大切にできる世の中を目指すことが大切なのではないでしょうか。

詩人「金子みすゞ」のふるさと、仙崎に生まれ、みすゞさんが育った町の風土の中で、朝に、夕に、王子山から眺めた同じ景色を、私も今見えています。私も同じように相手の心の痛みのわかる優しい心をもって生活していきたいです。

たかが、魚一匹の命ではない。だって、その魚にも家族や生活、未来があったのだから。この地球は人間だけのものではありません。だからこそ私は思い続けます。

「尊い命をありがとう。」

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を以前の私のように環境問題は自分には関係のないものだと思っている人に届けたいです。私は自分の考えが甘かったことを今回の体験を通じて身にしみて感じました。きっと私のように自分には関係のないものだとこの問題から目を背けている人は沢山いるはずで。だからこそ私は、そんな人達にこの主張を届け、一人でも多くの方がこの問題と向き合っていける社会になっていけばいいなと思います。私も、そして誰もが「命は尊いもの」だということを忘れてはならないのです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

思春期の取説

徳島県 徳島市上八万中学校 2年

山口 陽菜乃

青少年の非行を防止するためには、どんな解決方法があるのでしょうか。私は、今話題の AI に質問してみました。AI の回答は、「親が子どもに愛情と関心を持ち、子どもの話をよく聞く。いじめや不登校などの問題を早期に発見し、適切な対応を行う。貧困や失業などの問題を解決し、子どもたちが安心して暮らせる環境を整える。非行の危険性や非行の被害について教育する。」というものでした。

この答えを聞いて、「なるほど」という気持ちと、「いや、それだけでは解決できるものではない」という気持ちがしました。なぜなら、同じ環境や状況でも、非行に走る人と、そうでない人がいるからです。自分自身については、家族や周囲の人々の愛情をいっぱい受けて育ってきたと思っています。けれど、イライラすることもあるし、意味もなく怒ってしまうこともあります。そんなときは、母に教えてもらったことを思い出すようにしています。「大人でも自分をコントロールするんは難しいんよ。思春期をむかえている子どもは、不安定で当たり前なんよ。」その言葉を聞いて、私は、自分のことが嫌いになりかけていたときでも、落ち着いて行動できるようになりました。私が不安定な時期があるように、みんなも不安定な時期があるかもしれないと思うからです。

自分のことを思って言ってくれている、と分かっている、と素直に聞けない。そんなときでも、私は、本や漫画のセリフなら共感できることがあります。私は、作品に感情移入することによって、主人公たちと一緒に乗り越えることができます。「やりたいことを思いっきりやるためには、やりたくないことも思いっきりやんなきゃいけないんだ。」主人公に対して、仲間が言った言葉です。

「やることをやってから遊びなさい。」と言われたら、私は「わかってるよ。うるさいなあ」と思うこともありますが、作品の中のセリフなら、何故か素直に納得できます。

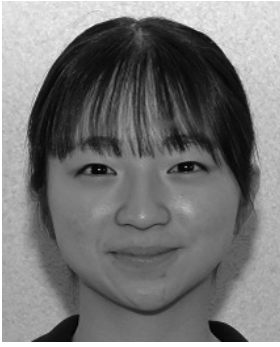
また、友達が急に話しかけてくれなくなり、どうしていいかわからずに、悲しくて悔しかったとき、このセリフを思い浮かべました。「泣いても大丈夫。みんなそうだよ。お天気の日ばかりじゃられないんだから、かわりばんこに励ましあっていけばいいんだって。」その言葉は、私の不安な気持ちに寄り添ってくれました。そして、人はひとりでは生きていけない、お互いに頼ったり頼られたりすることが大切なんだ、と気づかされました。

仲間の励ましや大切な人の言葉は、つらいとき、苦しいとき、非行に走りそうになっても、何かのきっかけで踏み止まることができると思います。それは、私にとっては母の言葉、本や漫画のセリフですが、人それぞれ、周りの人の言葉や、大事にしているものがあるのではないのでしょうか。それは、あなたの軸になるはずで、今の生活で苦しいことがあっても、その言葉を糧として、自分の生活をより良いものにしていきませんか。

大人のみなさん、私たちは、愛情いっぱい不自由なく生活できていたとしても、心と体は常にふわふわ揺らいでいます。でも、それは周りの影響を受けながら、大人として自分を確立するために、大切な時期なのです。みなさんが心配し、かけてくれた言葉に対して、そのときは素直に聞けなかったとしても、非行に走るブレーキになるかもしれません。たとえ、私たちが反抗的な態度をとっていたとしても、あきらめず、見捨てず、最後まで温かく見守り、接してほしいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を思春期の子どもたちと関わる全ての人と、私と同年代の思春期を迎えている人たちに届けたいです。今回の弁論大会を通して、普段考えている自分の思いを人に伝えるための言葉にする作業の難しさを知りました。このような機会を得て、より深く自分の考えを広げることができて良い経験になりました。今回の私の主張で、思春期の私達のことを理解し、接してほしいです。また、同年代の人たちには思春期を乗り越えるために自分を見つめ直すきっかけにしてほしいと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

Give and Give の合言葉

香川県 さぬき市立志度中学校 3年
野崎 和奏

私は、人のために動くことが好きです。どれだけしんどくても、周りの人に「ありがとう！」や、「助かったよ！」と言ってもらえると一気に疲れが吹き飛び、頑張ってた良かったなと思えます。

ある日、六時間目が終わり、私がいつものように掃除場所へと向かっていた時のことです。しばらくして、掃除の時間が始まったのにも関わらず、近くの廊下掃除の子がまだ来ていませんでした。何かの用事があるのかな？と思い、私は自分の担当の掃除もしながら、廊下掃除も手伝うことにしました。そのまま掃除をしていると、廊下掃除の子が遅れてやってきました。その子は、一人で廊下を掃除している私に気が付いたと思います。ですがその子は、私に何も言わず、黙ってほうきを手に取り掃除を始めました。ここで私の心にモヤッとしたものが現れました。

「何でありがとうって言ってくれるの？」

当時の私はそう思いました。モヤモヤが心に残ったまま掃除の時間は終わり、部活動をしている間も、その子にお礼を言われなかったことが引っかかり、モヤモヤがどンドンつっていきました。私は家に帰るとすぐに、母に今日起こった事を伝えました。すると母は、「わかな、ギブアンドギブの考え方が大事やで。」

と、私に言いました。突然ですがみなさんは、ギブアンドテイクという言葉をご存じですか。直訳すると「何かを与えてから何かをもらう」という意味になります。私は母に、「ギブアンドテイクなら聞いたことがあるけど、ギブアンドギブ？何それ？」

と尋ねました。すると母は優しく、私に答えてくれました。

「ギブは何かを与えるっていう意味やろ？テイクにはもらうっていう意味があるやろ？見返りを求めんと、周りの人にいっぱいいっぱい与えてあげるっていうのが、ギブアンドギブの考え方なんよ。」

そこでようやく、私は見返りを求めていたことに気が付きました。私は今まで見返りを求めて動いてきたのか、と考えると自分に対して恥ずかしさでいっぱいになりました。それからというもの、私は心を入れ替え、見返りを求めずに動けるようになりました。例えば、教室での出来事。いすのゆがみや床に落ちているティッシュのゴミ、前までは、誰も見ていないからいいかとスルーしてきたことが、見返りを求めなくなったことで自分から進んで、拾ったり直したりできるようになりました。

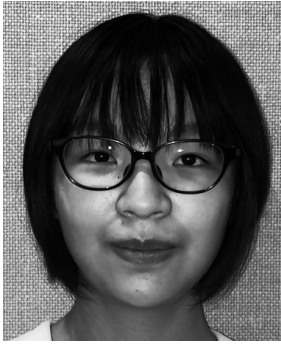
ここで私が一つ、これから過ごしていく上で常に心がけておきたいことがあります。それは、本当に助けを求めている人を自分の目で見極めるということです。もちろん、見返りを求めずに周りのために動くのは良いことだと思います。しかし、私がどれだけ必死になって、周りの人にたくさん与えたところで、その人にとって「今」それが必要なときでなければ、そのギブは単なる私の自己満足になってしまうのだと思います。私は、困っている人をたくさん助けたいと思っています。一概に困っている人の中でも、「自分で解決ができる人」と、「本当に助けを求めている人」との二種類の人がいると思います。私は、「相手が今本当に私の助けを必要としているのか」を、常に見極めなければならないのです。と言うのも先日、友達から相談を受けました。私は一生懸命その子の悩みの解決策を考え、私なりの答えを伝えました。するとなぜかその子はすっきりとしない表情をしていたのです。そこではっと気づきました。その子は私にアドバイスをもらいたかったのではなく、ただ私に話を聞いてほしかったのです。その子の顔が、相手の状況を見極めてから、行動に移すことの大切さに気づかせてくれました。

私たちはこれから毎日を過ごしていく中で、自分はどうするべきか、迷うこともたくさんあると思います。先ほど述べたように、相手の求めていることを見極めることは理想ですが、今の私の目標は、「相手のサインに気付いたら、迷わず行動すること」です。周りの人にいっぱいいっぱい与えることができる、強く優しい人間になりたいと思っています。そのような行動を続けていくことで、自然と見極められるようになるのではないかと考えています。

困ったときには、困ったと言って、そのときにみんなでその人に寄りそえる、そんな優しい社会をつくりたいです。んな社会をつくるために、まずは私が、「ギブアンドギブ」を実践し、素敵な未来への第一歩を踏み出そうと思います。

この作品を書いたきっかけはなんですか？

「ありがとう」という言葉が言ってもらえなかったこと、そのことにモヤッとした自分、その自分に対しての母からの言葉。そこで教えてもらった「ギブアンドギブ」という考え方を知ってから、少しずつ、見返りを求めずに自分から行動できるようになりました。見返りを求めなくなったことで、以前と比べ、心も軽くなりました。そんな人が一人でも増えてくれれば良いなと思います。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

最期までどう生きたい？

愛媛県 新居浜市立中萩中学校 3年

水田 葵彩

みなさんは、自分の人生を最期までどう生きたいか、ということを考えてことがありますか。また、家族が最期までどう生きたいと思っているかを聞いたことがありますか。例えば、自分の家族が自力で呼吸ができなくなったとき、その人が意思表示をすることができないとして、あなたは延命措置をするかどうかを決められますか。私はこれまでそのようなことを考えたことはなかったのですが、最近、深く考えさせられる出来事がありました。

先日、私の母方の祖父が突然亡くなりました。その日の朝まで元気だった祖父は、食べ物を喉に詰まらせて救急搬送されました。母が急いで病院に駆けつけましたが、その後しばらくして、もう亡くなるから、と私も病院に呼ばれました。私が着いた時には、祖父の意識はもうすでになく、家族みんなで静かに祖父の心臓が止まるのを見守りました。私は、目の前で人が亡くなるのを初めて見たので、とても怖くもあり、祖父との別れが悲しくもあり、複雑な気持ちでした。

しかし、後日、私の知らないところで、母や母の姉である伯母が、その時大きな決断を下していたことを知りました。祖父が病院に搬送されたとき、意識はなく、自力で呼吸もできずに、脳に酸素が回っていない状態だったそうです。自分の父親が亡くなるかもしれないという不安を抱えたまま、母や伯母は、病院の先生に、人工呼吸器をつけるかどうかの決断を迫られました。意識の回復が見込めない中、人工呼吸器をつけたとしても、意思の疎通もできず、なんのために生きているのか。でも、つけないという選択をしたら、自分たちが父親を死なせてしまうことになるのではないか。たった数分の間にこの決断をしなくてはいけなかったこと。どちらを選択しても、後悔は残り続けるのかもしれないということ。それは、私が感じた怖さよりも、もっともっと怖く、つらいことだったのではないかと思います。結局、人工呼吸器はつけない選択をしましたが、祖父はどうしてほしかったのでしょうか。今となっては分かりませんが、それを元気なうちに聞いていたら、母や伯母は、もう少し心が楽になった部分もあったのではないかと思います。

今回のこともあり、祖父の葬儀の後、家族で、自分は最期までどう生きたいか、どうしてほしいか、それぞれの考えていることを話し合ってみました。祖父の場合は人工呼吸器をつけるかどうかの選択でしたが、母と話をする中で、身近にある臓器提供意思カードについても知りました。自分が脳死状態になった後、臓器提供をしたいという意思表示は十五歳からできます。また、臓器提供をしたくない人は、年齢を問わずにその意思を示すことができます。自分の最期を自分で決めることができるのです。若くても高齢でも、誰にでも様々な形で命の選択を迫られる可能性はあります。母や伯母のような決断を、たった一人でしなくてはいけない時がくるかもしれません。その時に、その人がどうしてほしいかを聞いているのと、聞いていないのとでは、選択する人の心の負担は大きく違います。

何かきっかけがなければ、このようなことを考えたり、話し合ったりすることもないかもしれません。しかし、いつくるか分からない「その時」のために、まずは私が自分自身の命と向き合い、最期までどう生きたいかをしっかりと考えておきたいと思います。そして、残される家族のためにも、その意思を共有しておくことで、それぞれが納得のいく最期を迎えることができるかもしれません。人の考えは変わることもあるでしょう。だからこそ、何度でも、自分や家族の大切な命と向き合い続けていきたいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

祖父の突然の死を通じて、命の大切さはもちろんのこと、自分のためにも家族のためにも、最期までどう生きたいのかを考えておく必要性を感じました。私の主張を通して、若い方から高齢の方まで、どの世代の固にも自分の命や生き方について考えるきっかけになればと思います。また、自身の生き方を通して、私の多くのことを伝えてくれた家族にも、思いを届けたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

「普通」にとらわれない社会へ

高知県 南国市立北陵中学校 3年

和田 陽南子

『普通』はできる』『普通』はわかる』という言葉、私は生活の様々な場面でよく聞いてきました。みなさんは、「普通」とは何だと思えますか？この場合の「普通」とは、多数派の意見やこれまで多くの人がそうしてきた習慣のことを指すと思います。

私は、小さい頃から食べ物の好き嫌いが多く、幼稚園や小学校では居残りをして食べることがありました。その度に、周りの友達や先生から、「みんなは食べている」や「普通は食べられる」と言われていました。確かに偏食によって健康に成長できないという問題はあります。病気になりやすかったのも事実で、食べなければならないこともわかっていました。しかし、食感が嫌でどうしても食べられないこともあり、みんなが同じものを同じように食べることが求められる給食の時間はストレスでした。

また、私は早生まれで、身体が小さかったこともあり、みんなと同じことができないこともありました。私の通っていた小学校ではなわとびが盛んで、一年に一回なわとびのクラスマッチがあるほどでしたが、私は特になわとびが苦手で、いつもクラスの足を引っ張っていました。先生や周りの友達から「普通はできる」と言われ、辛い思いをしたことを覚えています。家で練習をしていましたが、なかなか上手く跳ぶことができませんでした。

みんなと同じように「普通」のことができないことは、そんなに悪いことなのでしょうか。私は、「どうしてみんなと同じようにできないのか」を悩みました。家族の工夫や自分の努力により、現在は、食べられるものも増えましたが、苦手なものはたくさんあります。長い時間悩んだのですが、私も家族も「食べられるものを沢山食べて、楽しく食事をする」という考えに行き着きました。そのおかげで、食事でストレスを感じるものが少なくなり、食べることが楽しみになりました。なわとびも、結局上手に跳ぶことはできなかったけれど、音楽や作文、水泳など自分の好きなことや得意なことを磨き、輝ける場所を見つけました。

人はそれぞれ違うのに、なぜ「普通」という基準でまとめ、評価をするのでしょうか。私達は、人と一緒ではないと不安になり、別の意見を持つことはいけないことだと思ってしまいます。だから、自分の考えより多数派の意見が「普通」となり、自分の意見が少数派だったら、それが間違っているという感覚に陥ってしまいます。

社会では少数派の意見を取り入れようとする動きもあります。例えば、ジェンダーレスの考え方が、働き方や暮らし方の様々な場面に広がっているということがあります。日本でも国会でLGBT理解増進法案の法制化についても議論され、性別に関係なく能力を発揮したり、自己表現したりできるように、社会は動いています。

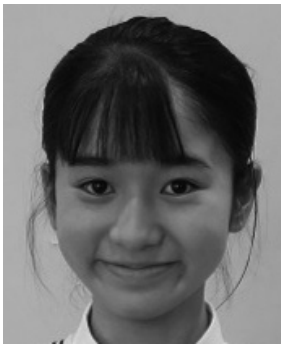
とはいえ、まだ日本では少数派への理解が十分に広まっていません。私の学校では、制服の変更についての議論が行われています。しかし、例えジェンダーレス制服が導入されたとしても、理解を深めていない人や、昔からの習慣にとらわれる人がいるように思います。ジェンダーレス制服を着ることによって一人でも多くの人が「普通」に縛られず、学校で自由に個性を表現できるように、少数派の意見を尊重したいです。制服のことだけに限らず、社会が決めた「普通」に違和感をもつ人がいたら、社会の考え方を換えられるように、話し合うべきだと思います。多様性の時代と言われる今、「普通」という基準でまとめ、評価をすることは間違っています。

私は、将来沢山の国へ行きたいです。様々な人と交流し、個性を生かして輝いている人に出会い、学びたいです。その経験を生かして、私の好きなことで自分や周りの人たちの個性を引き出せる仕事に就きたいです。そして、全ての人が「普通」に縛られず、一人一人が個性を出して輝ける社会をつくりたいです。そのために、自分の意見が少数派であっても勇気を出して声をあげます。そして、苦手なことで人に助けってもらったら、得意なことで人を手助けできる自分でありたいです。

みなさん、一緒に「普通」を見直してみませんか。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

私は、自分の好きなことで、自分や周りの人たちの個性を引き出せるような、仕事に就きたいです。また、「普通」にしばられず、一人一人が個性をだして、輝ける社会を作ります。私は、幼い頃から音楽が好きで、ピアノやダンスを習っていました。だから音楽に携われる仕事に就きたいと思っています。その仕事を通して、個性を輝かせる手助けをしたいです。私が夢をあたえてもらったように、私も誰かの夢を叶えられる人になりたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

私の人生の模範解答

佐賀県 学校法人東明館学園東明館中学校 2年
原武 凜奏

令和四年の春、私は期待に胸を膨らませ、福岡県にある中学校の入学式を迎えようとしていました。しかし、入学式前日に家族が新型コロナウイルスに感染したため、初めて中学校に登校をしたのは入学式から一週間後。

「おはよう。」

中学校に期待が強かった私は教室に入った途端、友達の異変に気づいたのです。女の子達は前髪をしきりに気にしているのです。私が初めて登校した日は先生方が校則違反を調べる日でした。

その一、女子の前髪は眉毛についてはいけない。

その二、ピンは使用不可。前髪が長い場合は括り上げておでこを全開にすること。

その三、眉毛を少しでも手入れした場合、三日間別室登校、授業を受けることは不可。生徒との交流は不可。

入学したばかりの私には理解できない「校則」があふれていました。検査の方法は一人の生徒を三人の先生方が囲み、調べるのです。

もうすぐ、私の順番になるところで、先生の声が静かに教室に響きました。

「出なさい。」

私の友達が外に出されたのです。

「先生、先生が生徒の居場所を奪ってもいいのでしょうか。」

私は勇気を振り絞って担任の先生に聞いたのです。

「校則だから」

たった一言の先生の答えは模範解答のようでした。先生の言葉で期待に膨らんでいた私は息が出来ないくらい絞めつけられ、怒りと失望で体が震えたのです。

ふと気が付いたら、私は学校に通うことが、出来なくなり、実際に地元の中学校に通うことが出来たのは一ヶ月程度。私が不登校になったのは校則のことで大きなショックを受けたからです。令和三年度の文部科学省の調査によると、不登校になっている中学生は約十六万人を超え、学校の規則などをめぐる問題で不登校になってしまう生徒は少なくありません。私もその一人でした。

校則なんか大嫌い…。中学校なんて大嫌い。

そもそも校則は誰のためのもののでしょうか。校則は学校と私達生徒がお互いに納得し、なおかつ地域の方々にも信頼していただくためにあると思います。

最近では校則を見直そうという動きがあり令和三年度NHKによる校則見直しを行ったことがある学校の調査では、「見直した事がある」約二十%。「見直す予定がない、無回答」といった回答は約三十%。私が思っていた割合よりもはるかに多かったです。

今私は、佐賀県の中学校に通学しています。私の学校では生徒が主体となり、校則を見直すプロジェクト、「ルールメイキングプロジェクト」生徒一人一人の意見や考えを尊重して向き合っていく。生徒が自分事として考えて、校則を見直しているのです。素敵だと思いませんか。

校則を通して私は世の中にあふれているルールは誰のためにある、と考えています。ルールは人を縛るものではなく、ルールは人を幸せに導くもの。目に見えるルールもあれば、目に見えないルールもある。そう、社会では一つの模範解答に収まらない考え方があふれています。だからこそ多様化が進んでいる現代社会において、主体的に考え行動することが私たち若者にとって大切なことではないでしょうか。

あの時学校に行くことが出来なくなった私は今、元気に毎日、中学校に通うことが出来ています。

将来、社会で貢献できる人材になるため私は今日も挑戦し続けます。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

今の日本にはルールに縛られている人が多いです。例えば、中学校であればブラック校則。ルールは私達が楽しく安全に過ごすためにあると私は思います。主張を通して私は、自分の個性に胸を張って表現できる人生を作り上げていきたいと考えています。ブラック校則を通して私は一人一人の個性の大切さを身に染みて感じました。私はこれから色んな人が生きやすい世界にするため、自分が経験した事を通して多様化が進んでいる社会で自分の人生や世界を変えていきたいと考えています。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

ありのままの松浦

長崎県 松浦市立志佐中学校 3年

土橋 真采

私たちが住んでいるこの松浦市、皆さんは好きですか。私は今まで、あまり好きではありませんでした。なぜなら「田舎」だからです。店は少ないし、人口も少ない。将来はどこに住みたいかと聞かれるなら真っ先に「とりえず松浦は出たい。」というほどでした。しかし、そんな気持ちが一気に変わったのは少し前のことです。

今年の三月、私は日本 PTA 全国協議会主催の五日間の沖縄研修に参加しました。日本全国の中学二年生が集まり、体験活動を通じてコミュニケーション能力の向上や、社会環境や自然環境への視野を広げるための交流を行いました。

外での活動や大人数での活動が苦手な私でしたが、「こんな機会ないよ。」と母や先生方から勧められ、「確かにこんな機会ないよね。できることはできるうちにしようかな。」という思いで参加しました。

研修の二日目、移動のためフェリーに乗ったときのことで。私と同じ班の子が言った一言に私はとても衝撃を覚えました。

「海ってこんなに青いの？」

「え？海が青くないことなんてあると？」

彼女に合わせた標準語を話す余裕もなく、脳と口が直結したように、その言葉が私の口から飛び出しました。

「私が住んでるところの海は、環境汚染のせいで汚い緑色なんだ。こんなに青い海なんて初めて見たかも。それに、夜があんなに静かで星が見える、なんてこともめったに無いの。」その話を聞いて唾然としました。環境汚染のせいで、綺麗で真っ青な海が見られない、町が明るすぎて星の光が見えないことへの驚き。私の驚いた顔を見て、その子は笑って「田舎っていいな」と言いました。

その日の夜、彼女が言った「田舎っていいな」という言葉がずっと頭に残って離れませんでした。都会には店もあるし、病院も多い。電車やバスの便も充実していて便利。住むなら絶対に都会がいい。松浦市は都会ではありません。彼女が住んでいる場所と比べると、不便なことが多いと思います。それなのに田舎がいい、と彼女たちは言うのです。私は都会にあこがれ、ないものねだりをして、勝手に劣等感を抱いていたのかもしれない。彼女たち都会に住む人たちも、それは同じだったのです。

四日目、その日はグループ全員で「自分の地域の課題を解決するには？」というテーマで話し合いをしました。私のグループはいわゆる「都会」と呼ばれる場所から来た人たちがばかりで、「海汚いんだよね私のとこ」「わかる！油浮いたりするもんね！」「あと森が少ない！」と熱心に自分の住んでいる地域の課題について意見を出していました。その後、班別に発表会を行いました。どの班も都会における環境の問題についてでした。彼女たちは沖縄の自然豊かな環境と自分たちの住む地域の環境とを比べ、今までよりいっそう、環境汚染の深刻さを感じたようです。

私は、松浦についてもう一度、考えてみました。確かに都会に比べると不便なことは多いかもしれませんが、でも、「もし、松浦の海が汚くなったら？」「もし、松浦の森がなくなったら？」

松浦の海の輝き、山の豊かさ、住む人々の温かさ。私が感じている松浦のありのままの姿は、都会にはない、かけがえのないものです。

私たちはこの研修を通してお互いの住んでいる場所の課題を話し合い、比較し合うことで、今まで見えなかったものが見えてきました。お互いの住んでいる場所の課題だけでなく、そのよさに気づくことができました。私がこの研修に参加した意義は、そこにこそあったのだと今では思うことができます。

「私、松浦市のことが、好きじゃなかったはずなのに。」

今回、沖縄研修を経て、沖縄の素敵なおところは勿論、他の県の素敵なおところをたくさん知ることができました。けれども、それと同じように、今までより深く松浦のことを考えることができました。

松浦は海、山、空気が綺麗で、とても落ち着くことのできる場所、私が生まれ育った、大切な場所。これからも松浦のいいところをたくさん見つけ、もっと松浦を愛していきたいです。

この主張をどんな人に届けたいですか？

私はこの主張を、地方に住んでいる学生たちに伝えたい。田舎と表現されがちで、不便なことが多い自分の住んでいる場所は、見方を変えたり、自分とはまったく違った場所で育った人の意見をとりいれたりして見ることで、意外といい場所に見えてくる。将来、今とはちがう場所に住むつもりだ、という人もいると思うが、少しでも、自分の育った故郷を愛してあげてほしい。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

自由を求める私たち

熊本県 熊本市立鹿南中学校 3年

平 歩依

皆さんは、少年の問題行動についてどう思いますか。いつもの朝食で、朝のニュースを見ているとふとある報道が目に入ってきました。それは、熊本県で起こった回転寿司店での少年の問題行動です。驚きで朝食をとる手がとまりました。「なぜそんなことを」「行動を止めてくれる友達はいなかったの?」「人の迷惑になることを考えられなかったの?」。

私は、人に迷惑をかけてはいけない、自分がされて嫌なことは人に絶対してはいけないと小さい頃から親に教えられてきました。そんな私には、少年の問題行動は到底理解できるものではありませんでした。私も含めて人々は自由を求めます。自由とは、他からの束縛を受けることなく、自分の思うままにふるまえることを言います。しかし、みんなが自由という名のもとに、自分勝手な行動を好き勝手に行ったらどうなるでしょうか。きっとこの世の中は意見が対立し、相手を攻撃して、争いを生むことになるでしょう。では、どうすれば自由で生活しやすい社会を築いていくことができるのでしょうか。私は三つのことを提案します。

一つ目は、ルールを守り自分の行動に責任を持つことです。校則を例に挙げると、学校のきまりは、私たち生徒が安心して学校生活を送るために決められたものです。私は生徒会書記を務めており、生徒代表として校則見直し検討委員会に参加しました。検討委員会では、先生や保護者をはじめとして、地域の方々も一緒になり、体操服や靴の決まりについて話し合いが行われました。多様化した社会の中で、どうすれば私たち生徒が安心して自由な学校生活を送ることができるのかを真剣に考えていただきました。それを目の当たりにし、感謝の気持ちでいっぱいになりました。そして、私も鹿南中の生徒がどうしたら毎日笑顔で過ごせるのかを考えなければならぬと思いました。また、学校生活を楽しく自由に過ごすためには、私たち一人一人が発言や行動に責任を持つことが必要です。そのことによって、初めてすべての人の自由が成立していくと思います。

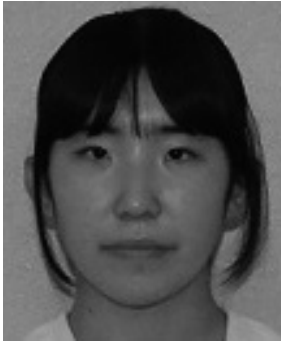
二つ目は、人の気持ちをよく考えることです。私の学年では、学年目標として自治力向上を掲げています。そのために、自己指導能力と他者認識を大切にしています。常に正しい判断をし、一緒に過ごしている仲間を互いに尊重し、大切にすることが自治力向上に繋がると考え、日々実践しています。また、私の学年には、みんなを引っ張るリーダーがいます。そして、それを多くのフォロワーが支えています。そのフォロワーの存在があるからこそ、リーダーは自信をもって自分の考えを行動に移すことができます。この経験から、私は互いを尊重し、人の気持ちを考え、他者との関係性を築くことが大切だと考えます。

三つ目は、想像する力を持つことです。最初に述べた回転寿司店での少年の問題行動においても、不適切な行動やSNSによる映像の拡散が周囲にどれだけの迷惑と影響を与えるか想像できたら、自分の欲求を抑え、誤った行動は起こさなかったのかもかもしれません。「面白ければいい」という安易な発想からの行動やSNSの利用が、大きな社会問題を引き起こすことに繋がったように思います。行動は良くも悪くも変化を生み出します。自分の行動が未来にどう影響するのか、想像することが大切だと考えます。

私は、家族からの教えを大切に守り、学校や地域などの社会の中で多くの人と関わることで、ルールやマナーを学んできました。しかし、私自身が気づかないだけで、もしかすると周囲に迷惑をかけていることがあるかもしれません。今回の報道を通して、自分がすべきことは何かを改めて考えました。見つめ直して感じたことを大切に、これからの生活を送っていこうと思います。自由で生活しやすい社会を築いていくため。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

今回「少年の主張」への参加を通して、今の社会を生きている私たちが、何をすべきなのかを考え、自分自身を振り返ることができました。これから様々な人と関わっていく上で、常に正しい判断を心がけ、自己指導能力と他者認識を忘れず、他者との関係性を築いていく、そんな人生を作り上げていきたいです。家族や先生、私を支えてくれているすべての人への感謝の心を忘れず、日々の生活を送っていきます。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

好きなことにまっすぐに

大分県 玖珠町立くす星翔中学校 3年

平井 さくら

舞台上立つからこそ感じられる、照明を一身に浴びたときの気持ち、お客さんから感じる私への視線、舞台の上から見える景色、そんな光景や気持ちに魅せられて、私は舞台上に立ち続けています。

私は小学校5年生からミュージカルを習っていて、毎年3月、公演という名の発表会に挑んでいます。

今年の演目は、「日本初の少女車掌物語」。この物語は玖珠町出身の「村上あやめ」さんの生涯をミュージカルにしたものです。

私はずっと演じてみたかった主役、村上あやめさん役をやつとの思いで得ることができました。

しかし、今回は1日に2公演。ダブルキャストでもう一人同じ役の人がいました。

彼女は私よりもミュージカルの経験も豊富でダンスもうまく、私にとっては大きなプレッシャーです。

ハードな練習が続く中、支えてくれたのは私の弟でした。弟は私の変化にすぐに気がつきます。うまくいかなかった日、私は帰りの車の中であげられないように泣いていました。すると「俺も今日うまくいかんやった。でも姉ちゃんは、あそこよかったよね。」と言ってくれるのです。

今思えば私がミュージカルを始めたのも1歳年下の弟がきっかけです。負けたくないと思って頑張ってこられたのも弟の存在。うまくいかなかったとき励まし合うのも弟。

弟はやると決めたらとことんやって、人が見ていないところでも努力する、私のよきライバルでもあり、憧れでもあります。

そして、もう一人の私を支えてくれた存在、それは私が演じた「村上あやめ」さんでした。

村上あやめさんは、日本で初めて女性でバスの車掌になった人です。女性の立場が社会的に低かった当時、村上さんの苦労は並大抵ではありません。しかし、自分の信じた道を他人からどう言われようとひたすら努力して歩みを進めたあやめさん。そんな彼女を演じる中で、私は自分とあやめさんとを重ね合わせていました。

ソロで歌うとき、私はあやめさんと自分への思いをその一瞬に込めます。

スポットライトが当たり、客席全体が見える。

一人ひとりの視線が私に集まる。

「夜明けの海に日が昇り

希望の鐘がなりひびく

なみだをふいて走り出そう」

私は村上あやめ。

どんな辛いことがあっても、他人から何と言われても

最後まであきらめず努力する。

そんな私を見てください。

あやめさんを演じることを通して、引っ込み思案だった私自身が変わった瞬間でした。

公演当日、思うようにいかなかった部分も含めて、あの時の自分にできる最大限の力を出せました。

初めて泣くほど緊張するということを経験し、どれが正解かわからずスランプに陥り、もうやめたいとさえ思ったりと、本当に様々な経験をしました。

しかし、これら全てがミュージカルを通して自分自身を変えるかけがえのない経験となりました。

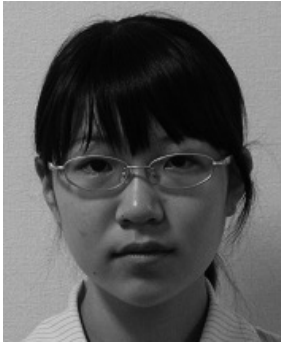
今、また新しい公演に向けてオーディションが始まりました。

私はやっぱりミュージカルが好きです。舞台上に立った人にしか感じられないあの感じが好きです。そして、舞台上に立っている自分が大好きです。

これからも好きなことにまっすぐに取り組んでいきます。

この作品を通して、これからどんな人生を作り上げて行きたいですか？

将来、具体的に「何になりたい！」というものははっきりとは見つかっていませんが、このミュージカルや私の大好きな歌を活かして音楽に関わる仕事につきたいと思っています。そのためにも「できない」ではなく、まずは「挑戦」を大事にしながら、今までつけた力をいかし、自分のやりたいこと好きなことにまっすぐ取り組めるような人生を作り上げていきたいです。そして、誰かの心を元気づけられるような人になり、音楽を届けていきたいです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

自分らしく生きる

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 2年
横山 恵都

私の名前は「恵都」だ。両親が心を込めてつけてくれた唯一無二のこの名前が私は好きだ。

この名前は私にとって「自分らしさ」について考えるきっかけを与えてくれたものでもある。小学生のころ、先生がみんなの名前を一人ひとり呼んでいった。そして私の番になった時、私は自分の耳を疑った。先生が私を「恵都君」と呼んだからだ。戸惑う私に、友達が言った言葉を今でも覚えている。

「だって男の子みたいだよ、けいってという名前。」

衝撃を受けた。私自身は男性のような名前だと感じたことなどそれまでなかったが、私の名前は周りの人にはそう思われていたのだろうか。その時は曖昧に受け流したが、胸の奥にもやもやしたものが残った。

その後も同じように間違われることやからかいで君付けされることが何度か続き、そのたびに私は自分の名前に自信がなくなっていった。相手に悪気はなくても、君付けで呼ばれると、自分が自分でないような気がして強い違和感を覚えた。そして、「こんな名前ではなくて、もっと女の子らしい名前だったら良かったのに」という思いがどんどん積もっていった。

幼稚園に通っていたころの私は、よく外で遊ぶ活発な性格で、男子とも喧嘩していた記憶もある。自分がいいと思えば、周りと違っていても押し通すような気の強さもあった。けれど、私のそんな一面は「女の子らしくない」と思い、控えていることを心がけるようになり、私は周りから浮かないように、おとなしく日々を過ごすようになっていった。

そんなある日、偶然出会った言葉が私の心に響いた。「自分らしく」を一番に」これはLGBTQの方のインタビューにあった言葉だ。私はそれまで、LGBTQの人々に対して少し壁を感じていたが、インタビューを読むうちに、性別という枠に囚われないその人らしい生き方が眩しくみえてきた。「男らしく、女らしく」ではなく「自分らしく」。その考え方は、私にはなかったものだった。

それから、私は少しずつ自分の心のままに行動するように心がけてみた。そうすると、いろいろなことが気にならなくなっていった。今、私には女子と同じくらい男子の友達がいるし、学校ではスカートではなくスラックスをはくことも多い。スラックスをはいている女子は学年に数人なので、初めてスラックスで登校した時は少し緊張したが、みんな「スラックス、似合うね」と言ってくれ、私はそのことを素直に嬉しく思った。自分らしく過ごす毎日は、とても楽しく充実している。

「自分らしく」という言葉に出会い、もう一度自分の名前について考えた。恵都というこの名前は人によっては女の子らしくないと感じられるかもしれないが、私にとって最高に自分らしい名前だ。私は今、この名前でも良かったと心の底から思っている。

今後「恵都君」と呼ばれることがあったとしても、もう気にしない。私は私として、胸を張って生きていきたい。そして、違いや個性に触れたとき、それを固定観念の「らしい、らしくない」という見方で判断するのではなく、それがその人らしさ、その人である証なのだとそのまま受け止める自分でありたい。

人はみんな違う。違うからこそその良さがあって、だからこそ世界が色鮮やかなのだと思う。「違う」ということに対する恐れや偏見はすぐにはなくならないかもしれない。だが、自分一人でもそう考えることが壁を取り払う第一歩となると信じている。誰もが個性をいかし、自分らしく生きることが当然とされる社会が創られること、それが私の願いだ。

この主張をどんな人に届けたいですか？

自分らしく生きることができずに苦しんでいる人に伝えたいと思っています。固定観念の枠にはめる考え方や、他の人と違うことへの恐れは、誰もが無意識のうちにもっているものです。しかし、私は一人一人の違いを自分らしさとして活かすことが、それを取り払い、社会がよりよい方向へと変わるきっかけになると信じています。この主張が、違いに悩む人の背中を押すことができたら幸いです。



国立青少年教育振興機構努力賞受賞

自分

沖縄県 那覇市立安岡中学校 3年

下地 琉聖

「アンニョンハセヨ チョヌン イ ユソン インミダ」

「こんにちは 私の名前は下地琉聖です」

私は、日本と韓国の二つの国籍をもち、生活している、いわゆる「ダブル」です。しかし、私は二十歳までに国籍を一つに絞らなければなりません。それが、ダブルとして生きていく上で逃れられない宿命です。また、日本の地で、二つの国籍をもって生きていると、いくつもの苦難に見舞われます。

私は、昔からダブルであることを周囲に伝えてきました。その情報が人から人へ伝わり私がダブルであることが広く認知されるようになっていきました。近年の韓国ブームの影響もあり、うらやましがられることもありましたが、心無い言葉をかけられる場面にも何度も直面してきました。

「国へ帰れ」

「混血はだまれ」

このようなひどい言葉の数々に対し、

「確かに純血じゃないしなあ」

「混血で何が悪いんだよ」

と、私の中に相反する二つの気持ちが渦巻いていました。

韓国人である私の母の家の事情もあり、正直、韓国語を話すことがままならない私も、いずれは韓国語を完璧にマスターしなければなりません。しかし、私の生活の場は日本。自分は何者なのか…悶々と考える日々が続きました。そんな中でも、

「最近、韓国で流行っているの何？」

「BTSの曲、踊れる？」

韓国に興味のある人たちからの質問は止みません。でも、実際、私が本当に好きなのは、日本のアニメやJポップです。それに、韓国の好きな曲として挙げられるのは、私の母が好きだった、八十年代から九十年代に流行っていたものばかりです。はっきり言って、周りの友人たちと私の好きなものは大きく異なります。このことについて、よくよく考えてみると、国籍からくる差ではなく、個性の一つと言えるのではないかと思えてきました。日本の人は、穏やかで優しい人が多い。その反面、韓国の人は、せっかちでズバズバ物言ったり怒ったりする人が多い。これらの差も「個性」と言えるのではないだろうか。日本人が穏やかで優しいのは、相手を嫌な気持ちにさせないための心配りです。韓国人がせっかちでズバズバ物言うのは、何かで失敗して嫌な思いをしてほしくない、という相手を思う優しさです。ここに存在するのは、国籍の差ではなく、相手の良さを認めること、つまり、個性の尊重と言えるのではないだろうか。過去には、心無い言葉に嫌な思いもしたけれど、これらの経験を通して、純血じゃない自分も、周りと同じ好きなものが違う自分も、全てが誇れる「個性」だと、今なら自信をもって言うことができます。

「ダブル」という個性をもつ一人の人間として、これから先の未来は、お互いの国の良さ、つまり個性を伝え合い、みんなが安心して暮らせる、そんな世界が広がって欲しいと切に願います。いずれ、私は国籍を一つに絞ることになるけれど、私の心の中にある個性が変わることはありません。この特性は、他の誰もが真似できるものでも、侵すことができるものでもなく、私にしかない、光り輝く「個性」なのです。

「自分は自分」

「ジョヌン チョ」

私は、「個性」を力に、自分の道を突き進みます！

「チグッルカジ チョエ イヤギルウ デュロジュソソ カムサハムニダ」

この作品を書いたきっかけはなんですか？

私は混血である自分が何者なのか、ずっと考え続けてきました。進路選択の時期がせまってきて、このことについて自分の中で1つのけじめをつけたいと思いました。そんな時に自分を一番はげます事ができるのは「自分」だと気づいたので。これから先の人生、周りとは違う事で悩む事があるかもしれない。そんな時、自分で自分に送るエールになる作品を書きたいという思いから生み出した私の最高傑作です！「自分」を読んで自分で自分にエールを送る事の大切さを感じてほしいです。

実施概要

第45回少年の主張全国大会 ～わたしの主張 2023～について

全国大会開催要綱

1. 趣旨

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝え、理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

少年の主張全国大会は、子どもたちにとって、これらの契機となることを願い実施するものです。

2. 開催日時

令和5年11月12日（日）13時～16時

3. 開催場所

国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟大ホール
〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3番1号

4. 対象

日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。

※国籍は問わないが、日本語で発表できること。なお、作品は未発表、自作のものに限ります。

5. 主催

国立青少年教育振興機構

6. 特別協力

公益財団法人上廣倫理財団

7. 協力

都道府県、青少年育成都道府県民会議、全国青少年育成県民会議連合会、全日本中学校長会、日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本PTA全国協議会

8. 後援

文部科学省、こども家庭庁、東京都教育委員会、日本放送協会、一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会、社会福祉法人全国社会福祉協議会

9. 主張発表者（出場者）・発表内容

（1）主張発表者

各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者1名、計47名の中からブロック代表として選ばれた12名が主張発表を行います。

（2）ブロック代表定数

全国を5ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、それぞれの数のブロック代表を選出します。

○北海道・東北ブロック・・・2名

○関東・甲信越静岡ブロック・・・3名

○中部・近畿ブロック・・・3名

○中国・四国ブロック・・・2名

○九州ブロック・・・2名

（3）発表内容

ア. 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。

イ. 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。

ウ. テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由にユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

また、商業的な固有名詞の使用は極力避けるようにしてください。

（悪い例：○○県にある○○旅館 良い例：○○県にある旅館 など。）

（4）発表時間

5分程度（400字詰原稿用紙4枚程度）

10. 表彰

- (1) 全国大会出場者全員（12名）に国立青少年教育振興機構理事長より奨励賞、全国大会出場者に選考されなかった都道府県代表者全員（35名）に同理事長より努力賞を贈ります。
- (2) 全国大会の審査委員会で審査の上、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞を選考し、賞状を授与します。また、審査委員会の審査過程によっては、審査委員会委員長賞が選考される場合があります。
- (3) 全国大会出場者全員（12名）に、記念品が贈呈されます。また、内閣総理大臣賞・文部科学大臣賞・国立青少年教育振興機構理事長賞・審査委員会委員長賞を受賞された方には、副賞が贈呈されます。

11. その他

- (1) 応募は、各青少年育成都道府県民会議等を通して行います。
- (2) 全国大会に応募した作品の著作権は、国立青少年教育振興機構に帰属します。
- (3) 全国大会当日のプログラム、発表集には、本人の写真と氏名、学校名等を掲載いたします。
- (4) 全国大会実施後に作成する報告書（作品集）について、当日の実施風景をはじめ、全国大会に応募（推薦）された47作品全てを掲載し、本人の氏名及び学校名等を公開するとともに、関係機関に配布します。
※全国大会当日の発表の様子や審査結果については、本人の氏名及び学校名等をWEB上でも公開します。
- (5) 全国大会出場者で希望する方は、受賞した翌年に当機構が実施する「ミクロネシア諸島自然体験交流事業」（7月～8月の10日程度）の参加者（中学生の場合）またはサブリーダー（高校生の場合）として参加することができます。（経費は当機構負担）

少年の主張都道府県代表者の推薦（作品の募集）について

1. 都道府県大会の開催

青少年育成都道府県民会議等の主催により、青少年育成市町村民会議、区市町村教育委員会、中学校等の協力を得て、広く作品の募集及び地区大会等を開催し、その選考を経た各代表者の中から都道府県大会において最も優秀な者を選考した。

2. 都道府県大会実施概要 73 ページ参照

全国大会出場者選考及び大会審査について

1. 全国大会審査委員会の設置

作品を審査するため、青少年団体、行政、学識経験者や教育関係団体、マスコミ等、複数の分野から審査委員を選任した。

審査委員長	宮崎 緑	千葉商科大学 国際教養学部教授
審査委員	今井 純子	日本放送協会 解説委員
	遠藤 哲也	全日本中学校長会 生徒指導部長
	佐藤 勇輔	こども家庭庁長官官房 参事官（総合政策担当）
	高木 秀人	文部科学省 総合教育政策局 地域学習推進課長
	萩原なつ子	国立女性教育会館 理事長
	古沢由紀子	読売新聞東京本社 編集委員
	松尾 和昭	（公社）日本PTA全国協議会 副会長
	松田 恵示	国立青少年教育振興機構 理事
	牟田悠一郎	第38回少年の主張全国大会 文部科学大臣賞受賞者

2. 審査方法及び審査基準

① 事前審査（全国大会出場者選考の為の審査）

事前審査（作文審査・出場者選考審査）は、全国5ブロックごとに協議を行い、全国大会出場候補者を選出。全国大会出場候補者の中から合計12名を全国大会発表者として選考。

<作文審査>（在宅審査）

[日 時] 令和5年9月29日（金）～10月16日（月）

[内 容] 都道府県代表作文を読み、主に論旨について審査を行う

[基 準] 以下の基準について、相対的評価を行う

- ① 鋭い感性で、新鮮な主張であるか（中学生らしさ）
- ② 新しい情報や視点があるか
- ③ 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか
- ④ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか
- ⑤ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか

[方 法] ①ブロックごとに審査を行う

②評価

全国大会出場者としてふさわしいと思われる作文をブロックごとに5つ選考し、上位から順番に5点、4点、3点、2点、1点を付与する

<全国大会出場者選考最終審査>

[時 期] 令和5年10月18日(水)

[場 所] 国立オリンピック記念青少年総合センター 大会議室

[内 容] 審査委員会での審議により、全国大会出場者12名を決定する

[基 準] 以下の基準について、相対的評価を行う

①作文内容が優れており、共感と感銘を与えているか

②説得力のある話し方であるか

③話しぶりに熱意と迫力があるか

[方 法] ①ブロックごとに協議を行う

②作文審査集計をもとにした協議により、全国大会出場候補者を絞り込む

③必要に応じ、全国大会出場候補者の動画を視聴し、論調の審査を行う

②全国大会審査

[日 時] 令和5年11月12日(日)

[場 所] 国立オリンピック記念青少年総合センター カルチャー棟 大ホール

[内 容] 全国大会出場者12名の動画を聴き、総合的な審査を行い、協議により内閣総理大臣賞、文部科学大臣賞、国立青少年教育振興機構理事長賞の三賞を決定する

[基 準] ①共感と感銘を与えていたか

②説得力のある話だったか

③熱意と迫力があつたか

④落ち着いて話していたか

⑤聴き手に感動を与えていたか

③設置された賞

全国大会出場者	(三賞)	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞	全国大会出場者のうち、優秀な3作品に授与した。
		審査委員会委員長賞	全国大会出場者のうち三賞のほか、審査委員長の評価が高い1作品に授与した。
		国立青少年教育振興機構奨励賞	都道府県代表として、全国大会出場者選考審査において選出され、全国大会に出場したことを賞し、全国大会出場者全12名に授与した。
		国立青少年教育振興機構努力賞	都道府県代表として、全国大会出場者選考審査に推薦されたことを賞し、都道府県代表者に授与した。

少年の主張大会応募者総数等

応募者数	383,669名
参加学校数	3,884校
全国大会来場者数	337名
インターネット同時配信視聴者数	1,302名

都道府県代表者学年別人数

学年	計
中3	34
中2	10
中1	3
計	47

審査委員の感想



思いを伝え 未来を拓く力に！

日本放送協会 解説委員

今井 純子

審査委員になって3年。今年、初めて、みなさんの主張を直接、会場で聞くことができました。中学生のみなさんが、自分や社会の未来を見つめ、生で訴える力に圧倒され、人の言葉って、こんなに心に響くものなのだと、改めて感じました。堂々とした発表。全員、本当にすばらしかったです。

鳥取県の矢曳さん。事故にあっただけで思うようにいけなくなった自分と向き合い、今の自分を認め、新しい夢に向かって歩み始めようという決意。ここまでくる道のりは、容易ではなかったでしょう。飾らないひとことひとことが、魂からの訴えのように心に刺さりました。

山形の冨樫さん。弟さんと映画をみにいく体験を通じて、手助けを必要としている人、それぞれの個性にあわせて手を差し伸べることで、苦手を乗り越える力になれると感じた。繊細な心の動きと決意が、弟さんへの愛情とともに伝わってきました。

愛知の竹内さん。「〇〇ガチャ」という言葉から、人生うまくいかないことを人のせいにはしない。転んでばかりでも、自分の責任で道を切り開いていく、という決意につなげる展開が見事でした。

北海道の三浦さん。妹さんの事故から感じた社会への不信。そこから、貴重な出会いをきっかけに、安全な社会をつくる活動に取り組もうと思ひ、実際に数々の活動に取り組んでいる行動力に、「自分もやらなければ」と背中を押される思いでした。

努力賞を受賞されたみなさんの作文も心に残るものばかりでした。福島県の押川さん。小塩江に行ってみたくになりました！

これからみなさんが出ていく社会。世界も日本も、それぞれの地域も、さまざまな課題を抱えています。今、解決策はみつからなくても、正面から向き合い、考え、自分の言葉で発信することで、周りの人の心を動かし、社会を動かす力につながると信じています。これからも、ぜひ、思いを発信して、未来を切り拓いてほしいと願っています。



誰もが幸せを実感できる世界の実現を目指して

全日本中学校長会 生徒指導部長

遠藤 哲也

まずは、本大会が4年振りに対面式での開催となったことを祝福したいと思います。web開催では十分に汲み取れない出場者の緊張感や観客席の反応が直に感じられ、改めて対面式の素晴らしさ、価値を実感することができました。

当日、登壇した12名の皆さんの発表は心に響く大変すばらしいものでした。中でも、矢曳未来さんの発表は、万感胸にせまるものがありました。交通事故の後遺症による苦しみや進学した中学校の先生からの支えを通して、徐々に変容する気持ちが切々と伝わってきました。矢曳さんの教師になるという夢が叶うことを祈ります。

富樫蒼汰さんは、当初、弟の障がいを理解できていませんでした。あることをきっかけに兄と話し合い、家族が弟の理解者でなければいけない、と気づきます。怒りの矛先を母親にぶつける場面では、富樫さんの憤懣やるせない気持ちが伝わってきました。

竹内愛子さんは、自分がもし「〇〇ガチャ」という言葉を使ったとしたら、「自分にも問題点があるんだろう」と思える人になりたい、と主張しました。最後の「ガチャガチャ言ってもはじまらないか！」には、未来志向のたくましさを感じました。

他にも、事故による恨みを安全な社会へと昇華する意義を主張した三浦かなさん、真の友情は国境を越えると主張した根本泰誠さんは、中学生らしい正義感や他人を思いやる心を感じました。

最後に、今大会に応募した約38万人の中学生に敬意を表したいです。また、中学生の輝ける場を提供していただいた本大会運営に携わった全ての皆様、御支援をいただいた各中学校の先生方に感謝を申し上げます。

子どもたち一人一人が、中学生時代に気づき、考えたことを礎とし、引き続き激動の時代をたくましく乗り越え、誰もが幸せを実感できる世界を実現してくれることを心から願います。



こどもまんなか社会の実現に向けて

こども家庭庁長官官房 参事官（総合政策担当）

佐藤 勇輔

今年4月より発足したこども家庭庁より、この少年の主張全国大会に審査委員として参加できたことを大変うれしく思います。私自身初めて、この大会を拝見させていただきましたが、発表者一人ひとりの熱い気持ちや心の叫びを直接会場で聴くことができ、大変刺激的な1日となりました。

今回参加して最も感銘を受けたことは、言葉の大事さです。作文を読んでいるだけでは伝わりきらない、中学生のみなさんの思いや願いが、ご自身の言葉を通して聴くと、ずっと心に届き、そしてその言葉に強く胸を打たれました。

特に、内閣総理大臣賞を受賞された矢曳未来さん（鳥取県）からの発表では、自分自身の言葉で、飾ることなく、自分の内面の変化やそこから生まれた自身の夢が語られており、私のみならず、多くの方々が矢曳さんの発表に心が震えたのではないかと推察します。

こども家庭庁では、「こどもまんなか社会」の実現に向けて日々業務に取り組んでおります。その中で最も大事だと考えているのが、こどもや若者、子育て当事者の方々の声をしっかりと受け止め、こどもや若者にとって最も良いことは何かを考え、政策に反映していくことです。

今回の大会には、全国で38万人を超える中学生の方々から応募があったと聞いております。これほど多くの方々が、本大会に参加しようと思い、自身の言葉で作文を書き、応募したことに深い感銘を受けます。こういった一人ひとりの声をこども家庭庁としては大事にし、皆様方とともに「こどもまんなか社会」を作っていきたいと思っております。

今後も本大会に多くの中学生の方が参加し、盛大な大会になることを心から期待しております。



これからの社会へ羽ばたいていく皆様へ

文部科学省 総合教育政策局 地域学習推進課長

高木 秀人

全国から集まった多くの主張は、どれも素晴らしいものでした。

全国大会が4年ぶりに集合開催となり、参加者の主張に生命が宿り、「言葉の偉大さ」を実感した大会でした。

残念ながら所用により、全国大会を直接拝聴することはできませんでしたが、都道府県大会を勝ち抜いた12名の主張は、日常生活を送る中での感謝や想い、考え、経験等を自分自身の言葉でまとめ、堂々と主張されていたのではないかと感じております。

人に物事を「伝える」ということは、とても難しいことです。自分の主張を「伝える」ため、声に抑揚をつけたり、ジェスチャーを取り入れたり、様々な試行錯誤を行ったことと思います。その試行錯誤がとても重要であると感じています。

今回受賞された主張、惜しくも受賞に至らなかった主張、どれも素晴らしい主張でした。ただ、賞を取ることが全てではありません。自身の課題を発見し、課題に正面から向き合い、解決に向け検討を重ね、その過程で感じた想いを主張によって伝える。このプロセスを経験できたことが皆さんにとって大きな財産になったのではないのでしょうか。

人生の中で、人前で発表するという機会は決して多いものではありません。都道府県大会や全国大会で発表する機会を得た皆さんは、このかけがえのない経験を糧に、未来へ進んで行っていただきたいと思います。

皆さんがこれから歩いていく時代は、デジタル化やグローバル化の急速な進展等により、複雑で予測困難な時代となっております。このような時代を生き抜いていくためにも、皆さんにとって本大会での取組が、これからの社会へ羽ばたいていく大きな一歩となりますことを期待しております。



"言動"力が「社会を変える原動力」になる

国立女性教育会館 理事長

萩原 なつ子

昨年は新型コロナ禍のためビデオ審査でしたので、今回、初めて対面で聴かせていただきました。ビデオ審査と異なり、私も少し緊張していたのですが、最初の発表者から最後のお一人まで、自分の想いを大勢の観衆の前で、臆することなく堂々と伝える姿に、とても感動を覚えました。発表者全員が、自分自身のみならず、友達との関係、家族との関係、社会との関わり、そして国際的な状況を見つめていました。そして現状を受け止め、何かを変えようとする過程が鋭い感性で語られており、素晴らしいと感じました。

そして未来に希望を見いだしていこうとするプロセスで、他者への優しいまなざしが醸成されていく様が見事に語りの中に表現されていたと思います。たとえば「誰かの自分らしさを支える」「できないことを受入れる」「バトンをつなごう、受け取ろうという気持ち」「恨みだけでは何も変わらない」「人の命や人生を奪ってはいけない」など印象に残っている言葉がたくさんあり、聴きながら思わず涙が何度もこみ上げてくるほどでした。おそらく発表者の「当事者」としての経験にもとづいて綴られた言葉ひとつひとつに、ただただ圧倒されたからでしょう。

社会福祉の専門家、山崎美貴子先生は当事者について、「そのことに直接関係ある人」であり、「最も当事者に関する情報を持っていて、何を望んでいるかをわかっている人」と述べています。そして当事者の強みは「社会を変える原動力」であると。

今回の発表を通して私自身がこれまで見えなかったこと、知らなかったこと、関心を持ってこなかったことがまだまだ多いことに気づかせてくれました。みなさんの“言動”力が「社会を変える原動力」になることを大いに期待しています。



「対面」でより一層伝わった言葉の力

読売新聞東京本社 編集委員

古沢 由紀子

作文（スピーチ原稿）を読んだ時と、実際に発表を聞いた時で、これほど印象が変わるのか。そんな感想を抱いたのは、やはり4年ぶりに全国大会が対面で開かれたからかもしれない。どの発表も、よい意味で用意した原稿を大きく上回る迫力と感動を与えていたのではない。

特に「言葉の力」が伝わってきたのが、内閣総理大臣賞を受けた鳥取県代表・矢曳未来さんの「私が歩む夢の道」だったように思う。一言一言、かみしめるように語るスピーチに、思わず引き込まれた。「私は障がいを持っている障がい者だ」と単刀直入に話し始めた矢曳さんは、6年前の交通事故による自らの後遺症を説明し、「元のように戻れると考えていたが、難しいことがわかった。そのことを理解したときから、体の力が抜けて悲しくなった」と心境を率直に表現する。それでも、前のようにはできない自分を受け入れたことについて、「できないと諦めたのではなく、自分を認めたのだ。私は自分の歩幅でゆっくりゆっくり『私の夢』を叶えようと思う」と決意を語った。

作文を読み返すと、矢曳さんの飾らず真摯な「心の声」を聞いているような感動を思い起こす。その夢は特別支援学校の教師だそうで、きっとひとりひとりの生徒に寄り添う先生になることだろう。

対面で開かれた今回の大会では、以前のように出場した生徒同士、家族同士が交流していた。オンラインでは難しかったつながりが復活したことも意義深い。

「少年の主張」には、時代の流れの先端を示すような面があり、中学生の鋭い感性に驚かされる。外国をルーツとする生徒の平和への祈り、過疎化にあえぐ地元を活性化したいという願い、「親ガチャ」という若者言葉への違和感……。全国大会までは届かなかったものの、不登校を経験した生徒の発表が複数あったことも目を引いた。不登校の生徒が大きく増える中、学校に来ている生徒に限らず幅広い「主張」をすくい上げた先生たちの意識も変わってきているのかもしれない。



心の声を言葉にのせて

日本PTA全国協議会 副会長

松尾 和昭

少年の主張全国大会において審査員を務め、数多くの感動的な主張に接する中で、中学生の皆さんのまっすぐな眼差しがとても印象深く心に残りました。

今回審査員を務め、目の前に広がった舞台から感じたのは、中学生ならではの瑞々しさと力強いメッセージでした。初めて書面で受け取った熱い思いが、生の声となって響き渡り、心の奥底に眠っていた感情が揺り起こされました。その作品は、日常の些細な出来事や家族との触れ合いから生まれたものであり、まさに身近な営みが醸し出す深い意味に気づかされました。

見逃しがちな瞬間への気づき、疑問を抱く勇氣、家族と向き合い再確認する大切さ。これらのテーマは、主張者が自らの生活から得た知恵や経験を通して表現され、私たち審査員も共感せざるを得ませんでした。特に、世界への視線を広げ、平和への熱い願いを抱く姿勢は、成熟した考えを感じさせ、驚くばかりでした。

言葉の選び方や表現力においても、中学生としては頭の中で渦巻く思いを的確に伝える難しさが垣間見えました。しかし、その苦勞が物語り、表現の幅を広げる過程となっていたことも感じました。彼らが背負っている言葉の重みを理解し、その真摯な姿勢に触れることができたことは、私にとって非常に貴重な経験でした。

最後に、この主張が若者たちの成長や未来において希望となり、社会にポジティブな影響をもたらすことを心から期待しています。審査員として関わらせていただき、感動と共に貴重なひと時であったことを深く感じています。



アンラーン

国立青少年教育振興機構 理事

松田 恵示

中学生の感性に直接触れた時のドキドキ、ワクワク感で、あっという間に時間が過ぎてしまった。聞き入って、考えさせられて、思わず手に持っていた関係書類が床に落ちてしまっていた。自分自身の大会での様子です。

確かに、今の社会では、さまざまな問題が生じています。そしてその問題も、複雑になっているし、多様にもなっています。もちろん、社会では問題ばかりが起こっているわけではありません。嬉しいことや楽しいことも、身近な生活で、あるいは世界の国々でずっと生じているとも思います。

自分や家族の身の回りで起こった辛い出来事を乗り越えていく様子、友達や地域の大人の人との関わりの中で、課題を捉えそれを解決していこうとする取り組み、すぐに動き出すことを通して困っている人に寄り添い支える決意など、聞いていて心揺さぶられるものばかりでした。また、そうした出来事を、自分の周りにとどめず、地域や世界へと開いていく考え方がとられていることにも驚きました。

こんないろんな顔を持つ社会を、一緒に創っている一員でもある中学生の皆さんが、何を感じ何を課題として捉え、そしてそれをどのように解決したり、あるいは自身や周りの人、もっと広く社会全体をより良くしていこうと考えているのか。

なるほど、とか、そんなふうに感じているんだ、とか、新しい見方や考え方に触れるとともに、自分自身もアンラーニングされる本当に楽しい時間でした。改めて、熱く時には鋭く、そして優しく語ってくれた中学生の皆さんに、そして応募して下さった全ての皆さんに感謝します。

対話するということ、言葉を通して心を伝え合うということ。AIの時代になっても、考えるということや価値を生み出していくということは、当然人間しかできないこととして、さらに大切なことになってくると思います。さらに多くの皆さんが来年も参加くださることを願っています。

ありがとうございました。



伝えたい思い

第38回少年の主張全国大会 文部科学大臣賞受賞

牟田 悠一郎

7年前、私自身もこの場所に立ち、発表をしました。当時中学生だった私はどうすればより強く、深く相手の心に届くように自分の思いを伝えられるか、何度も文章や構成を考え、スピーチの練習を繰り返したのを今でも覚えています。それだけにこの度皆さんの発表を目の前で聞いて審査をさせていただいた時には、胸に迫るものがありました。発表者の皆さんはそれぞれの鋭い感性で日常のふとしたこと、あるいは世界規模の大きな問題までを切り取り、幅広く様々な内容を驚くほどまっすぐに堂々と伝えてくれました。それは私にとっても思いもしなかったことを気づかせてくれ、皆さんから本当に多くのことを教わったような気がします。発表に関して、その感性や表現力はもちろんですが、主張としてのレベルの高さに本当に衝撃を受けました。凝った表現や技術ではなく、自分の思いを相手に伝えたい、聞いてもらいたいという思いが言葉や話し方に乗って発表されていたためだと思います。今やAIに人の表現力までもが奪われそうな不安を感じている私にとって、皆さんの力強い主張は清々しく何だか嬉しくもありました。私は今でも人前でスピーチをする機会が多々あり、そのたびに人に伝えることの難しさと大切さをいつも感じています。文字だけではない、気持ちを伝えるための表現や話し方など、この大会で得た経験は今でも私の財産です。そして審査員として参加したこの度の大会も私にとって、これ以上ない貴重な経験でした。これからも皆さんが持っている素晴らしい感性やそこから得た気づきを大切に、活躍を続けてほしいと思います。そして自信を持って、伝えたいという思いをぜひ持ち続けて下さい。本当にありがとうございました。

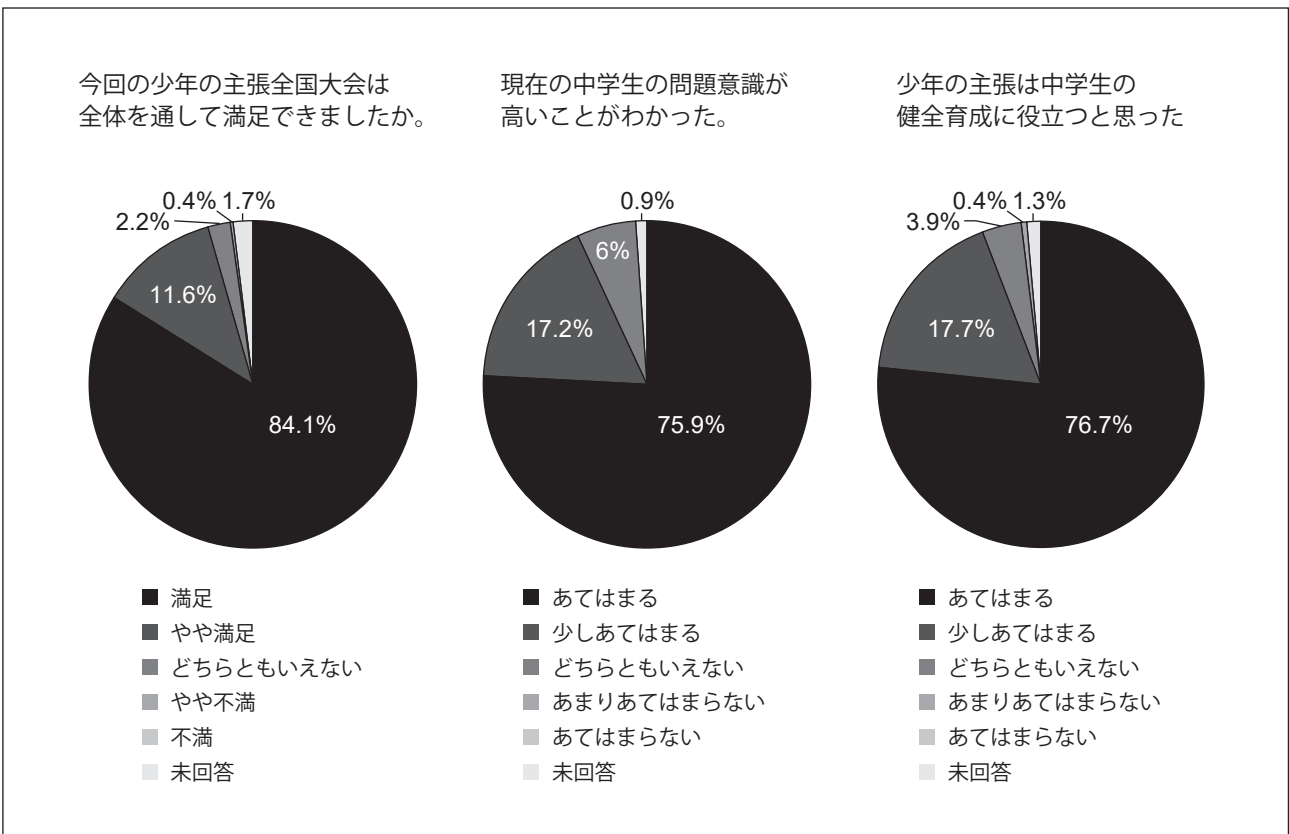
視聴者の声

- 中学生の主張にはっとさせられる貴重な時間であった。中学校に在籍するうちは、誰にも意見を述べる機会があるということが少年の主張に取り組む意義だと改めて考えさせられた。選ばれた発表者、代表者が東京に来るための様々な支えがあることも中学生の経験や成長の大きな支えとなっていると感じた。
- 今時の中学生と少し冷めた見方をしていた自分が恥ずかしくなった。このまま立派な大人になって欲しい。より多くの中学生に聞いて欲しい。
- 中学生の皆さんの日常生活への意識が高く素晴らしいと思った。
- 全員の主張を聞いてレベルの高さに驚いた。代表者以外の主張も聞いてみたい。
- 現在の中学生が社会の様々な情勢に目を向け、自分の思いをまっすぐに伝えていてすごいと思った。
- 主張には手話が付いており、来場者、視聴者に配慮していることが伝わってきた。
- 自分を見つめ相手の気持ちを想像し「考える」ことを大切にしていることが感じられる発表であった。
- 12名のメッセージに心を打たれた。中学生の考える素直な思いを聞くことができ、とても貴重な体験をすることができた。
- 教育を見直す時である。「学校が楽しく自身を輝かせる、満足な人生を送れる」取り組みを大人がしていかなければならない。
- 代表者の家族として全国の同年代の仲間と巡り会え、交流を持つ機会を与えて頂いた。その場で明るくたくましく、自分をしっかり持って対応する娘を見て、我が子の成長をしっかり感じることが出来た。スタッフの皆様に感謝している。
- 自分の意見や気持ちを社会に伝える勇気があることが凄いと思った。

視聴した中学生が今後活かしたいことや取り組みたいこと

- 自分が主張してきたことを精一杯やりきりたい。
- 山形県代表の方の意見を聴き、とても感銘を受けた。私の弟も同じ病であり、共感で一杯である。私も彼のような広い心で過ごして行きたいと思った。
- 自分自身この会の原稿を書くのに大変苦労した。そしてそれはその他の人も同様かそれ以上のものと思う。大切なのは様々な問題を考え続けることだと思った。
- 自分にはない視点の意見が多くあり、とても勉強になった。自分が考えていることを当事者の目線で考えるとまた違った気持ちになることが分かったので、自分だけの意見にとらわれず生活したいと思う。
- 大人のものの見方にとらわれずに、自分の意見を主張することの大切さに改めて気付かされた。また今の社会について色々な事に感心を持ったり、身の回りの事について様々な視点で考えることの重要性も分かった。
- 障害を持っている人、国籍が違う人など、様々な人がいるので、その人の視点に立ってどう思っているのかなど考えていくことが大切だと思った。
- 家族のこと、将来のこと、自分よりもっと深刻に物事を考えていた代表の方をとても尊敬する。日々を大切に、人との関わりを増やして行きたい。
- 「親ガチャ」という言葉を私のまわりからでも無くして行きたいと思った。
- 親しい友達、近所の人、学校の先生のおかげで日常生活が楽しく送れている。なので少しずつ感謝を伝えていく。

- 貴重な経験ができて良かった。主張者は自分の思いに信念を持ち素敵であった。自分も人前では声の強弱やジェスチャーによって分かり易く伝えられるようにしたい。
- 12人の発表者の主張を聞いて、自分の経験を通して思ったことやみんなに聞きたいことなどがよく分かった。自分も想像力を最大限に使い、思いやりを大切にしたいと思った。
- 「自分らしさ」を大切に、困難に立ち向かって行くことはとても大切なことだと思い、今後の生活に活かしたい。
- 自分も社会のために貢献できることを探す。そして皆が幸せに暮らせる日常を願う。
- 自分も日常の中での問題など不思議に思う事について、正直に話すことが大切だと思った。
- 問題に向き合わない事は、自分から逃げる事に繋がってしまう。自分には関係ないと思わず、関心を持って自分にできることを探して行きたい。
- 何でも運任せにせず、一瞬一瞬を大切にしようと思った。本当の思いやりを考えながら生活しようと思う。
- ニュースなどを見て、世界で何が起きているかを確認し、自分に出来る事がないか、よく考えたい。
- その人の目線からしか分からない意見にも耳を傾け、第三者の視点からも物事を見てみようと思った。
- 自分が見たまま考えず、想像を大きくして考える。別の視点からも見て考えようと思った。
- 12名の発表に含まれていた言葉「想像力」「自立」「理解者」などの言葉の裏側について深く学ぶことができた。今後は生活の中で言葉の重みを理解し、正しい言葉の使い方を意識しようと思った。
- 自分にも外国人の友人がいるが、日本と相手の国が戦争になったらなど考えたこともなかった。どんなことがあっても友達でいられるような関係でいたい。



少年の主張全国大会を振り返って
<参考資料>

「少年の主張全国大会」応募者数の推移

開催年度	開催回数	参加学校数	応募者総数 (人)	中学校在学者数 (人)	在学者数に対する 応募者の割合
1979 (昭和 54) 年	第 1 回	—	—	約 496 万 7 千	—
1980 (昭和 55) 年	第 2 回	—	—	約 509 万 4 千	—
1981 (昭和 56) 年	第 3 回	—	約 50,000	約 529 万 9 千	0.9%
1982 (昭和 57) 年	第 4 回	—	約 62,000	約 562 万 4 千	1.1%
1983 (昭和 58) 年	第 5 回	—	約 120,000	約 570 万 7 千	2.1%
1984 (昭和 59) 年	第 6 回	—	約 250,000	約 582 万 9 千	4.3%
1985 (昭和 60) 年	第 7 回	3,524	387,272	約 599 万 0 千	6.5%
1986 (昭和 61) 年	第 8 回	3,649	269,518	約 610 万 6 千	4.4%
1987 (昭和 62) 年	第 9 回	4,162	536,526	約 608 万 1 千	8.8%
1988 (昭和 63) 年	第 10 回	4,011	661,234	約 589 万 6 千	11.2%
1989 (平成 元) 年	第 11 回	4,359	774,035	約 561 万 9 千	13.8%
1990 (平成 2) 年	第 12 回	4,103	701,183	約 536 万 9 千	13.1%
1991 (平成 3) 年	第 13 回	4,176	735,862	約 518 万 8 千	14.1%
1992 (平成 4) 年	第 14 回	4,185	846,735	約 503 万 7 千	16.8%
1993 (平成 5) 年	第 15 回	4,166	812,370	約 485 万 0 千	16.7%
1994 (平成 6) 年	第 16 回	4,165	826,575	約 468 万 1 千	17.7%
1995 (平成 7) 年	第 17 回	4,021	757,791	約 457 万 0 千	16.6%
1996 (平成 8) 年	第 18 回	4,333	765,071	約 452 万 7 千	16.9%
1997 (平成 9) 年	第 19 回	4,245	836,467	約 448 万 1 千	18.7%
1998 (平成 10) 年	第 20 回	4,170	858,146	約 438 万 1 千	19.6%
1999 (平成 11) 年	第 21 回	4,213	868,574	約 424 万 4 千	20.5%
2000 (平成 12) 年	第 22 回	4,187	802,185	約 410 万 4 千	19.5%
2001 (平成 13) 年	第 23 回	4,185	790,383	約 399 万 2 千	19.8%
2002 (平成 14) 年	第 24 回	4,059	693,114	約 392 万 9 千	17.6%
2003 (平成 15) 年	第 25 回	3,841	534,730	約 374 万 8 千	14.3%
2004 (平成 16) 年	第 26 回	3,822	551,723	約 366 万 4 千	15.1%
2005 (平成 17) 年	第 27 回	3,944	542,032	約 362 万 6 千	14.9%
2006 (平成 18) 年	第 28 回	4,015	544,120	約 360 万 2 千	15.1%
2007 (平成 19) 年	第 29 回	4,044	510,763	約 361 万 5 千	14.1%
2008 (平成 20) 年	第 30 回	4,018	498,029	約 359 万 2 千	13.9%
2009 (平成 21) 年	第 31 回	4,126	511,519	約 360 万 0 千	14.2%
2010 (平成 22) 年	第 32 回	4,204	515,232	約 355 万 8 千	14.5%
2011 (平成 23) 年	第 33 回	4,142	524,061	約 357 万 3 千	14.7%
2012 (平成 24) 年	第 34 回	4,127	550,112	約 355 万 2 千	15.5%
2013 (平成 25) 年	第 35 回	4,257	565,500	約 353 万 6 千	16.0%
2014 (平成 26) 年	第 36 回	4,172	563,777	約 350 万 4 千	16.1%
2015 (平成 27) 年	第 37 回	4,253	547,977	約 346 万 5 千	15.8%
2016 (平成 28) 年	第 38 回	4,278	555,559	約 340 万 6 千	16.3%
2017 (平成 29) 年	第 39 回	4,188	542,236	約 333 万 3 千	16.3%
2018 (平成 30) 年	第 40 回	4,298	522,229	約 325 万 1 千	16.1%
2019 (令和 元) 年	第 41 回	4,171	496,492	約 321 万 8 千	15.4%
2020 (令和 2) 年	第 42 回	2,660	252,732	約 321 万 1 千	7.9%
2021 (令和 3) 年	第 43 回	3,741	404,266	約 322 万 9 千	12.5%
2022 (令和 4) 年	第 44 回	3,748	391,326	約 320 万 5 千	12.2%
2023 (令和 5) 年	第 45 回	3,884	383,669	約 317 万 7 千	12.1%

※中学校在学者数は、文部科学省令和 5 年度学校基本調査の区分「中学校」を参考にしています。

「少年の主張全国大会」三賞等受賞者一覧

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第1回	昭和54年度	総理府総務長官賞	北海道	利尻町立峯形中学校	3年	池原広文	校門に思う
		総理府総務長官賞	栃木	塩谷町立大宮中学校	3年	小堀芳広	私の希望
		総理府総務長官賞	岐阜	美山町立美山北中学校	1年	尾岡良子	私の家庭
		総理府総務長官賞	大阪	豊中市立第5中学校	1年	長岡信男	はばたけ未来に
		総理府総務長官賞	岡山	倉敷市立黒崎中学校	1年	中野恵美	私の訴えたいこと
総理府総務長官賞	佐賀	武雄市立川登中学校	3年	松尾直子	少年として訴えたいこと		
第2回	昭和55年度	内閣総理大臣賞	新潟	村上市立村上第1中学校	3年	江見寛子	今、私達にできること
		総理府総務長官賞	広島	福山市立城東中学校	3年	森雅子	生きる
		文部大臣賞	香川	三野町立三野津中学校	3年	佐川圭三	「やべち」に学ぶ
第3回	昭和56年度	内閣総理大臣賞	愛媛	松山市立雄新中学校	3年	早川明美	心の糧
		総理府総務長官賞	鹿児島	鹿児島市立西紫原中学校	2年	寺田美重	身障者として訴えたいこと
		文部大臣賞	大阪	堺市立庭台台中学校	3年	寺西洋子	受験・仲間・心
第4回	昭和57年度	内閣総理大臣賞	栃木	佐野市立城東中学校	3年	松本由紀子	私は教師になりたい
		総理府総務長官賞	兵庫	神戸市立御影中学校	1年	和田浩介	少年として訴えたいこと～エチオピアで見たことから～
		文部大臣賞	広島	呉市立両城中学校	2年	竹下愛	私の決心
第5回	昭和58年度	内閣総理大臣賞	高知	伊野町立伊野中学校	1年	山勢憲一郎	心をこめて「ありがとう」
		総理府総務長官賞	栃木	宇都宮市立星が丘中学校	3年	福田寿美江	両親に学ぶ
		文部大臣賞	新潟	六日市町立六日町中学校	3年	関 昭典	今、学校で考えていること
第6回	昭和59年度	内閣総理大臣賞	長崎	有家町立有家中学校	2年	松島吉宏	鳴らないチャイム
		総務庁長官賞	富山	小杉町立小杉中学校	1年	定司美恵子	私の希望
		文部大臣賞	新潟	巻町立巻西中学校	3年	小林三枝	乗り越えて今
第7回	昭和60年度	内閣総理大臣賞	愛知	名古屋市立宮中中学校	3年	大島幸子	今だから言える
		総務庁長官賞	新潟	黒川村立黒川中学校	3年	中野克英	寺に生まれて
		文部大臣賞 特別賞	長崎	西有家町立西有家中学校	3年	安達かよ	その時私は
		文部大臣賞 特別賞	埼玉	秩父市立大田中学校	2年	中田昌伸	僕の家「酪農家の跡継ぎとして」
第8回	昭和61年度	内閣総理大臣賞	香川	丸亀市立南中学校	1年	垂水希美枝	ありのままの姿で
		総務庁長官賞	島根	出雲市立出雲第二中学校	3年	米原のぞみ	「のぞみて・・・」母の言葉に生きる
		文部大臣賞	鹿児島	末吉町立末吉中学校	2年	白鳥哲也	手話から学んだこと
		特別賞	山形	長井市立北中学校	3年	佐藤真理	一通の手紙から
		特別賞	沖縄	名護市立東江中学校	1年	大城洋子	目標に向かって
第9回	昭和62年度	内閣総理大臣賞	長崎	県立野崎養護学校中学部	2年	野田綾子	心で握手
		総務庁長官賞	岡山	倉敷市立新田中学校	1年	岡田良平	僕の弟
		文部大臣賞	福井	武生市立武生第一中学校	2年	谷口敏和	いじめられっ子を救え!
		特別賞	新潟	津南町立津南中学校	3年	小野寺優子	恵福園のおばあちゃん
		特別賞	愛媛	伊予市立港南中学校	3年	一色寿恵	創り出す喜びを胸に
第10回	昭和63年度	内閣総理大臣賞	愛媛	松山市立勝山中学校	3年	瀧本則隆	心をみがく～ロシア人基地の清掃活動を通して～
		総務庁長官賞	静岡	島田市立島田第一中学校	3年	大石寿宏	国際化を考える
		文部大臣賞	鳥取	東郷町立東郷中学校	3年	石賀正元	生きる幸せ
		特別奨励賞	山形	平田町立飛鳥中学校	3年	富樫美起	国際社会への目覚め
		特別奨励賞	東京	私立桐朋女子中学校	3年	正木綾	勉強より大事な勉強
		特別奨励賞	京都	京北町立周山中学校	3年	山田義治	人間の生き方について思うこと
第11回	平成元年度	内閣総理大臣賞	佐賀	私立佐賀清和中学校	3年	久富薫	地球にやさしく
		総務庁長官賞	福井	鯖江市立中央中学校	2年	吉田正樹	努力のすばらしさ
		文部大臣賞	山形	鶴岡市立鶴岡第四中学校	3年	阿部幸	生きているということ
		特別奨励賞	千葉	大多喜町立大多喜中学校	2年	張本敏美	私の名前は張本敏美
		特別奨励賞	新潟	枕崎町立松浜中学校	3年	石黒葉子	我が家の騷
		特別奨励賞	和歌山	美里町立美里中学校	3年	今岡万純	祖父の看病を通して
第12回	平成2年度	内閣総理大臣賞	愛媛	今治市立南中学校	2年	馬越裕美	兄貴に乾杯
		総務庁長官賞	福島	福島市立福島第一中学校	3年	市原亮	部活動から学んだもの
		文部大臣賞	茨城	水戸市立国田中学校	3年	宮田敦子	自然を大切に
		特別奨励賞	新潟	新井市立新井中学校	3年	伊藤よし子	この手にかける私の願い
		特別奨励賞	滋賀	栗東町立栗東西中学校	3年	勝西紀之	人のためになること・・・
		特別奨励賞	奈良	明日香村立聖徳中学校	3年	飛鳥朝子	母の言葉を聞いて
第13回	平成3年度	内閣総理大臣賞	島根	三隅町立三隅中学校	3年	吉村幸雄	ぼくの夢
		総務庁長官賞	新潟	弥彦町立弥彦中学校	3年	皆川辰男	長男の宿命から
		文部大臣賞	佐賀	私立佐賀清和中学校	2年	城島澄子	地球のみみだ
		審査委員会特別賞	山形	山形大学教育学部附属中学校	3年	佐藤郁子	今、私達が街をつくる
		審査委員会特別賞	東京	多摩市立貝取中学校	3年	末吉優子	ボランティア活動と本当の目
審査委員会特別賞	神奈川	私立函嶺白百合学園中学校	1年	早川幸恵	帰りを待つ人々		
第14回	平成4年度	内閣総理大臣賞	愛媛	松山市立西中学校	2年	泉正徳	苦しみも悲しみも肥料に
		総務庁長官賞	富山	魚津市立西部中学校	2年	高谷朋花	七十点の両親が最高
		文部大臣賞	北海道	弟子屈町立弟子屈中学校	3年	横川心	命、育て
		審査委員会特別賞	山形	山形大学教育学部附属中学校	3年	伊豆田あかり	心と外見
		審査委員会特別賞	神奈川	横浜市立洋光台第二中学校	3年	山谷明子	私の夢
		審査委員会特別賞	長崎	福江市立福江中学校	1年	平山長富	心の鐘
第15回	平成5年度	内閣総理大臣賞	宮崎	宮崎市立宮崎東中学校	3年	泉裕一郎	待っていた学校週五日制
		総務庁長官賞	青森	十和田市立大深内中学校	2年	大久保礼子	今を大切に
		文部大臣賞	沖縄	石垣市立石垣中学校	3年	金城紫穂	ぬくもり
		審査委員会特別賞	長野	更埴市立屋代中学校	3年	松沢かおる	ブルタブと私
		審査委員会特別賞	福島	本宮町立本宮第一中学校	3年	国分かおり	「生きる」ということ
		審査委員会特別賞	和歌山	下津町立下津第二中学校	1年	浜英樹	僕の育った塩津で
審査委員会特別賞	岡山	倉敷市立福田南中学校	1年	阪本真一	レイ = アイクマンそれは本当の友達		
審査委員長激励賞	群馬	県立盲学校中学部	3年	長峰美枝	私の夢		

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第16回	平成 6年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	沖縄	沖縄市立山内中学校	3年	稲嶺彩子	夢を持って
			栃木	私立作新学院中等部	3年	高内めぐみ	父が教えてくれたこと
			秋田	平鹿町立醍醐中学校	3年	菅原嘉治	りんご農家に生まれて
			茨城	協和町立協和中学校	3年	河田友里	力強く、わたしは生きたい
第17回	平成 7年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	岡山	倉敷市立西中学校	1年	小野めぐみ	私の戦い
			茨城	協和町立協和中学校	2年	中里成喜	自分自身に克つために
			愛知	旭町立旭中学校	3年	安藤佳代子	旭の町に生きる
			東京	荒川区立日暮里中学校	1年	高宗哲	僕たちにできること
第18回	平成 8年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	福岡	勝山町立勝山中学校	2年	義経千晶	勇気を
			東京	台東区立下谷中学校	3年	岡村朋子	蜘蛛の巣
			熊本	山鹿市立鶴城中学校	3年	神崎真由	私の試験
			島根	西郷町立西郷南中学校	1年	常角和代	広い目で
第19回	平成 9年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	静岡	沼津市立第五中学校	3年	露木義章	A先輩から学んだこと
			三重	私立皇学館中学校	2年	宮本真衣	海の命を守ろう～おばあさんに教えられたこと～
			山梨	韮崎市立韮崎東中学校	3年	高保かおり	在宅介護から考えたこと
			島根	西郷町立西郷南中学校	3年	吉田修	きゅうり
第20回	平成 10年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	鹿児島	有明町立宇都中学校	3年	坂口潤成	僕の町 - 僕の夢
			神奈川	山北町立清水中学校	1年	武尾一興	中学生になって
			奈良	生駒市立緑ヶ丘中学校	1年	中地まりあ	自然の魂
			山形	長井市立長井南中学校	3年	鈴木智恵	ピナアダム、私の道しるべとして
第21回	平成 11年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣賞 審査委員会特別賞	山口	徳山市立岐陽中学校	3年	川崎祐樹	同じ人間だから
			茨城	阿見町立阿見中学校	3年	湯原瑞紀	みんなで学校を創ろう
			愛媛	肱川町立肱川中学校	3年	竹本咲子	うちは五人家族
			栃木	西那須野町立西那須野中学校	3年	松林朝子	家族と支えあう中で
第22回	平成 12年度	内閣総理大臣賞 総務庁長官賞 文部大臣奨励賞 審査委員会特別賞	東京	港区立青山中学校	3年	秋田絵麻	本当の幸せとは・・・
			滋賀	石部町立石部中学校	3年	中川智香子	さわやかな学校をめざして～トイレからの発信～
			岡山	倉敷市立西中学校	3年	花田春香	あなたは、我が日本愛していますか？
			鹿児島	喜界町立第二中学校	3年	前泊佑香	島うたの心を伝えたい
第23回	平成 13年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	新潟	六日町立六日町中学校	1年	天海琢磨	ぼくは僕
			奈良	私立智辯学園中学校	1年	北側真由佳	私のバリアフリーの第一歩
			富山	高岡市立南星中学校	3年	炭谷英信	言葉の思い出から学んだもの
			東京	足立区立第十四中学校	1年	荒谷真理子	努力が教えてくれた事
第24回	平成 14年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞	大阪	大阪明星学園明星中学校	3年	植田倫啓	「ケータイ」と「僕」
			鹿児島	志布志町立志布志中学校	2年	西国領君嘉	日本の心を舞う
			静岡	下田市立稲生沢中学校	3年	河井千佳	私の個性
			和歌山	和歌山市立東和中学校	3年	岩橋恵恵	妹の笑顔
第25回	平成 15年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	長崎	島原市立第三中学校	3年	西誠	これから頑張るんだ
			秋田	神岡町立平和中学校	3年	杉澤綾香	ホームステイとホストファミリー体験記
			沖縄	浦添市立港川中学校	2年	渡邊次オースティン誠	ダブルの人生を過ごしたい
			長野	大町市立第一中学校	3年	柴原理志	揺るがない想い
第26回	平成 16年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞 審査委員会特別賞	山形	山形市立蔵王第一中学校	2年	澤田充史	僕の見たヒロシマ
			宮崎	山之口町立山之口中学校	1年	徳留彩乃	私になりたい
			岐阜	七宗町立神測中学校	2年	上野由貴	世界が一つになるために
			福島	霊山町立霊山中学校	3年	佐藤寛和	ハンデなんか怖くない - 僕の挑戦 -
第27回	平成 17年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞 審査委員会特別賞	富山	高岡市立伏木中学校	3年	飯田優里香	かっちゃんを支える伏木の絆
			山口	長門市立深川中学校	2年	中嶋詩織	とも生きる
			岩手	北上市立南中学校	3年	菅原周平	嘶の言葉と言葉の話
			富山	氷見市立南部中学校	2年	沈道 静	茶道の香りが教えてくれたこと
第28回	平成 18年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞	栃木	真岡市立真岡中学校	3年	菱沼優希	受け継がれる命 - その重さを・・・
			徳島	那賀川町立那賀川中学校	3年	坪井克裕	今、訴えたいこと
			宮崎	三股町立三股中学校	3年	福田聖伍	命をつなぐアサガオ
			岩手	盛岡市立上田中学校	3年	坂本潤奈	私は地球人
第29回	平成 19年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞	東京	墨田区立立花中学校	3年	渡辺隆介	今に生かそう「江戸草鞋」を
			山形	南陽市立宮内中学校	3年	平 暁祐	「とんと音」を未来へ
			鹿児島	始良町立山田中学校	1年	新園祐花	今を生きる私
			熊本	南阿蘇村立白水中学校	3年	後藤奈々	私と沖縄
第30回	平成 20年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣奨励賞 国民会議会長特別賞	愛知	豊田市立崇化館中学校	3年	蔭ふんてい	為什麼、そして謝々
			愛知	豊田市立美里中学校	3年	武田聡美	「命」を生きる人との出会い
			埼玉	加須市立昭和中学校	2年	町田卓哉	何だっていいんだあ
			愛媛	内子町立大瀬中学校	1年	東影喜子	猪の涙
第31回	平成 21年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	熊本	産山村立産山中学校	3年	中村那津三	なぜ母牛「あやか」は死んだのか
			沖縄	石垣市立大濱中学校	3年	新城利絵	島の心をメロディにのせて
			富山	高岡市立志貴野中学校	3年	小久保緑	田んぼと私
			大分	竹田市立竹田中学校	3年	廣瀬岳	メッセージ～特攻基地・知覧～
第32回	平成 22年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事賞 審査委員会委員長賞	宮城	気仙沼市立気仙沼中学校	3年	志田晶	私も「小さな波」となって
			静岡	牧之原市立相良中学校	3年	瀧谷美紀	支えられた私
			新潟	村上市立平林中学校	3年	小池尚輝	音のない世界、声のない会話
			奈良	智辯学園奈良カレッジ中学校部	3年	小川歌穂	スマイルと真心はタダ
第33回	平成 23年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事賞 審査委員会委員長賞	島根	安来市立広瀬中学校	3年	田邊光	故郷を思っ
			静岡	沼津市立第三中学校	3年	内村繪笑	命
			愛知	豊田市立足助中学校	3年	藤井成一	父の言葉の意味を知って
			愛媛	新居浜市立西中学校	3年	飯尾まい	命のチキンカレー
第34回	平成 24年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事賞 審査委員会委員長賞	長崎	佐世保市立黒島中学校	3年	松本朋之	黒島だからこそ
			福島	いわき市立勿来第二中学校	3年	瓜生健悟	震災を乗り越えて
			新潟	柏崎市立第一中学校	3年	西澤望美	過去と今と未来を生きる
			東京	葛飾区立常盤中学校	2年	齋藤麗香	家族の本当の意味
第35回	平成 25年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事賞 審査委員会委員長賞	岩手	陸前高田市立気仙中学校	3年	小笠原和恵	高らかに 響け

回数	年度	受賞名	都道府県名	学校名	学年	氏名	発表テーマ
第34回	平成 24年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	千葉	千葉県立千葉中学校	3年	山本恭輔	リアルに人とつながるということ
			福井	福井県立盲学校	3年	山本穰梨	私の夢 私の生き方
			熊本	宇土市立網田中学校	3年	加来萌	父と私がふるさと網田を愛する理由
			福島	いわき市立中央台北中学校	3年	山野邊のどか	助け合いのバトン
第35回	平成 25年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	宮城	気仙沼市立小原木中学校	3年	梶川裕登	忘れないために
			大分	杵築市立杵築中学校	3年	大柳涼子	マイファミリー
			兵庫	赤穂市立有年中学校	3年	松本優香	十五歳の決意
			愛知	豊田市立石野中学校	3年	安藤明日香	伝統を受け継ぐ
第36回	平成 26年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	福岡	飯塚市立飯塚第一中学校	3年	山本由菜	子は宝～自分の命より大切なもの
			山形	酒田市立第六中学校	3年	菅原すみれ	唄い継ぐ想い
			高知	中土佐町立久礼中学校	2年	林萌桃	いのちの花・咲いて
			島根	吉賀町立柿木中学校	3年	河野鉄太	鬼退治
第37回	平成 27年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	沖縄	那覇市立那覇中学校	2年	高橋天洋	「中国人」という名の偏見
			広島	広島市立国泰寺中学校	2年	藤井志穂	語る思いと聞く思い
			東京	板橋区立中台中学校	3年	張哲語	中国と日本の狭間にて
			大阪	堺市立登美丘中学校	3年	伊勢川翠	素晴らしい奇跡の集合体
第38回	平成 28年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	群馬	明照学園樹徳中学校	3年	夢沼花音	10万分の1.5の奇跡
			沖縄	八重瀬町立東風平中学校	3年	河野水穂	乗り越えたからこそ見えたもの
			岐阜	関市立旭ヶ丘中学校	3年	大見夏鈴	障がいとは個性
			広島	広島市立二葉中学校	2年	牟田悠一郎	戦争を知ること
第39回	平成 29年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	三重	四日市市立羽津中学校	3年	中前純奈	伝えたいこと
			新潟	五泉市立五泉北中学校	1年	高橋心太郎	みんなが幸福な社会を
			新潟	新潟県立燕中等教育学校	2年	平澤幸芽	仲間を守る一言
			島根	海士町立海士中学校	3年	井手上漠	カラフル
第40回	平成 30年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	群馬	太田市立南中学校	3年	森田愛美	私は、私の足で生きていく。
			愛知	蒲郡市立蒲郡中学校	3年	荒島彩乃	たった一言が言えなくて
			鹿児島	鹿児島市立坂元中学校	2年	松元一真	本当の平和へ
			山形	天童市立第三中学校	3年	岩淵礼姫	人生を駆け抜ける
第41回	令和 元年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	島根	隠岐の島町立西郷中学校	1年	高梨はな	ダブル
			熊本	御船町立御船中学校	3年	坂本優	響け！幸せのメロディー
			静岡	浜松市立佐久間中学校	3年	内山ほの葉	自分を好きになる
			愛知	豊田市立井郷中学校	3年	富田真亜玖	思いやりは言葉を超える
第42回	令和 2年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	東京	筑波大学附属視覚特別支援学校(中学部)	1年	藤田大悟	心の扉
			熊本	熊本大学教育学部附属中学校	3年	廣岡里奈	私が望む優しい未来は
			山梨	北杜市立甲陵中学校	2年	小松日菜	繋ぐ糸が切れないように
			宮城	登米市立佐沼中学校	3年	加藤海音	十人十色
第43回	令和 3年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	静岡	静岡市立清水両河内中学校	3年	望月香琳	地域と共にある生徒会～今、私たちにできること、すべきこと
			鹿児島	霧島市立横川中学校	3年	池島音羽	言葉を紡ぐ
			栃木	大田原市立金田北中学校	3年	荒井千恵理	静から動へ
			愛知	豊田市立末野原中学校	3年	戸塚優羽	目には見えないもの
第44回	令和 4年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞 審査委員会委員長賞	静岡	浜松市立北浜中学校	3年	村松グリン良智美	人生のかけがえのない財産について
			島根	松江市立穴道中学校	3年	武田はぐみ	「らしさ」を輝かせる
			熊本	熊本市立出水南中学校	3年	大田直人	你好ニッポン
			岐阜	養老町立高田中学校	3年	細川士禾	認め合うことの大切さ
第45回	令和 5年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	山梨	北杜市立甲陵中学校	3年	前橋真子	あなたの声、心に届け
			長崎	大村市立玖島中学校	3年	赤川明信	日本を耕す
			栃木	大田原市立親園中学校	3年	阿久津結花	私が育てる「結(ゆい)」
			宮城	塩竈市立玉川中学校	3年	浅野友希	私のスタートライン
第45回	令和 5年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	滋賀	米原市立米原中学校	3年	田島桂	水餃子
			鳥取	米子市立東山中学校	3年	矢曳未来	私が歩む夢への道
			山形	酒田市立第一中学校	3年	富樫蒼汰	大切な家族
			愛知	常滑市立常滑中学校	3年	竹内愛子	ガチャガチャ言っても始まらないか！
第45回	令和 5年度	内閣総理大臣賞 文部科学大臣賞 国立青少年教育振興機構理事長賞 審査委員会委員長賞	北海道	下川町立下川中学校	3年	三浦かな	恨みを愛へ

令和5年度都道府県大会実施概要

都道府県名	主催者		大会名	
	開催期日		会場	
	発表者数	応募者数	参加学校数	視聴者数
	実施内容			

北海道・東北ブロック (1道6県 応募者数 54,391名)

1 北海道	公益財団法人北海道青少年育成協会、北海道	令和5年度北海道青少年育成大会 (「少年の主張」全道大会)		
	令和5年9月8日(金)	道民活動センター (かでの2・7) かでのアスビックホール		
	16名	27,197名	287校	320名
	各総合振興局・振興局地区大会の最優秀者14名及び札幌市代表者2名による北海道大会を開催。 最優秀賞(北海道知事賞)1名、優秀賞(北海道教育委員会教育長賞・北海道PTA連合会会長賞・(公財)北海道青少年育成協会会長賞各1名)3名、奨励賞12名 審査委員5名			
2 青森県	青少年育成青森県民会議	第45回青森県少年の主張大会		
	令和5年9月29日(金)	鱒ヶ沢町立鱒ヶ沢中学校		
	8名	26名	13校	221名
	県内の中学生から募集し、原稿審査で選考された8名による青森県大会を開催。 最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞5名を選考。審査員5名			
3 岩手県	わたしの主張岩手県大会実行委員会	第25回わたしの主張岩手県大会		
	令和5年9月13日(水)	盛岡劇場メインホール		
	17名	4,746名	146校	260名
	地区大会より推薦された17名による岩手県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞3名、審査員7名			
4 宮城県	青少年のための宮城県民会議・河北新報社	令和5年度少年の主張宮城県大会		
	令和5年9月28日	利府町文化交流センター・リフノス		
	13名	9,370名	171校	108名
	12地区で地区大会を実施し、地区大会から推薦された代表者13名(仙台市は各区1名、仙台地区は2名、他地区は1名による宮城県大会を開催。 宮城県知事賞1名、青少年のための宮城県民会議会長賞2名、優良賞(県大会出場者全員)。審査員6名			
5 秋田県	公益社団法人青少年育成秋田県民会議、秋田県	わたしの主張2023(第45回少年の主張秋田県大会)		
	令和5年9月7日(木)	秋田市立泉中学校		
	10名	3,098名	25校	700名
	県北・県中央・県南地区で予選大会を開催。各地区大会優秀者9名及び、県大会開催学校推薦者1名の計10名による、秋田県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞3名、優良賞6名を選考。審査委員6名			
6 山形県	(公社)山形県防犯協会連合会、山形県青少年育成県民会議、(株)山形新聞社、山形放送(株)	第62回山形県少年の主張大会 ～いま伝えたい 私のメッセージ～		
	令和5年9月24日	山形国際交流プラザ 山形ビッグウイング 大会議室		
	15名	249名	75校	約100名
	各ブロック大会において選考された代表者15名(山形6名、最北3名、庄内3名、置賜3名)による山形県大会を開催。 最優秀賞1名、優秀賞2名、優良賞2名、努力賞10名を選考。審査員5名			
7 福島県	福島県青少年育成県民会議	第45回少年の主張福島県大会		
	令和5年9月21日(木)	新地町文化交流センター		
	16名	9,705名	167校	200名
	各青少年育成市町村民会議から推薦された作品の中で、作文審査により選ばれた15名及び開催地の中学生1名による福島県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞5名、優良賞10名を選考。審査員6名			

関東・甲信越静岡ブロック (1都10県 応募者数 117,854名)

8 茨城県	公益社団法人茨城県青少年育成協会	令和5年度少年の主張茨城県大会		
	令和5年9月28日(木)	常総市地域交流センター		
	10名	11,627名	138校	750名
	各中学校2作品以内の推薦された作品について、主張文審査委員会で選出された作品の作者10名による茨城県大会を開催。大会審査により、優秀賞(県大会出場者全員)、茨城県知事賞、茨城県議会議長賞、茨城県教育委員会教育長賞(各1名)、特別賞として、水戸西ライオンズクラブ会長賞(茨城県知事賞受賞者)、鹿島アントラーズ賞(各賞受賞者3名)を選考。審査委員6名			
9 栃木県	栃木県、栃木県教育委員会、栃木県青少年育成県民会議((公財)とちぎ未来づくり財団)、市町、市町教育委員会、各地区青少年育成連絡協議会	第46回栃木県少年の主張発表県大会		
	令和5年9月16日(土)	栃木県総合文化センター サブホール		
	16名	12,323名	159校	168名
	県内8地区で各中学校の代表1名が参加する地区大会を開催し、各地区大会で選出された16名による栃木県大会を開催。 最優秀賞(栃木県知事賞)1名、優秀賞(栃木県教育委員会教育長賞)3名、奨励賞(栃木県青少年育成県民会議理事長賞)12名を選考。審査委員9名			
10 群馬県	群馬県、群馬県教育委員会、群馬県青少年育成推進会議、市町村教育委員会	第45回少年の主張群馬県大会		
	令和5年9月16日	群馬県公社総合ビル		
	16名	38,782名	161校	123名
	市町村大会、教育事務所ブロック大会を経て選出された16名による群馬県大会を開催。 最優秀賞1名、優秀賞4名、努力賞11名を選考。審査委員7名			
11 埼玉県	埼玉県、埼玉県教育委員会、青少年育成埼玉県民会議	令和5年度少年の主張埼玉県大会		
	令和5年8月20日	さいたま共済会館大ホール		
	5名	19,000名	33校	150名
	作文審査により選出された5名(中学生の部)による埼玉県大会を開催。 最優秀賞(知事賞)1名、優秀賞(教育長賞)1名、優良賞(県民会議会長賞)3名を選考。			

12 千葉県	千葉県青少年総合対策本部	「私の思い」～中学生の主張～千葉県大会		
	令和5年9月9日(土)	千葉県教育会館		
	11名	1,228名	34校	115名
応募作文の中から学校長及び団体長推薦作文について、一次、二次の作文審査を行い、選出された12名による千葉県大会を開催。最優秀賞(県知事賞)1名、優秀賞2名、審査員特別賞1名、奨励賞8名を選考。審査委員9名				
13 東京都	東京都	令和5年度 中学生の主張東京都大会		
	令和5年9月10日(日)	東京都議会議事堂1階 都民ホール		
	10名	5,297名	47校3団体	42名
東京都による作文審査を行い、東京都代表選考発表者10名及び奨励賞10名を選出。東京都代表選考者10名による東京都大会を開催。最優秀賞(知事賞)1名、優秀賞(東京都教育委員会賞)2名、優良賞7名を選考。審査委員6名				
14 神奈川県	神奈川県	中学生の主張 in かながわ		
	令和5年9月24日	神奈川県立青少年センター スタジオ HIKARI		
	7名	745名	25校	87名
作文審査による事前審査会を実施し、発表大会出場者7名、奨励賞(神奈川県立青少年センター館長賞)受賞者10名を選出。発表大会出場者7名による神奈川県大会を開催。 最優秀賞(神奈川県知事賞)1名、優秀賞6名(神奈川県教育長賞・神奈川県福祉子どもみらい局長賞・神奈川新聞社賞・NHK横浜放送局長賞・テレビ神奈川賞・神奈川県青少年育成アドバイザー連絡協議会会長賞各1名)を選考。審査委員5名				
15 新潟県	新潟県、新潟県教育委員会、新潟県青少年健全育成県民会議	令和5年度新潟県少年の主張大会～わたしの主張～		
	令和5年9月16日(土)	巻文化会館(新潟市西蒲区巻甲635)		
	14名	16,368名	145校	120名
県内を13地区に分け、地区ごとに発表者を選出。各地区大会において選出された14名による新潟県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞2名、奨励賞11名(奨励賞の内、審査員特別賞1名)を選考。審査委員9名				
16 山梨県	公益財団法人山梨県青少年協会、青少年育成山梨県民会議事業実行委員会	第45回少年の主張山梨県大会～わたしの主張2023～		
	令和5年8月19日(土)	山梨県立青少年センター 別館2階「多目的ホール」		
	10名	423名	15校	40名
中学校において校内審査後、校長推薦のうえ、県大会に応募。事前審査において発表者を選出。選出された10名による山梨県大会を開催。最優秀賞(山梨県教育長賞)1名、優秀賞(山梨日日新聞社賞・山梨放送賞・NHK甲府放送局長賞・テレビ山梨社長賞各1名)(青少年育成山梨県民会議会長賞5名)を選考。審査委員7名				
17 長野県	長野県将来世代応援県民会議、長野県子ども・若者支援推進本部(長野県、長野県教育委員会、長野県警察本部)	令和5年度「少年の主張長野県大会」		
	令和5年9月7日(木)	松川村立松川中学校		
	10名	574名	19校	307名
各各地方事務局長から推薦された11名(各地域事務局から1名、但し開催中学校がある市町村を所轄する事務局は、開催中学校推薦を含む2名)による長野県大会を開催。長野県知事賞1名、優秀賞2名、優良賞8名				
18 静岡県	静岡県教育委員会、静岡県青少年育成会議	わたしの主張2023 静岡県大会		
	令和5年8月22日(火)	長泉町文化センターベルフォーレ		
	13名	11,487名	135校	550名
作文審査会により静岡東・静岡西教育事務所管内8名、静岡市2名、浜松市2名、開催町1名の選出された13名による静岡県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞3名、優良賞9名、共感賞1名。審査委員7名				

中部・近畿ブロック(2府10県 応募者数 146,067名)

19 富山県	富山県、富山県教育委員会、青少年育成富山県民会議	第45回少年の主張富山県大会		
	令和5年8月10日(木)	パレプラン高志会館カルチャーホール		
	10名	1,871名	19校	40名
学校長及び市町村教育委員会から推薦を受けた作品の中から、作文審査により、入賞作品を10点程度選考し富山県大会を開催。最優秀賞1名、審査員特別賞2名、優秀賞7名を選考。				
20 石川県	石川県健民運動推進本部、石川県、石川県教育委員会	令和5年度 少年の主張石川県大会		
	令和5年8月27日(日)	石川県青少年総合研修センター		
	16名	25,827名	74校	90名
各地区大会から選出された16名(各地区4名ずつ)による石川県大会を開催。最優秀賞(石川県知事賞)1名、優秀賞(石川県教育委員会賞)2名、奨励賞(石川県健民運動推進本部長賞)13名を選考。				
21 福井県	公益財団法人青少年育成福井県民会議、福井県青少年総合対策本部	令和5年度「少年の主張」コンクール福井県大会		
	令和5年8月23日(水)	きらめきみなと館(敦賀市)		
	8名	6,010名	29校	190名
ブロック審査で選出された、8名による福井県大会を開催。 福井県知事賞1名、(公財)青少年育成福井県民会議会長賞1名、国際ソロプチミスト福井会長賞1名、福井ライオンズクラブ賞1名、福井新聞社賞1名、NHK福井放送局賞1名、FBC賞1名、福井テレビ賞1名 審査員10名				
22 愛知県	愛知県、愛知県青少年育成県民会議	令和5年度少年の主張愛知県大会		
	令和5年8月18日(金)	尾張旭市文化会館		
	14名	36,432名	245校	330名
学校選考、地区ブロック審査を経て選ばれた14名による愛知県大会を開催。最優秀賞1名、優秀賞4名、共感賞1名、奨励賞14名を選考。審査委員7名				

23 三重県	公益財団法人三重こどもわかもの育成財団 桑員地区中学生のメッセージ実行委員会	中学生のメッセージ 2023 (第 45 回少年の主張三重県大会)		
	令和 5 年 8 月 26 日 (土)	北勢市民会館 さくらホール		
	14 名	8,191 名	59 校	350 名
提出された作品の中から第 1 次、2 次選考を経て選ばれた 14 名による三重県大会を開催。 最優秀賞 1 名、優秀賞 3 名、優良賞 10 名を選考。審査委員 10 名				
24 岐阜県	岐阜県、公益社団法人岐阜県青少年育成県民会議	第 45 回少年の主張岐阜県大会 ~わたしの主張 2023 ~		
	令和 5 年 8 月 3 日 (木)	垂井町文化会館 大ホール		
	17 名	14,183 名	176 校	230 名
市町村単位で審査が行われ、各圏域より推薦された計 17 名による岐阜県大会を開催。 県知事賞 1 名、青少年育成県民会議会長賞 1 名、県教育委員会賞 1 名、岐阜新聞・岐阜放送賞各 1 名、優秀賞 13 名を選考。				
25 滋賀県	滋賀県青少年育成県民会議	滋賀県第 26 回中学生広場「私の思い 2023」県広場		
	令和 5 年 8 月 19 日 (土)	日野町町民会館わたむきホール虹		
	12 名	24,490 名	99 校	320 名
市町民会議から提出のあった意見作文の中から県広場での発表者 12 名による滋賀県大会を開催。 最優秀賞 (知事賞) 1 名、優秀賞 (県議会議員賞、県教育長賞) 2 名、優良賞 (県民会議会長賞) 9 名を選考。審査委員 10 名				
26 京都府	公益社団法人京都府青少年育成協会、京都府 PTA 協議会、京都市 PTA 連絡協議会	第 45 回「少年の主張京都府大会」		
	令和 5 年 9 月 23 日 (土)	本願寺間法会館「多目的ホール」		
	15 名	7,040 名	38 校	122 名
応募された作文の中から、審査委員会により選出された大会発表者 15 名による京都府大会を開催。 京都府知事賞 1 名、京都府青少年育成協会会長賞 1 名、京都府教育委員会教育長賞 1 名、京都市教育長賞 1 名、京都市市町村教育委員会連合会会長賞 1 名、京都府公立中学校長会会長賞 1 名、京都府 PTA 協議会会長賞 1 名、京都市 PTA 連絡協議会会長賞 1 名、京都新聞賞 1 名、KBS 京都賞 1 名、京都府青少年育成協会会長奨励賞 5 名。審査委員 9 名				
27 大阪府	青少年育成大阪府民会議、大阪府	第 45 回「中学生の主張大阪府大会～伝えよう！君のメッセージ～」		
	令和 5 年 8 月 20 日 (日)	大阪府立男女共同参画・青少年センター		
	10 名	1,034 名	12 校	196 名
府内の応募作品の中から選考委員による作文審査において 10 名以内による大阪府大会を開催。最優秀賞 (大阪府知事賞) 1 名、優秀賞 (大阪府教育委員会賞・NHK 大阪放送局賞・国際ソロプチミスト大阪賞) 3 名、優良賞 (審査委員特別賞) 1 名、優良賞 5 名、努力賞 10 名以内を選考。審査委員 6 名				
28 兵庫県	公益財団法人兵庫県青少年本部	少年の主張兵庫県大会「中学生のメッセージ 2023」		
	令和 5 年 9 月 23 日 (土)	兵庫県民会館 9 階 けんみんホール		
	10 名	8,383 名	87 校	124 名
県内 10 地区において原稿審査及び地方大会で選出された 10 名による兵庫県大会を開催。 知事賞 1 名、青少年本部理事長優秀賞 2 名、青少年本部理事長奨励賞 7 名、審査員 7 名				
29 奈良県	奈良県、奈良県教育委員会、奈良県子ども・若者支援団体協議会	第 45 回「少年の主張」奈良県大会～わたしの主張 2023 ~		
	令和 5 年 9 月 10 日	なら歴史芸術文化村 芸術文化体験棟 ホール		
	10 名	3,342 名	19 校	200 名
作文審査により選出された 10 名による奈良県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 2 名、優良賞 7 名、努力賞 90 名。審査員 8 名				
30 和歌山県	公益社団法人和歌山県青少年育成協会	「少年メッセージ 2023」和歌山県大会		
	令和 5 年 7 月 29 日	紀美野町文化センター (紀美野町)		
	17 名	9,264 名	105 校	300 名
応募作文から、和歌山市及び各振興局単位で選出された優秀作品各 2 名 (県大会開催地方は 4 名) 合計 17 名による和歌山県大会を開催。金賞 1 名、銀賞 2 名、銅賞 3 名、特別賞 2 名、入賞 9 名を選考。審査委員 8 名				

中国・四国ブロック (9 県 応募者数 42,785 名)

31 鳥取県	青少年育成鳥取県民会議	令和 5 年度「第 45 回少年の主張鳥取県大会」		
	令和 5 年 9 月 15 日 (金)	北条農村環境改善センター		
	12 名	219 名	9 校	130 名
応募作品の中から書類審査を行い、選出された 12 名による鳥取県大会を開催。 最優秀賞 (鳥取県知事杯) 1 名、優秀賞 (県教育長杯、県議会議員杯、県市長会長杯、県町村会長杯、新日本海新聞社長杯) 5 名、優良賞 6 名を選考。審査委員 6 名				
32 島根県	青少年育成島根県民会議・島根県中学校長会 (主管：江津市中学校長会)	令和 5 年度 少年の主張島根県大会		
	令和 5 年 9 月 28 日 (木)	江津市総合市民センター		
	16 名	17,240 名	97 校	450 名
地区中学校校長より推薦された 16 名による島根県大会を開催。 県知事賞 1 名、県教育長賞 1 名、県警察本部長賞 1 名、県民会議会長賞 1 名、審査委員特別賞 2 名。審査委員 7 名				
33 岡山県	公益社団法人岡山県青少年育成県民会議	第 45 回少年の主張岡山県大会「いま、中学生が訴えたいこと」		
	令和 5 年 8 月 24 日 (木)	岡山県天神山文化プラザ		
	14 名	5,255 名	15 校	60 名
応募作品から審査の上、14 名の入賞者による岡山県大会を開催。最優秀賞 1 名、優秀賞 4 名、優良賞 9 名を選考。審査員 7 名				
34 広島県	公益社団法人青少年育成広島県民会議、広島県中学校話し方連盟	「少年の主張」・中学生話し方大会 2023		
	令和 5 年 9 月 2 日 (土)	広島県社会福祉会館		
	15 名	3,006 名	49 校	70 名
提出された原稿を主催者において審査し、選考された 15 名による広島県大会を開催。 広島県知事賞 1 名、(公社)青少年育成広島県民会議会長賞 1 名、広島県中学校話し方連盟会長賞 1 名、国際ソロプチミスト広島会長賞 1 名、広島清流ライオンズクラブ会長賞 1 名、優秀賞 3 名、基準特別賞 1 名、優良賞 6 名を選考。審査員 11 名				

35 山口県	山口県青少年育成県民会議 令和5年8月26日(土)	少年の主張コンクール山口県大会 山口県健康づくりセンター(多目的ホール)
	8名	945名
36 徳島県	青少年育成徳島県民会議 徳島県保護司会連合会 徳島県中学校長会 令和5年9月13日(水)	第69回青少年非行防止県下中学校生徒弁論大会 令和5年度少年の主張徳島県大会 徳島県立二十一世紀館イベントホール
	10名(1名欠席)	7,068名
37 香川県	第73回“社会を明るくする運動”香川県推進委員会、青少年育成香川県民会議、香川県中学校長会、香川県保護司会連合会 令和5年7月7日(金)	第69回青少年非行防止県下中学校生徒弁論大会 令和5年度少年の主張徳島県大会 高松市香川総合体育館
	12名	7,117名
38 愛媛県	愛媛県青少年育成協議会、愛媛県、愛媛県教育委員会 令和5年8月5日(土)	令和5年度愛媛の未来をひらく少年の主張大会 愛媛県生涯学習センター 県民小劇場ホール
	10名	1,563名
39 高知県	青少年育成高知県民会議 令和5年9月3日	令和5年度第45回「少年の主張」高知県大会 高知県立県民文化ホールグリーンホール
	9名	372名

九州ブロック(8県 応募者数 22,572名)

40 福岡県	公益社団法人福岡県青少年育成県民会議 令和5年8月27日	令和5年度少年の主張福岡県大会 イイヅカコスモスコモン(福岡県飯塚市)
	15名	255名
41 佐賀県	佐賀県 佐賀県教育委員会 佐賀県青少年育成県民会議 令和5年9月10日(日)	令和5年度「第45回少年の主張佐賀県大会」 アバンセホール(佐賀県立生涯学習センター)
	10名	313名
42 長崎県	長崎県青少年育成県民会議 令和5年8月25日(金)	第45回(令和5年度)「少年の主張長崎県大会」「わたしの主張2023」 シーハットおおむら さくらホール
	12名	9,940名
43 熊本県	熊本県、熊本県教育委員会、熊本県青少年育成県民会議 令和5年(2023年)9月2日(土)	第45回「少年の主張」熊本県大会 人吉市カルチャーパレス
	13名	2,019名
44 大分県	大分県青少年育成県民会議 令和5年8月31日(木)	令和5年度(第45回)少年の主張大分県大会 くすまちメルサンホール
	10名	1,487名
45 宮崎県	公益社団法人宮崎県青少年育成県民会議 令和5年8月3日(木)	令和5年度「青少年の主張」宮崎県大会 宮崎市民プラザ オルブライトホール
	10名	993名
46 鹿児島県	鹿児島県、鹿児島県青少年育成県民会議 令和5年8月6日(日)	令和5年度「第45回少年の主張鹿児島県大会」 鹿児島県青少年会館 大ホール
	10名	1,925名
47 沖縄県	公益社団法人沖縄県青少年育成県民会議 令和5年9月22日(金)	第45回沖縄県「少年の主張大会」 名護市民会館 中ホール
	12名	5,640名

第 46 回少年の主張全国大会 開催のお知らせ

- 開催日時：令和 6 年 11 月 24 日（日）
- 開催場所：国立オリンピック記念青少年総合センター
（住所：〒 151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号）
- 対 象：日本在住の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢にあるもの。
※国籍は問わないが、日本語で発表できること。
なお、作品は未発表、自作のものに限ります。
- 主 催：国立青少年教育振興機構
- 特別協力：公益財団法人上廣倫理財団
- 協 力：都道府県、青少年育成道府県民会議、全日本中学校長会、
（予 定）日本私立中学高等学校連合会、公益社団法人日本 PTA 全国協議会、
全国青少年育成県民会議連合会
- 後 援：こども家庭庁、文部科学省、東京都教育委員会、日本放送協会、
（予 定）一般社団法人日本民間放送連盟、一般社団法人日本新聞協会
社会福祉法人全国社会福祉協議会
- 主張発表者（出場者）：
 - (1) 主張発表者
各都道府県より推薦された地方大会（都道府県大会）優秀者 1 名、計 47 名の中からブロック代表として選ばれた 12 名が主張発表を行います。
 - (2) ブロック代表定数
全国を 5 ブロックに分け、ブロック毎に出場者数を定め、それぞれの数のブロック代表を選出します。
 - 北海道・東北ブロック・・・2 名
 - 関東・甲信越静ブロック・・・3 名
 - 中部・近畿ブロック・・・3 名
 - 中国・四国ブロック・・・2 名
 - 九州ブロック・・・2 名

※ 都道府県大会の詳細につきましては、各主催者にお問い合わせ願います。

第 45 回少年の主張全国大会報告書～わたしの主張 2023 ～

令和 6 年 3 月発行

編集 国立青少年教育振興機構

〒 151-0052 東京都渋谷区代々木神園町 3 番 1 号

<https://www.niye.go.jp>

担当 教育事業部事業企画課

電話 : 03-6407-7726 FAX : 03-6407-7699

※転載の際は上記へご連絡ください。



体験の風を
おこそう